

源 藤 遺 跡

宮崎市文化財調査報告書



1987

宮崎市教育委員会

序

源藤遺跡は、本市を南東に流れる大淀川の南、清武町との境に近接する源藤町字源藤にあり、從来からは、周知の埋蔵文化財包藏地、中園遺跡とよんできたところですが、近年急速に進行してきました開発事業のなかで、清武町加納の大型団地造成に派生し、源藤遺跡もその渦中におかれることになりました。

発掘調査は、源藤宅地造成実行委員会の開発届けにより、昭和60年2月に試掘調査に着手し、遺跡の存在を確認しましたので、同年5月から約3ヶ月を費して調査を実施して記録保存することにしました。

発掘調査では、土師器・須恵器・石器・弥生式土器片等の出土品の外、多数の住居跡や土塁等が検出でき、成果の多い調査であったと思っています。

この報告書が、今後の遺跡調査研究の一助として、古代宮崎の歴史的背景を探る参考として活用されれば幸いです。

刊行にあたり、発掘調査におきまして種々御配慮、御協力いただきました関係各位をはじめ、御指導、御助言をいただきました諸先生方、並びに炎天下のもとで作業に従事して下さった調査員、作業員の方々に深甚の謝意を表します。

昭和62年3月

宮崎市教育委員会

教育長 柚木崎 敏

例　　言

1. 本書は、源藤ハイランド宅地造成工事に伴う、事前発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、源藤宅地造成実行委員会（XXXXXXXXXX）の委託を受け、昭和60年5月14日より9月18日までの期間において、宮崎市教育委員会が実施した。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体	宮崎市教育委員会		
調査員	社会教育課	嘱託	伊東　但
	タ	タ	荒武　麗子
調査統括	タ	主査	野間　重孝
調査指導・協力	宮崎県文化課	主任主事	長津　宗重
	タ	主事	日高　孝治
調査補助	別府大学	学生	的場　丈明
	タ	タ	長友　郁子
遺物整理	社会教育課	嘱託	西本　州司・橋本　博文

4. 調査における実測及び測量は、伊東、荒武、長津、日高、的場、長友が分担して行ない、写真撮影は伊東が行なった。
5. 本書の執筆及び編集は伊東が行なった。
6. 本書に掲載した図面の作成は、伊東、的場が行ない、トレースは伊東が行なった。
7. 調査に当っては、北九州市立考古博物館館長、小田富士雄氏、国学院大学教授、乙益重隆氏、奈良大学教授、水野正好氏の御指導、御助言をいただいた。
8. 本書、挿図中の方位はすべて磁北である。
9. 図版中の番号は挿図番号を表す。

本文目次

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の立地と環境	1・3
第3節 調査の概要	3

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 住居跡及び土塀	
1) 2号住居跡	9
2) 3号住居跡、9号土塀	11
3) 3号住居跡出土遺物	13
4) 9号土塀出土遺物	13
5) 6号・12号住居跡	16
6) 8号・9号・10号・11号住居跡	16
7) 32号住居跡	23
8) 5号住居跡	24
9) 4号・13号・14号・15号・33号・34号住居跡、16号・17号土塀	27
10) 4号・13号・14号・15号・33号・34号住居跡、16号・17号土塀出土物遺物	27
11) 17号・18号住居跡、30号土塀	30
12) 7号住居跡	34
13) 30号住居跡	36
14) 25号住居跡	38
15) 22号・31号住居跡	39
16) 19号・20号・23号・24号・35号住居跡	45
17) 21号住居跡	48
18) 28号住居跡	49
19) 10号・11号・12号・13号・14号・15号土塀	51
20) 37号、18号土塀	56
21) 26号住居跡	59
22) 27号住居跡、19号土塀	60
23) 29号、36号住居跡	62
24) 5号土塀	65
第2節 その他の遺構と遺物	
1) 先土器時代の遺物	67～68
2) 縄文時代の遺構と遺物	68
3) スリバチ状大型遺構	69

4) 1号土器通り	71
5) 1号土壙墓	73
6) 2号土壙墓	74
7) 粘土土塊	75
8) 一字一石經	75
第Ⅲ章 結語	75~76

挿 図 目 次

第1図 源藤遺跡位置図	2
第2図 源藤遺跡周辺地形図	5, 6
第3図 源藤遺跡全体図	7, 8
第4図 2号住居跡実測図	9
第5図 2号住居跡出土遺物実測図	10
第6図 3号住居跡, 9号土塙実測図	11
第7図 3号住居跡出土遺物実測図	12
第8図 9号土塙出土遺物実測図	14
第9図 6号・12号住居跡実測図	15
第10図 6号住居跡出土遺物実測図	17
第11図 12号住居跡出土遺物実測図	18
第12図 8号・9号・10号・11号住居跡実測図	19, 20
第13図 8号・9号・10号住居跡出土遺物実測図	21
第14図 10号・11号住居跡出土遺物実測図	22
第15図 32号住居跡実測図	23
第16図 32号住居跡出土遺物実測図	23
第17図 5号住居跡実測図	24
第18図 5号住居跡出土遺物実測図	24
第19図 4号・13号・14号・15号・33号・34号住居跡, 16号・17号土塙実測図	25, 26
第20図 4号・13号・14号・15号・33号・34号住居跡出土遺物実測図	28
第21図 16号・17号土塙出土遺物実測図	29
第22図 17号住居跡, 30号土塙実測図	30
第23図 18号住居跡実測図	31
第24図 17号・18号住居跡出土遺物実測図	32
第25図 30号土塙出土遺物実測図	33
第26図 7号住居跡実測図	34
第27図 7号住居跡出土遺物実測図	35
第28図 30号住居跡実測図	36
第29図 30号住居跡出土遺物実測図	37
第30図 25号住居跡実測図	38
第31図 25号住居跡出土遺物実測図	39
第32図 22号・31号住居跡実測図	40
第33図 22号住居跡出土遺物実測図	40
第34図 22号住居跡出土遺物実測図	41

第35図	22号住居跡出土遺物実測図	42
第36図	19号・20号・23号・24号・35号住居跡実測図	43, 44
第37図	19号住居跡出土遺物実測図	45
第38図	20号・35号住居跡出土遺物実測図	46
第39図	23号・24号住居跡出土遺物実測図	47
第40図	21号住居跡実測図	48
第41図	21号住居跡出土遺物実測図	49
第42図	28号住居跡実測図, 28号住居跡出土遺物実測図	50
第43図	28号住居跡出土遺物実測図	51
第44図	10号・11号・12号・13号・14号・15号土塙実測図	52
第45図	10号土塙出土遺物実測図	52
第46図	10号・12号土塙出土遺物実測図	53
第47図	12号土塙出土遺物実測図	54
第48図	10号・11号・12号・14号・15号土塙出土遺物実測図	55
第49図	37号住居跡, 18号土塙実測図	56
第50図	37号住居跡出土遺物実測図	57
第51図	18号土塙出土遺物実測図	58
第52図	26号住居跡実測図	59
第53図	26号住居跡出土遺物実測図	59
第54図	27号住居跡, 19号土塙実測図	60
第55図	27号住居跡出土遺物実測図	61
第56図	19号土塙出土遺物実測図	61
第57図	19号土塙出土遺物実測図	62
第58図	29号・36号住居跡実測図	63
第59図	29号住居跡出土遺物実測図	63
第60図	36号住居跡出土遺物実測図	64
第61図	5号土塙実測図	65
第62図	5号土塙出土遺物実測図	65
第63図	5号土塙出土遺物実測図	66
第64図	石器実測図	67
第65図	縄文時代土塙群実測図	68
第66図	縄文時代土塙群出土遺物実測図	69
第67図	スリバチ状大型遺構出土遺物実測図	70
第68図	スリバチ状大型遺構出土遺物実測図	71
第69図	1号土器溜り出土状態実測図	71
第70図	1号土器溜り出土遺物実測図	72

第71図	1号上埴墓実測図	73
第72図	1号土埴墓出土遺物実測図	73
第73図	2号土埴墓実測図	74
第74図	2号土埴墓出土遺物実測図	74
第75図	粘土土埴実測図	75

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景	77
図版 2	調査風景	77
図版 3	2, 3号住居跡	77
図版 4	8, 9, 10, 11, 32号住居跡	77
図版 5	6号住居跡	77
図版 6	12号住居跡	77
図版 7	5号住居跡	78
図版 8	4, 13, 14, 15, 16, 33, 34号住居跡	78
図版 9	17号土塁	78
図版 10	16号土塁	78
図版 11	17, 18号住居跡	78
図版 12	18号住居跡竪	78
図版 13	7号住居跡	79
図版 14	30号住居跡	79
図版 15	19号住居跡	79
図版 16	20, 23号住居跡	79
図版 17	24, 22, 31号住居跡	79
図版 18	25号住居跡	79
図版 19	21号住居跡	80
図版 20	37号住居跡・18号土塁	80
図版 21	10, 11, 12, 13, 14号土塁	80
図版 22	28, 26号住居跡	80
図版 23	27号住居跡・19号土塁	80
図版 24	29, 36号住居跡	80
図版 25	スリバチ状大型遺構	81
図版 26	粘土土塁	81
図版 27	縄文早期土塁群	81
図版 28	C-4区重複遺構群	81
図版 29	C-3区遺構群	81
図版 30	5号土塁	81
図版 31	1号土塁墓	82
図版 32	2号土塁墓	82
図版 33	2号住居跡出土遺物	82
図版 34	3号住居跡出土遺物	83

図版 35	9号土塙出土遺物	83
図版 36	6号住居跡出土遺物	84
図版 37	12号住居跡出土遺物	84
図版 38	8, 9, 10, 11, 号住居跡出土遺物	85
図版 39	32号住居跡出土遺物	86
図版 40	5号住居跡出土遺物	86
図版 41	16, 17号土塙出土遺物	86
図版 42	4, 13, 14, 15, 33, 34号住居跡出土遺物	87
図版 43	17, 18号住居跡出土遺物	88
図版 44	30号土塙出土遺物	88
図版 45	7号住居跡出土遺物	89
図版 46	30号住居跡出土遺物	89
図版 47	25号住居跡出土遺物	90
図版 48	22号住居跡出土遺物	90
図版 49	22号住居跡出土遺物	91
図版 50	19, 20, 23, 24, 35号住居跡出土遺物	92
図版 51	23, 24号住居跡出土遺物	93
図版 52	21号住居跡出土遺物	93
図版 53	28号住居跡出土遺物	94
図版 54	10, 12号土塙出土遺物	94
図版 55	12, 13, 14, 15号土塙出土遺物	95
図版 56	37号住居跡出土遺物	96
図版 57	18号土塙出土遺物	96
図版 58	26号住居跡出土遺物	97
図版 59	27号住居跡出土遺物	97
図版 60	19号土塙出土遺物	97
図版 61	29, 36号住居跡出土遺物	98
図版 62	5号土塙出土遺物	98
図版 63	先土器時代石器	99
図版 64	縄文早期遺物	99
図版 65	スリバチ状大型遺構出土遺物	100
図版 66	1号土器窯り出土遺物	100
図版 67	1号土塙墓出土遺物	101
図版 68	2号土塙墓出土遺物	101
図版 69	一字一石絆	101

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経過

昭和58年12月、源藤遺跡にかかる大規模取引等事前指導申出があり、県地域振興課は、申請地が周知の文化財包蔵地であるがため、宮崎市教育委員会との協議を指導した。

昭和59年、10月より協議を開始し、試掘調査の実施を決定、同11月、源藤宅地造成実行委員会、[] よりの埋蔵文化財発掘届を受け、昭和60年2月4日から同3月1日の間実施した。

試掘調査の結果により、遺跡の存在範囲が確認された為、この地区を対象として、源藤宅地造成実行委員会の委託により、宮崎市教育委員会が調査主体となり、発掘調査を実施する事となった。

2. 遺跡の立地と環境

源藤遺跡は、宮崎市源藤町源藤に所在し、宮崎平野を一望に出来る、平野との比高差約20mの丘陵上に位置する。従来、中岡遺跡として周知の文化財包蔵地となっていた所でもある。本丘陵は、南九州に広く分布するシラスを基盤とし、丘陵の東側は尾根を持ちながらに降る（現在は宮崎南バイパスにより切断）が、他の周囲は急斜面で、地山のシラスが露頭している。丘陵上は小支谷により3分され、中腹部分にも所々、カッティングによる平坦面もある所から、中世城郭の可能性も指摘されて来た所である。

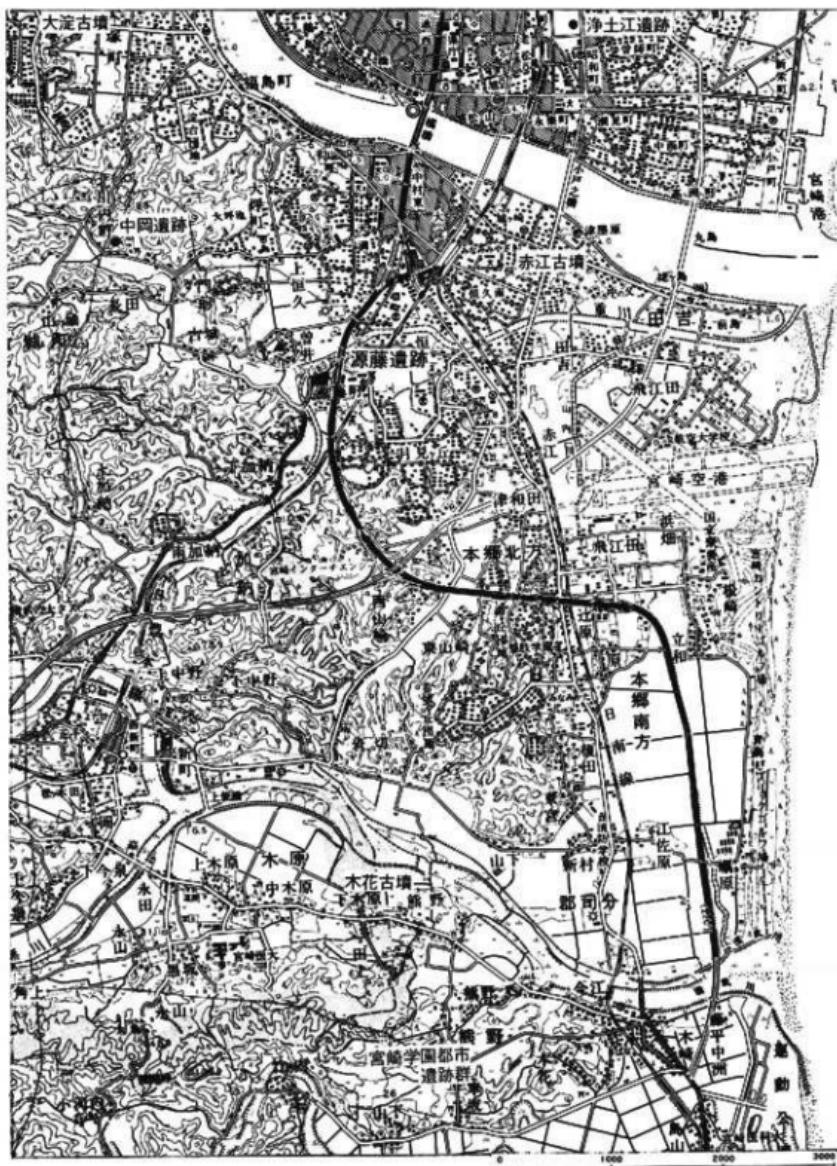
本丘陵から低地を狭んで北西約300mの対面する丘陵上には、伊東四十七城の一つに数えられる曾井城跡がある。この曾井城跡には、大正年間まで前方後円墳が存在し、この古墳から方格規矩四神鏡片とともに、貨泉が出土したとされている。

また、南西に約200m離れて、弥生時代後期から終末期とされる加納遺跡が、また西方2.2kmには弥生時代終末期の土器生産遺跡として、その性格や供給地が注目される中岡遺跡が所在している。

源藤遺跡の立地する丘陵の裾には県南の歴史的交通路、祇肥街道（国道269号線）が通っており、丘陵上から一望する事が出来る。この様な良好な立地条件から、城郭等の可能性も考えられたが、遺跡内には御堂があり、周辺に散在する石搭の碑文から、初瀬山、最勝寺と言う寺跡であった事がうかがわれる。

この最勝寺について、平部嶽南はその書「日向地誌」の中

初瀬山最勝寺址



第1圖 源藤遺跡位置圖

1 : 50,000

眞言宗古城村今福寺ノ末派ナリ曾井城址ノ東南ノ高岡上ニアリ明治三年庚午廢ス今畦園ナル日向記ヲ按スルニ天文十五年丁亥伊東祐兵舊領曾井ニ封セラレ明ル十六年戊子復貳肥ニ轉封アリ舊臣漆野能登守等乱ヲナス故ニ能登守以下七人ヲ株シテ其余党ヲ赦スト雖モ服セス三十六人曾井城ノ東南ナル初瀬山長命寺トテ觀音堂ノアリケルニ枯籠レリ・・・中略・・・・・・・・三十六人ノ内二十九人ヲ打取リシタルハ即是ナリ

と、日向記の天正十五、六年の記載の中に登場する“初瀬山長命寺”が前身であるとしている。

日向国史の中では、長命寺は曾井地頭長倉伊賀守祐允が伊東尹祐の病を折って創建、雲州の僧相瑜を招いて、大永元年十二月二十四日に成就したと記されている。

3. 調査の概要

今回の造成範囲は、丘陵上の西半分、約36,000m²にかかり、この範囲にわたり昭和60年2月4日から同3月1日の間試掘調査を行なった。

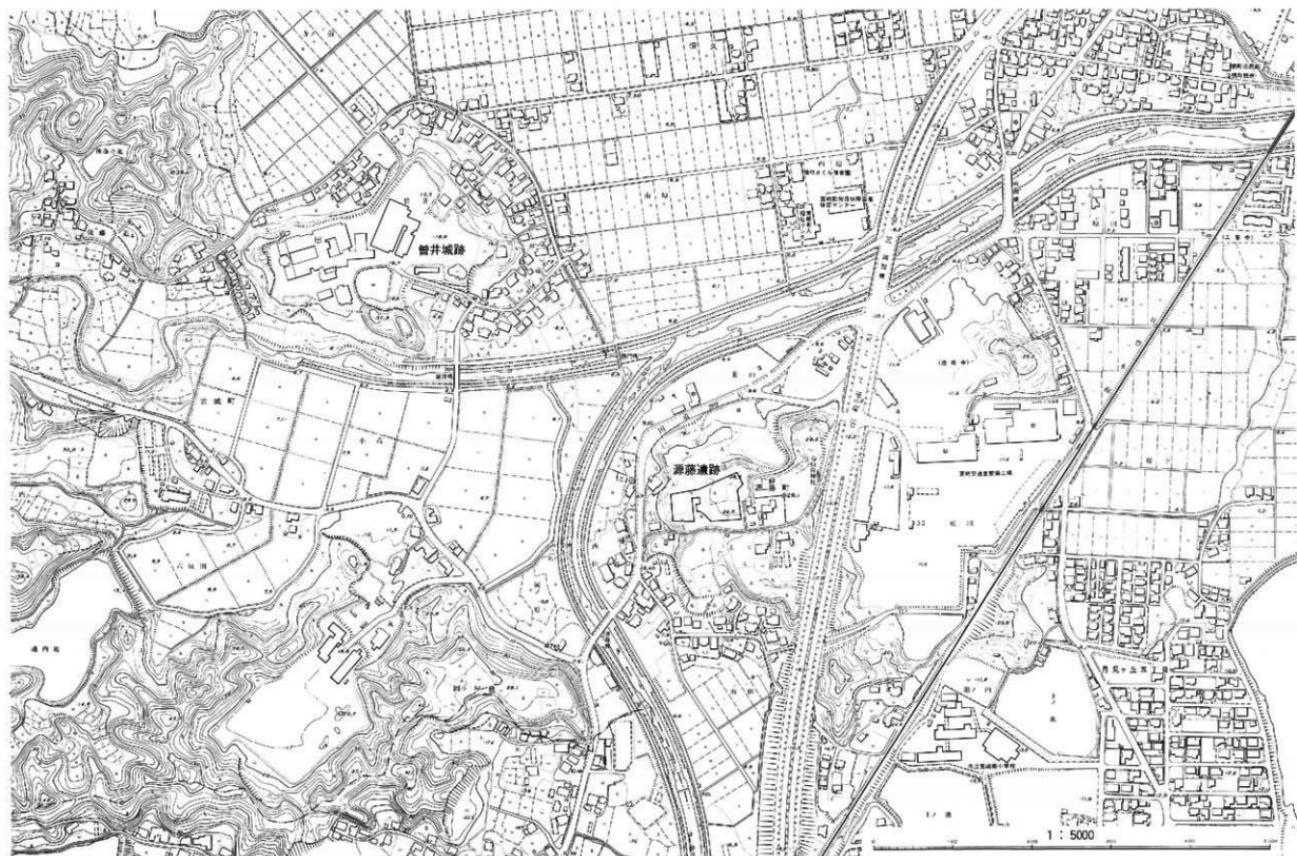
対象区全体は、道路、小支谷により3つに分かれており、それぞれの平坦部、また周辺のテラス状の平坦面に2m×4mの試掘坑を20ヶ所設定して行なったが、南東及び南西の2区画については表土もほとんど残存しておらず遺構遺物の出土も見られなかった。北区においては各試掘坑ごとに様相が異なり、表土下30cm程で赤ホヤ層に当るところや、2mの深さに達しても黒色土が続き、土器片が多量に出土する状況を呈している。

この結果により、本調査の対象区を北区の2,800m²とし、昭和60年5月14日から、同年9月18日までの期間で発掘調査を行なった。

表土の除去作業の結果、他数の遺構の重複が一面に検出され、切り合い関係を注意しながら調査を進めたが、新旧関係はとらえにくく、同一遺構内に、多時代の遺物が混在すると言った状況を呈した。

確認された遺構は、弥生、古墳時代にかかる住居跡、土塙が中心であるが、これらの埋土中に、旧石器及び縄文時代早期と見たアカホヤ層下に包含される遺物も多量に混在している。これは、各遺構がその包含層を搅乱して埋められている為で、調査区内には、ほとんど安定したアカホヤ層は見られず、調査区の東南部に残る比較的搅乱を受けていないアカホヤ層を除去した所、土塙7基を検査出来た。

また当初予想されていた中世の遺構であるが、調査区西部（C-3区）を中心に性格不明の擦り込みや多数のビット、溝状遺構を検出したが、時期及び性格は明確に出来なかった。



第2図 源庵遺跡周辺地形図



第3図 源藤遺跡全体図

第Ⅱ章 遺構と遺物

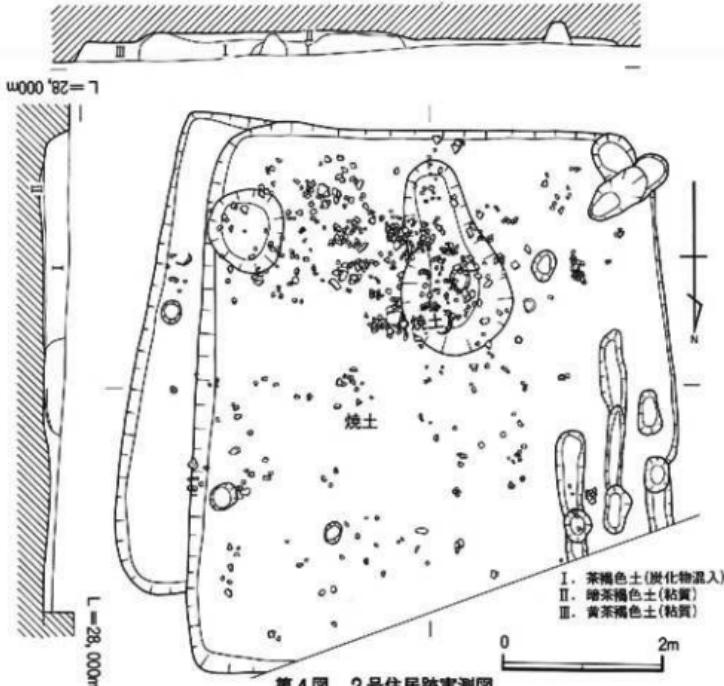
第1節 住居跡及び土塙

1) 2号住居跡(第4図)(図版3、33)

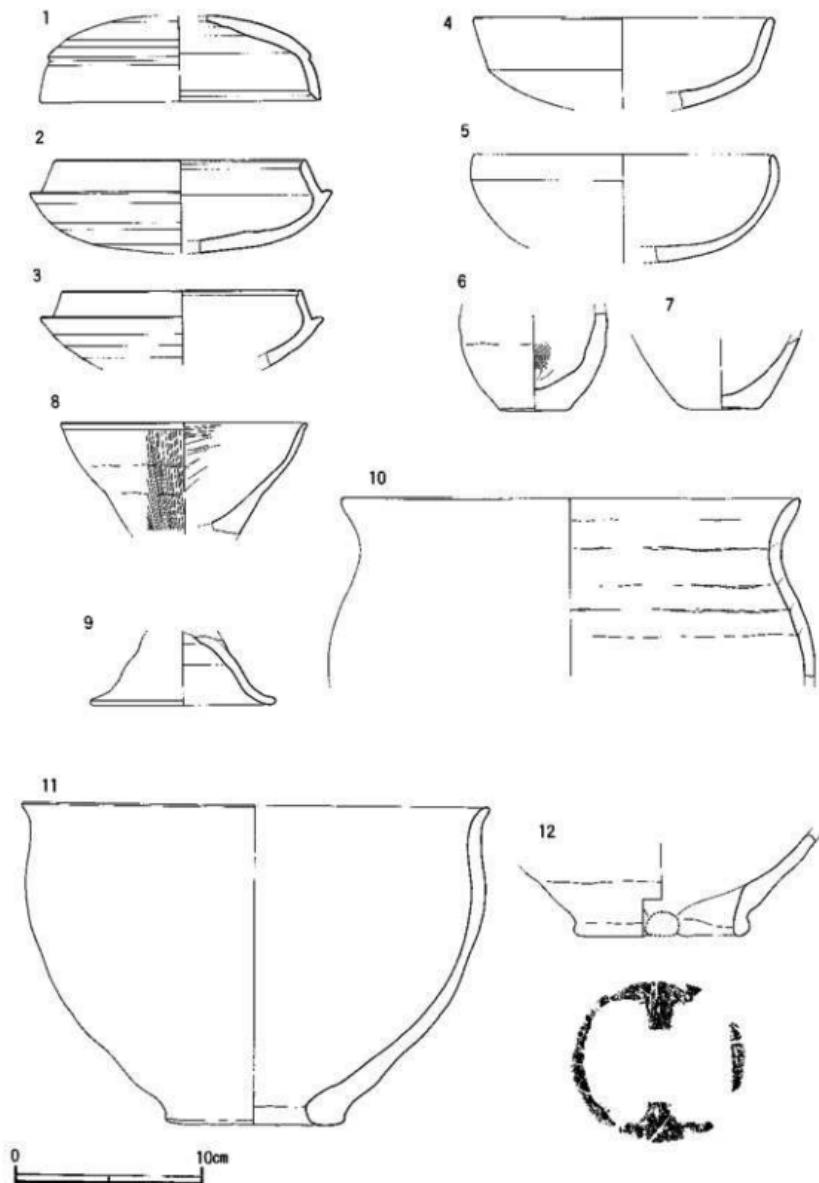
調査区の北東端、A-6区に検出されたもので、7m×6mを測る。東側に他の遺構が重複しているが、これを切って構築されている。他にも搅乱を相当受けており、検出されたピット等も、本住居跡に伴うものか、否かは判然としない。中央東寄及び南寄の床面に焼土が検出された。

出土遺物(第5図)は、1~3が須恵器の壺蓋、身、他は土師器で、4、5が壺、6~8は器形不明、9が高杯の脚、10が壺、11、12が瓶となっている。1~3の壺は口唇部内面に端部調整による横線が一条残り、蓋の上面及び、身の底部は、回転ヘラケズリにより調整されている。11の瓶は單口式のものであるが、12の瓶は中央に一本のブリッジを持つものである。

本住居跡からは、他に3個体分の單口式の瓶底部が出土している。6世紀前半代に比定されよう。



第4図 2号住居跡実測図



第5図 2号住居跡出土遺物実測図

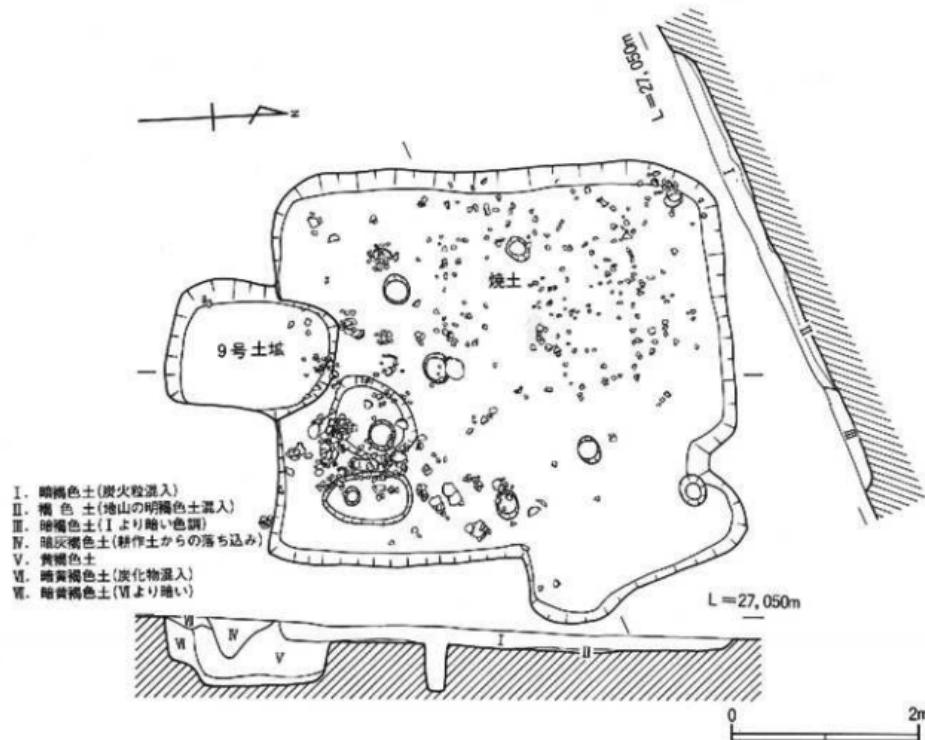
2) 3号住居跡及び9号土塙(第6図)(図版3、35)

2号住居跡の東に隣接する住居跡と、それに重複する土塙で、2号住居跡と同じくA-6区にて検出されたものである。

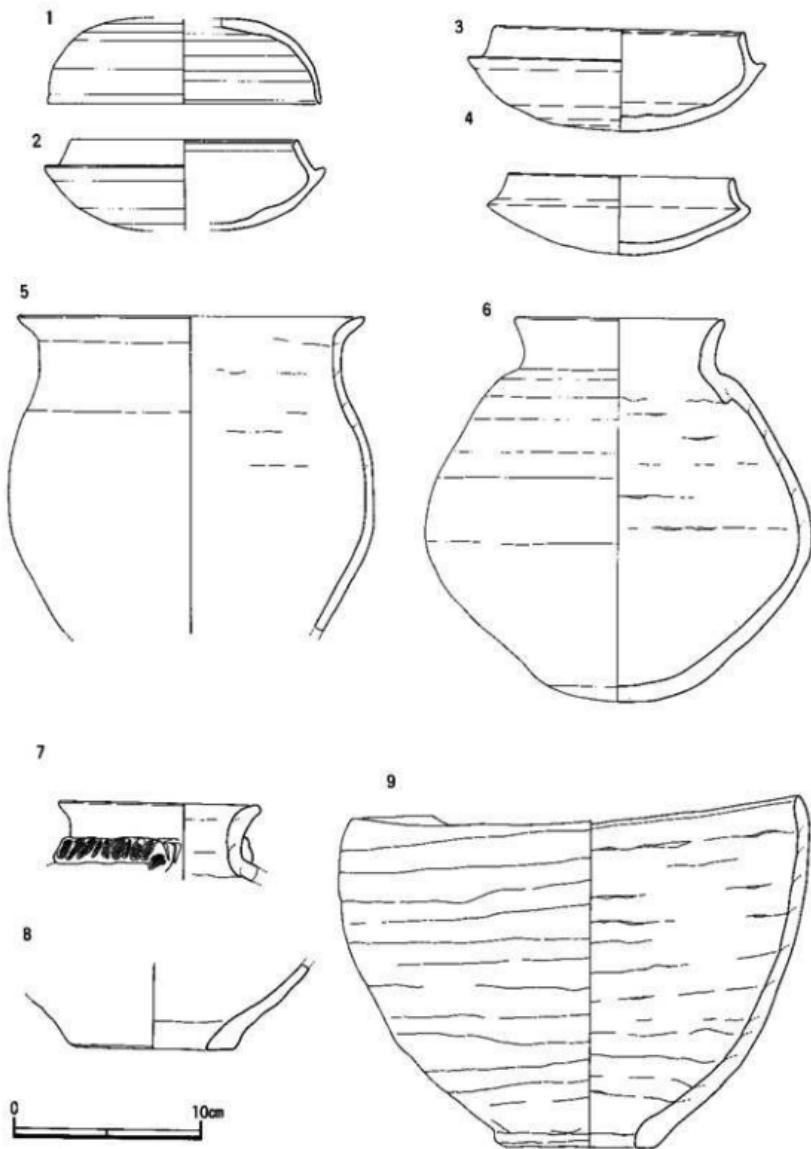
3号住居跡は、東西南北に主軸を持ち、東西約4.2m、南北約5m、残存壁高約20cmを測るもので、9号土塙を切って構築し、北東コーナーに搅乱を受けている。床面に2ヶ所の掘り込みと8個のピットを検出したが、柱穴及び住居跡に伴うものかどうかは確認出来なかった。また床面の中央部に焼土も確認された。

出土した遺物は、土師器及び須恵器が主体であるが、弥生式土器片や縄文期の押型文土器片も混在して出土している。

9号土塙は3号住居跡の南壁に重複しており、東西1.8m、南北1.3m、深さ0.7mを測る。土層観察からも、3号住居跡に先行している事がうかがわれる。方形プランの比較的深い土塙であるが、床面にまとまった形で、完形に近い甕や高杯が残存していた。



第6図 3号住居跡9号土塙実測図



第7図 3号住居跡出土遺物実測図

3) 3号住居跡出土遺物（第7図）（図版34）

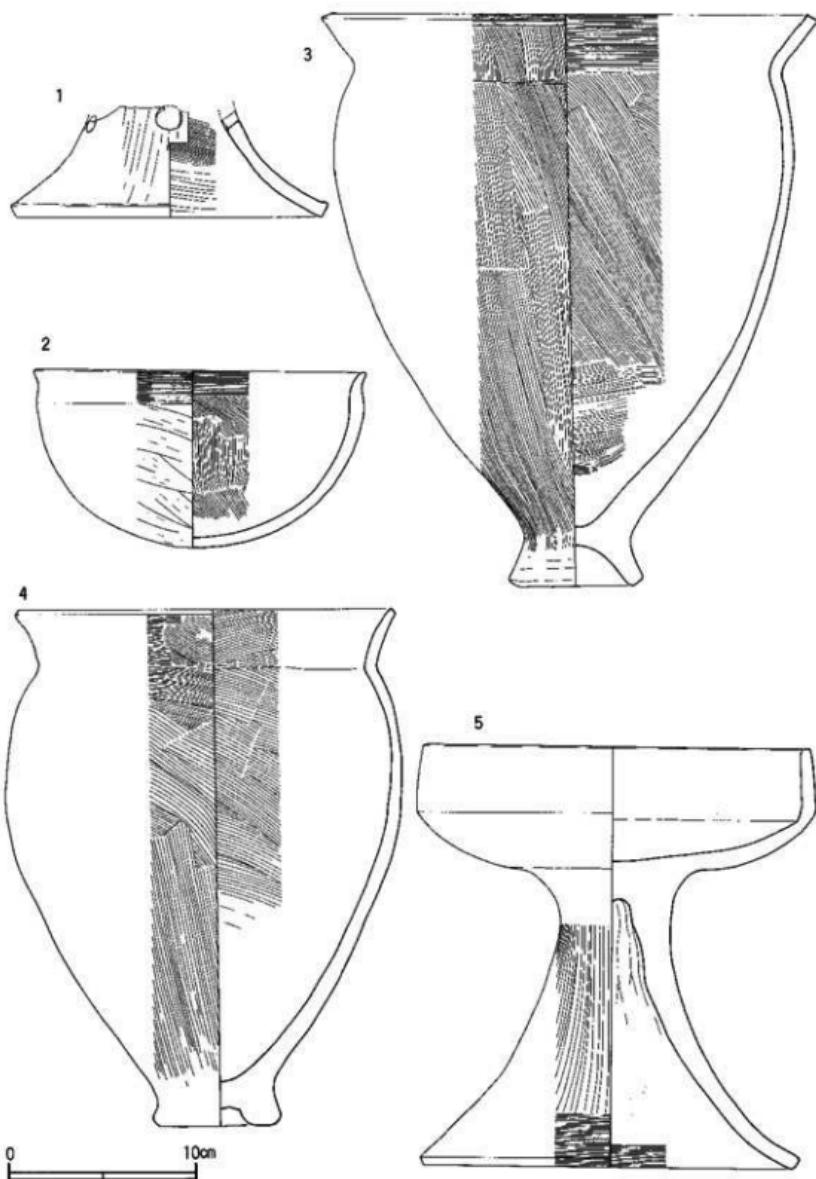
1は須恵式土器の环蓋で、口径14.1cm、推定器高4.7cmを測り、上面は回転ヘラケズリにより整形されている。2は須恵式土器の环身で、口径12.0cm、推定器高5cmを測る。口唇部に端部調整による横線を残し、底部は回転ヘラケズリにより整形されている。3も須恵式土器の环身で、口径13.3cm、器高5.5cmを測る。2と同じく口唇部に横線をめぐらし、底部は回転ヘラケズリを受けている。4は土師式土器の环で、口径12.0cm、器高4.2cmを測る。焼成が悪く明瞭では無いが、内面はヘラミガキを受けている様である。5は壺形土器で胎土中に石英粒を多量に含み、薄手に仕上げられている。内面に粘土紐成形による痕跡を残す。6は壺形土器で口径11.2cm、器高20.5cmを測る。胎土中に小石を多量に含み、粘土ひもによる成形後、内外面ナデ調整、外面底部にヘラケズリを施している。口辺部の張り付けのよく判る痕跡を内面に残している。7も壺形土器の口辺である。短く外反する口辺で、口径10.7cmを測る内面に粘土紐による成形痕を残し、外面のL字縁と体部の境いに、粘土紐の凸帯が張り付けられている。凸帯は、布でつんだヘラ状工具の先端を縫に連続して押しつけてあり、布痕を残し、一順にして先端は下方に垂れている。8、9は瓶で、8は底部のみの残存、9は口径24.3cm、器高約18cmを測る。内外面に明瞭に粘土紐の巻き上げ痕を残し、全体に指頭痕を残すものである。

時期的には、2号住居跡とほぼ同期。6世紀前半に位置づけられると思われる。

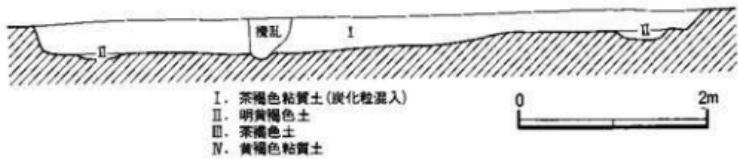
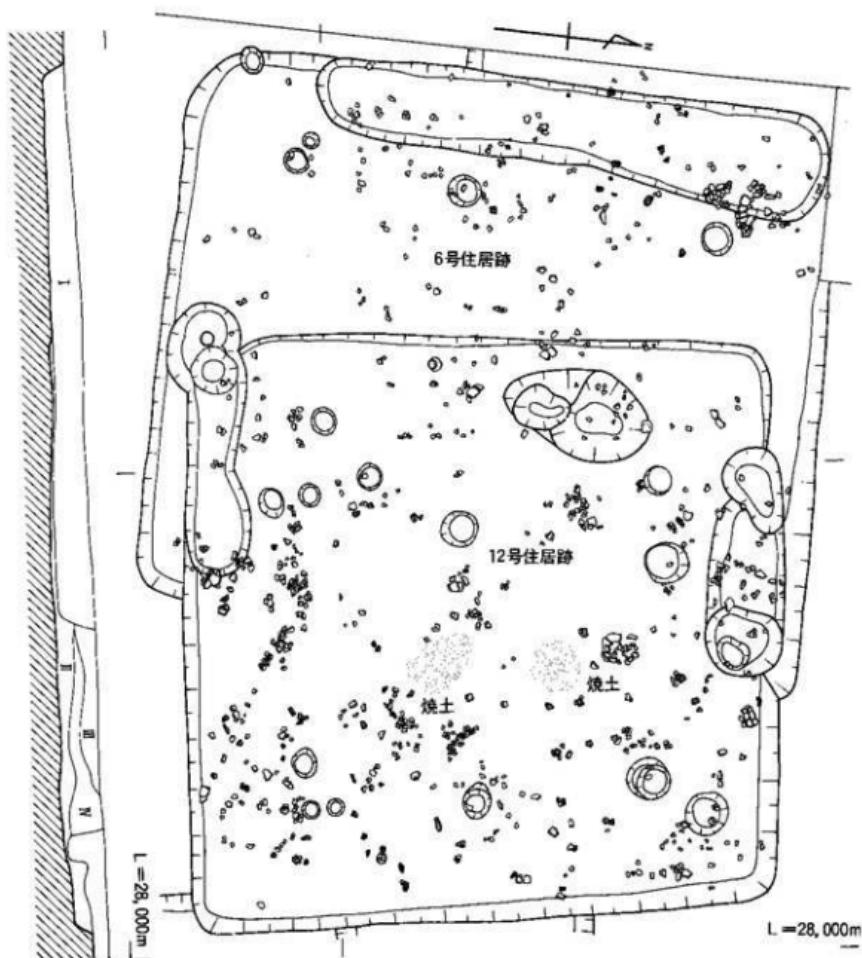
4) 9号土塙出土物（第8図）（図版38）

1は高环の脚部と思われる。底径16.3cmを測り、外面は縱方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ調整が施されている。また、残存部中に円形の穿孔が残っており、4方向に穿たれていたものと思われる。2は鉢形土器で、口径が17.8cm、器高9cmを測る。やや外反する口縁部の内外面は横ナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面がハケ目により調整されている。3、4は壺形土器で、3は口径26.5cm、器高30.2cmを測る。くの字に大きく口縁が外反して上方に最大径を持つ本部から、すばまりながら小さな高台の底部へと続く、裾部はやや外反する。内外面共にハケ目による調整が行なわれている。4も3とはほぼ同じ形態であるが、底部が厚いつくりで、裾部も3ほど外反していない。調整も同じくハケ目によるものである。5は高环である。口径20.5cm、底径20cm、器高22.5cmを測り、体部に稜をもち、やや内傾して立ち上る深い环部から、なだらかに裾の広がる長い脚部がつくものである。脚部に縱方向のヘラミガキが施され、内部にしづられた痕跡が残っている。

5の高环の脚部に、古手の様相も認められるが、弥生終末期に位置づけられるものであろう。



第8図 9号土塚出土遺物実測図



第9図 6・12号住居跡実測図

5) 6、12号住居跡（第9図）（図版6）

B-6区において、2軒重複して検出されたものである。

6号住居跡は7×6m、12号住居跡は6×6.4mを測る。12号住居跡を6号住居跡が切って構築されている。6号住居跡は西壁に沿って1×5.6mの浅い掘り込みを、12号は南及び北壁に沿って、0.6×2.4、0.8×1.9mの掘り込みを持ち、中央付近の床面に、2ヶ所の焼土が検出された。いずれも、6世紀前半代に位置づけられる住居跡である。

6号住居跡出土遺物（第10図）（図版6）

5~9が須恵式土器、他は土師式土器である。1、3の壺は外外面にヘラミガキが施され、7は高環の脚部で四方向に三角形に近い透しが施されていたと思われる。10、11は小型丸底壺で、10はヘラミガキが施されている。13の壺形土器もヘラミガキが施されるものである。

12号住居跡出土遺物（第11図）

1、2は須恵式土器、他は土師式土器である。4の壺は外外面底部がヘラケズリにより成形されている。10は壺形土器と思われる。単口式のもので、底部周辺に、布目の圧痕を残す凸帯が一部に残存している。

6) 6、8、9、10、11号住居跡（第12図）（図版4）

B-6区において、4軒重複して検出されたものである。

8、9、11号の規模は不明、10号は4.8×5.2mを測る。

構築順は、11号→8号、10号→9号となっており、9、10、11号は床面中央部に埋甕を持つ、この内9号住居跡の埋甕は10号住居跡の埋土中にあり、新旧関係が明確である。

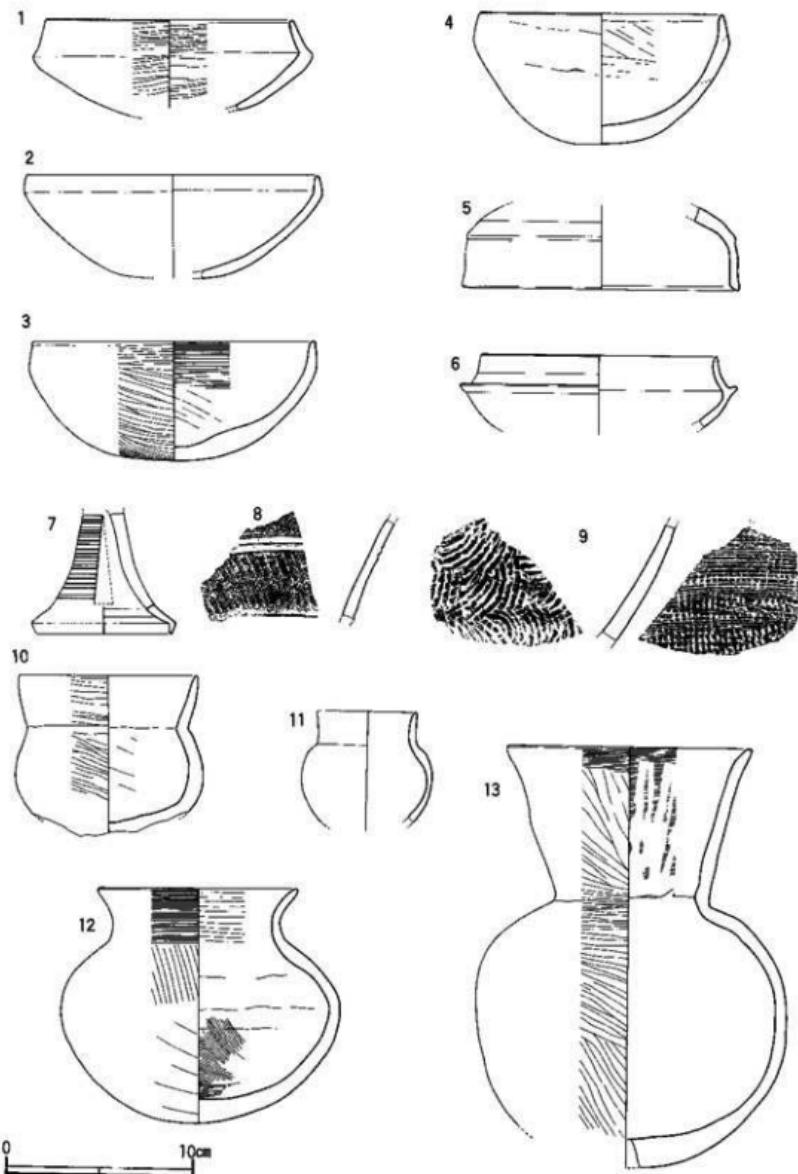
各住居跡出土遺物（第13、14図）（図版38）

第13図1~3は8号、4~7が9号、8~10及び第14図1が10号、2~10が11号の各住居跡出土遺物である。

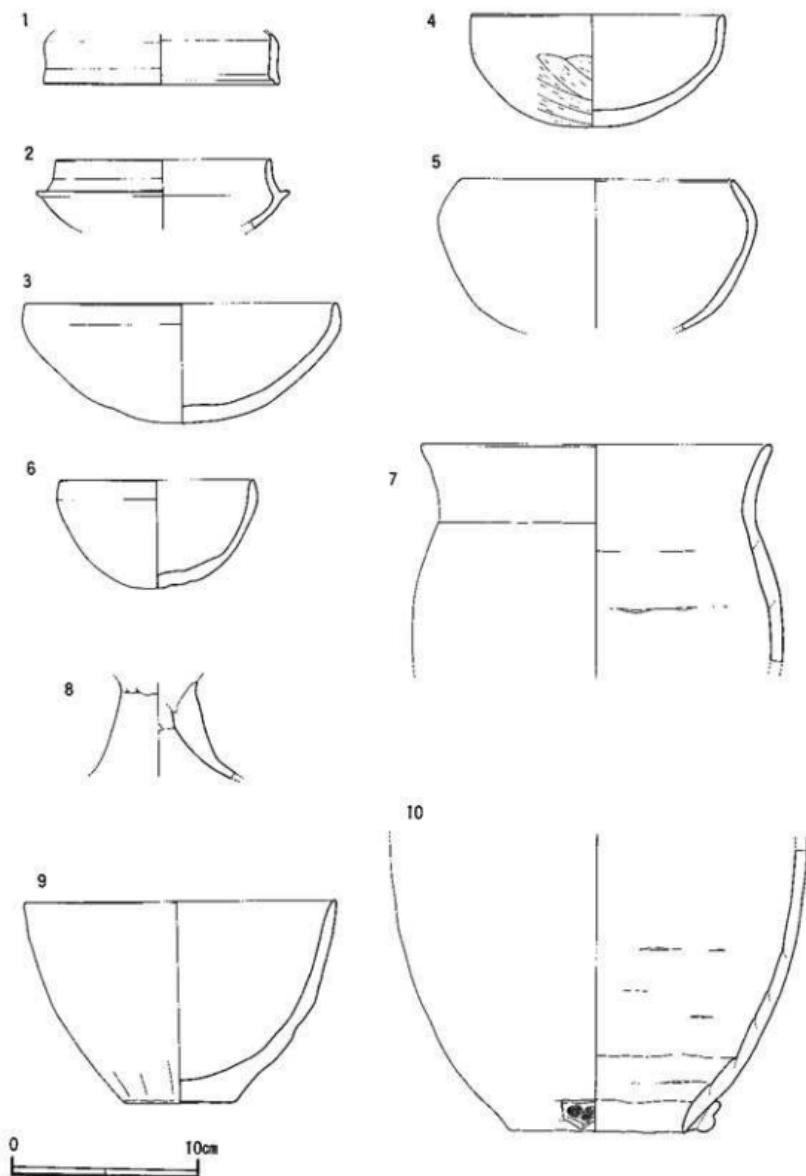
第13図2は手づくねのミニチュア土器、3が七鍾、4は丸底の壺形土器で、胎土に精製された砂粒を含み、外表面をヘラナデされている。5は須恵式土器の蓋、8は土師式土器の壺で、内面はヘラナデ調整されている。7は埋甕で、外表面はハケ目調整が施され、口縁及び底部を欠いている。10も埋甕で外表面はヘラケズリ調整、内面に粘土紐の痕跡を残す。

第14図1は鉢形土器で外表面に粘土紐の痕跡を残し、底部はヘラケズリ、内面はヘラナデによる調整が施されている。2は土師式土器の壺形土器、3、4は須恵式土器の焼成不良品、6は須恵式土器の壺蓋、7は土師式の高環で外表面ヘラミガキが施される。8は壺形土器で、内面底部はヘラナデ、8は高環の脚部で外表面はヘラミガキ、10は11号住居跡の埋甕である。

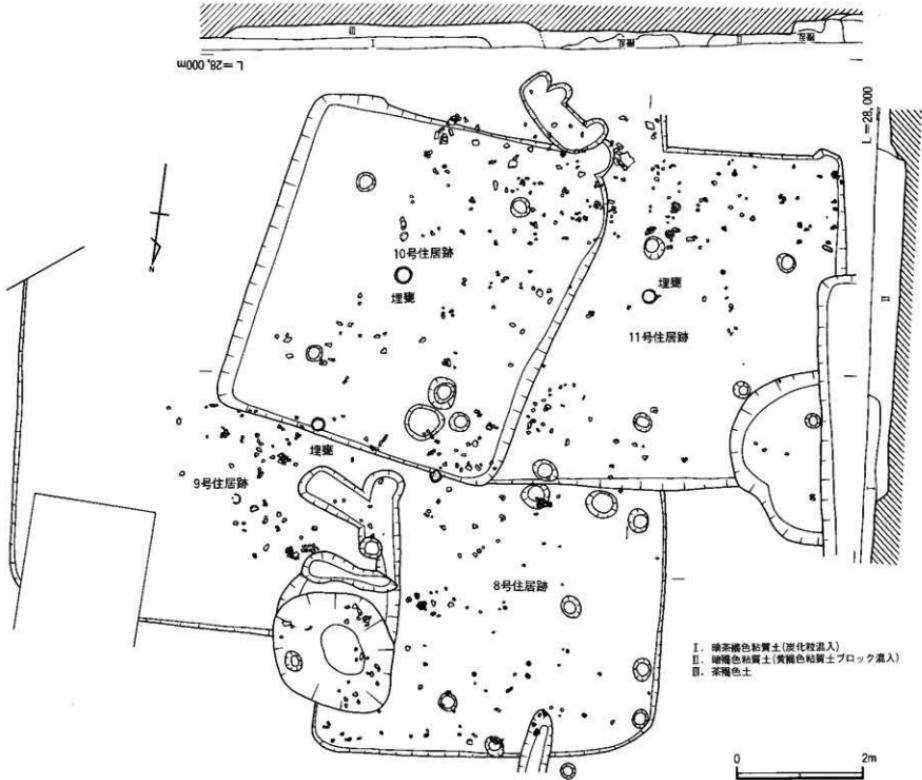
いずれの住居跡出土品も埋積七中からの出土品で、時期差のある混在が見られ、遺構に確実に伴うものは埋甕のみと言った状況のものであるが、遺物の少ない8号を除けば、6世紀代に位置づけられるものと思われる。



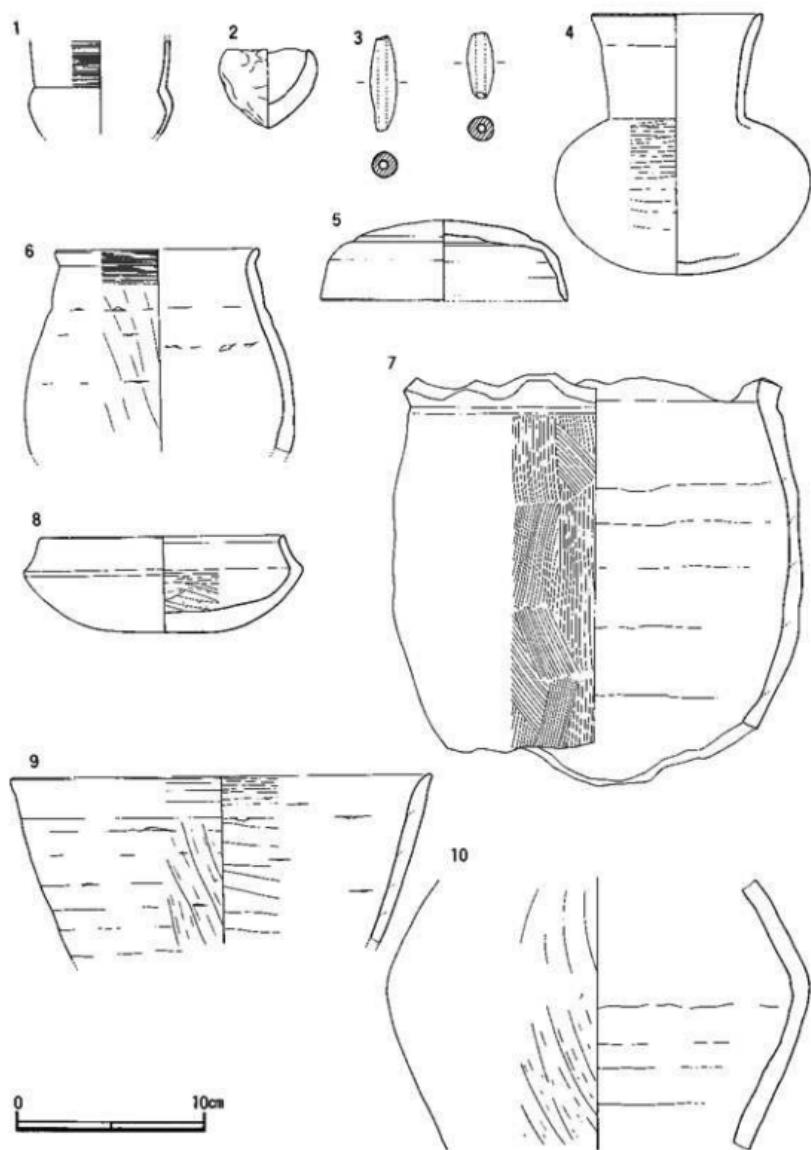
第10圖 6號居跡出土遺物實測圖



第11図 12号住居跡出土遺物実測図

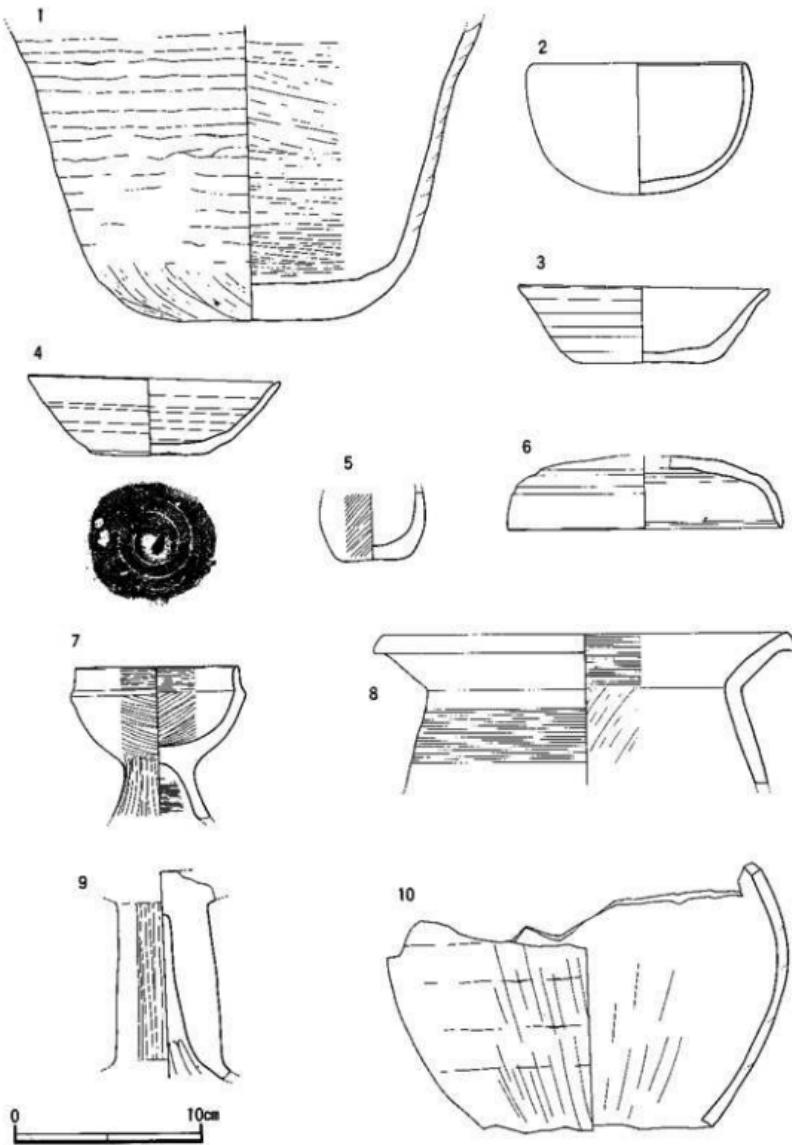


第12図 8・9・10・11号住居跡実測図

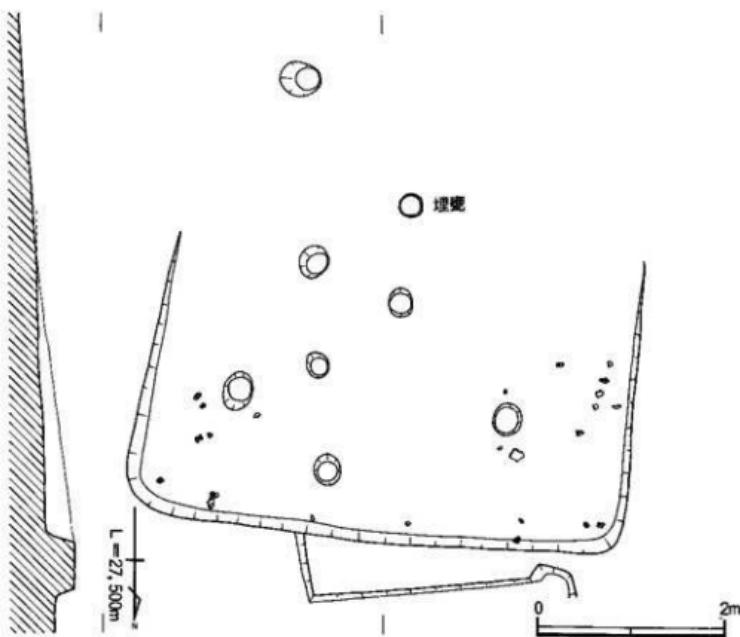


1~3 8号住居跡 4~7 9号住居跡 8~10 10号住居跡

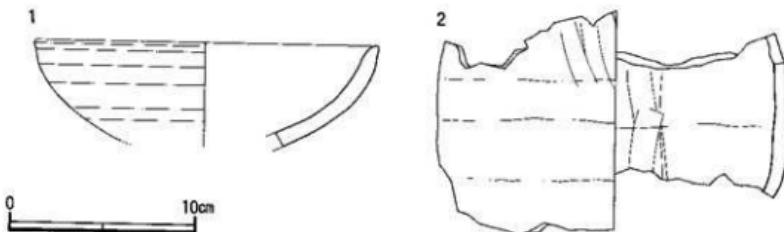
第13図 8・9・10号住居跡出土遺物実測図



第14図 10・11号住居跡出土遺物実測図



第15図 32号住居跡実測図



第16図 32号住居跡出土遺物実測図

7) 32号住居跡（第15、16図）（図版39）

B-6区において検出された住居跡で、スリバチ状大型造構の埋積土中に南半分を持った為、この部分は明確に出来なかった。埋甕炉を残す住居跡である。

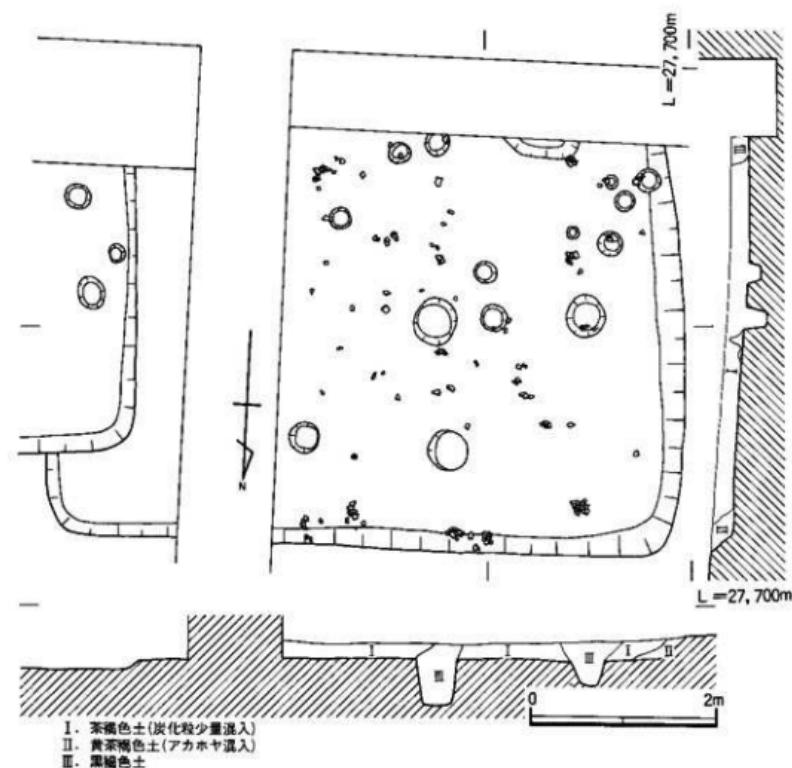
出土遺物は1が土師式土器の鉢で、推定口径18.5cmのものである。

2は埋甕で、内外面に粘土紐の痕跡を残し、ヘラナデにより調整を施されている。口縁及び底部を欠いて使用されている。

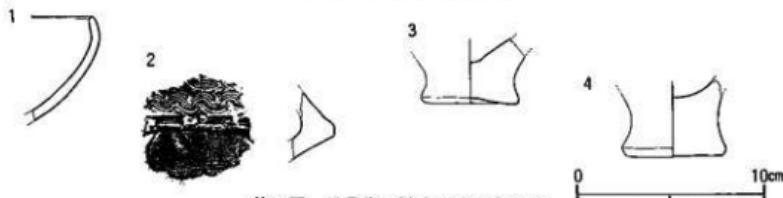
8) 5号住居跡 (第17、18図) (図版7、40)

調査区の中央部に検出された住居跡で、東西壁7・8mを測る。床面が明確にとらえられず床面のピットも、後世の搅乱がほとんどである。

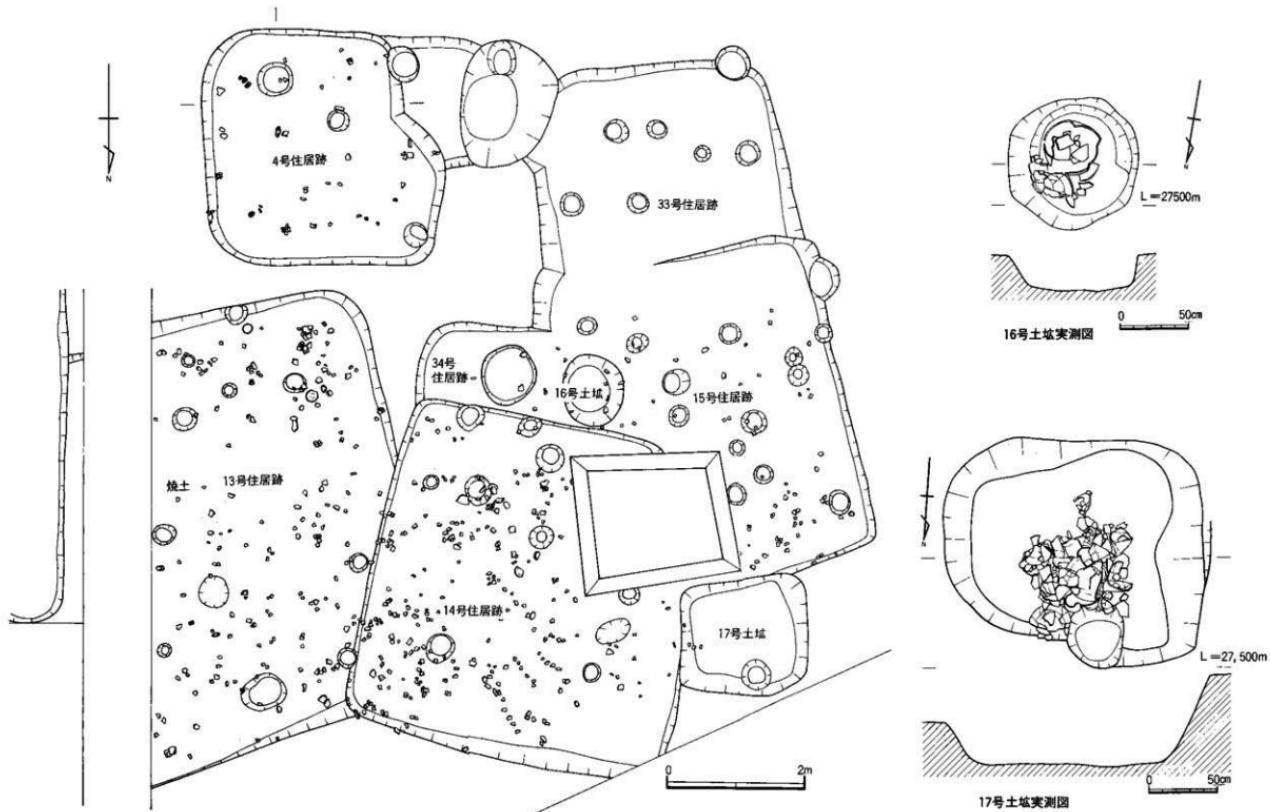
出土遺物も埋積土中よりの出土のみで、弥生式と土師式の混在するものである。



第17図 5号住居跡実測図



第18図 5号住居跡出土遺物実測図



第19図 4・13・14・15・33・34号住居跡 16・17号土坡実測図

9) 4、13、14、15、33、34号住居跡及び16、17号土塙（第19図）（図版8、9、10）

B-5区において重複して検出された遺構である。

4号住居跡は、3.4m×3.4mを測る比較的小型のもので、西壁に一部張り出しが見られる。柱穴は不明で、埋土中に多量の炭化粒が含まれていた。

13号住居跡は、東壁が検出されず、規模は明確に出来なかったが、南北6mを測るものである。14号住居跡と切り合っているが、土層からは切り合い関係を明確に出来なかった。床面中央部に焼土が残存していた。

14号住居跡は、5m×4.8mを測り、13号の他に、34、15号住居と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

15号住居跡は、4.8×4.2m測る。14号の他、34、33号住居跡と16号土塙と切り合っている。重複関係は不明。

33号住居跡は、東西3.6mを測る。15号と重複するが出土遺物は、ほとんど検出されなかつた。

16号土塙は、直径約1mの円形プランを呈し、深さ約30cm、底面にまとまった形で、大型の弥生式の壺形土器等が検出された。

17号土塙は、14号住居跡の西壁に接して検出され、約2m×1.5mの方形のプランを持つ土塙である。床面中央部にまとまって、弥生式の土器片が多量に検出された。

10) 4、13、14、15、33、34号住居跡出土遺物（第19図）（図版42）

16、17号土塙出土遺物（第21図）（図版41）

第20図1、2は小形の壺、鉢形土器で、3はミニチュアの壺形土器で4号住居跡出土。

4～9は13号住居跡出土で、4、6は壺、外面にヘラナデ調整され、底部にそれぞれ、ヘラ記号状の線刻が施されている。5は小形の鉢形土器、7は壺形土器、8が鉢形土器、9は高壺の壺部である。

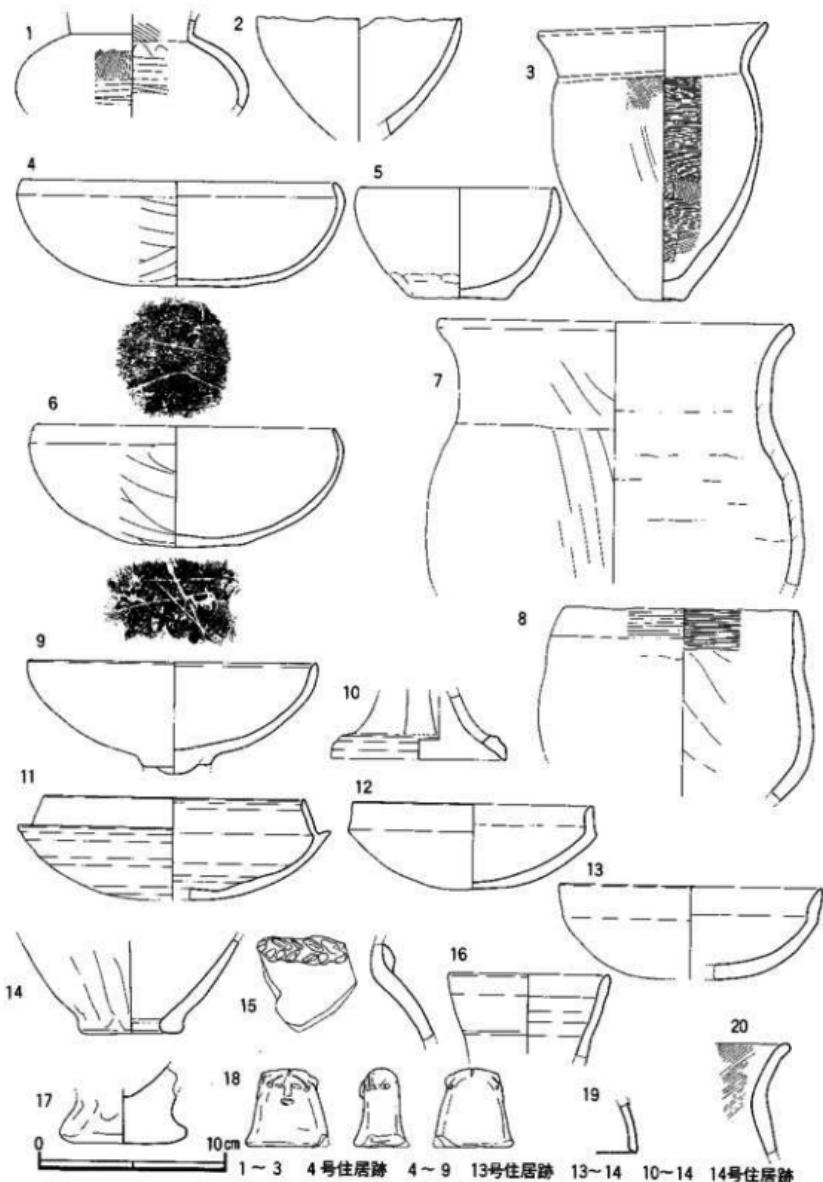
10～14は14号住居跡出土で、10は須恵式土器の高壺片で方形の透しを持ち、11は須恵式の壺形土器、12、13が土師式の壺形土器である。14は小形の瓶片で單口式のものである。15～17は15号住居跡出土、15は壺形土器片の頸部片と思われ、突帯が張り付けられている。16は壺形土器の口縁、17は壺の脚部である。

18、19は33号住居跡出土で、18は土偶。人面を形どっており、みずら状の毛髪まで表現している。耳状の後頭部まで貫通する穴も穿れており、首飾りの可能性も感じさせる。

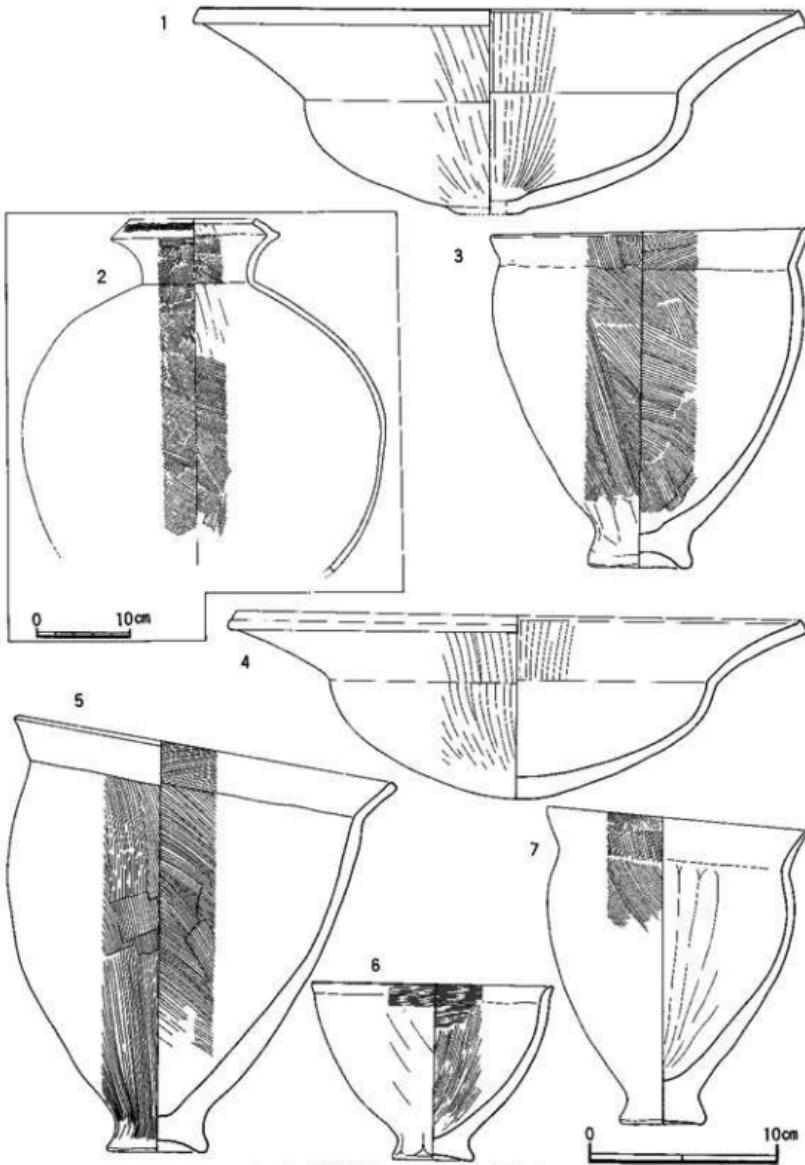
第21図は1～3が16号土塙、4～7が17号土塙の出土遺物である。

1は鉢形土器で、内外両面にヘラミガキが施され底部に低い脚を持つ。2は二重口縁壺で、球状の脚部を持つ大型のものである。3は壺形土器、4も鉢形土器であるが、脚は付かず丸底のものである。5、7は壺形土器で、6は鉢形土器である。

出土遺物からは、13、14号住居跡が6世紀、16、17号土塙が弥生終末期に比定されよう。



第20図 4・13・14・15・33・34号住居跡、土塙出土遺物実測図



11) 17、18号住居跡及び30号土塙（第22、23図）（図版11、12）

B-5区において重複して検出されたものである。

17号住居跡は 6.8×5.5 mの方形プランで、北壁で30号土塙を切り、1号溝に切られており、18号住居跡に切られている。

18号住居跡は、北半分程検出され、東西 6.4 mを測る方形プランのもので、北壁中央部に窓が設けられる本遺跡唯一の住居跡である。

窓は、北壁中央部に白色粘土を張り付けて構築しており、煙道やその他の施設は、住居跡の壁を一切切り込んでいない。両袖間には浅い掘り込みを持ち、焼土が堆積している。

30号土塙は17号及び1号溝に切られており、そのプランはほとんど残存していない。

出土遺物（第24、25図）（図版43、44）

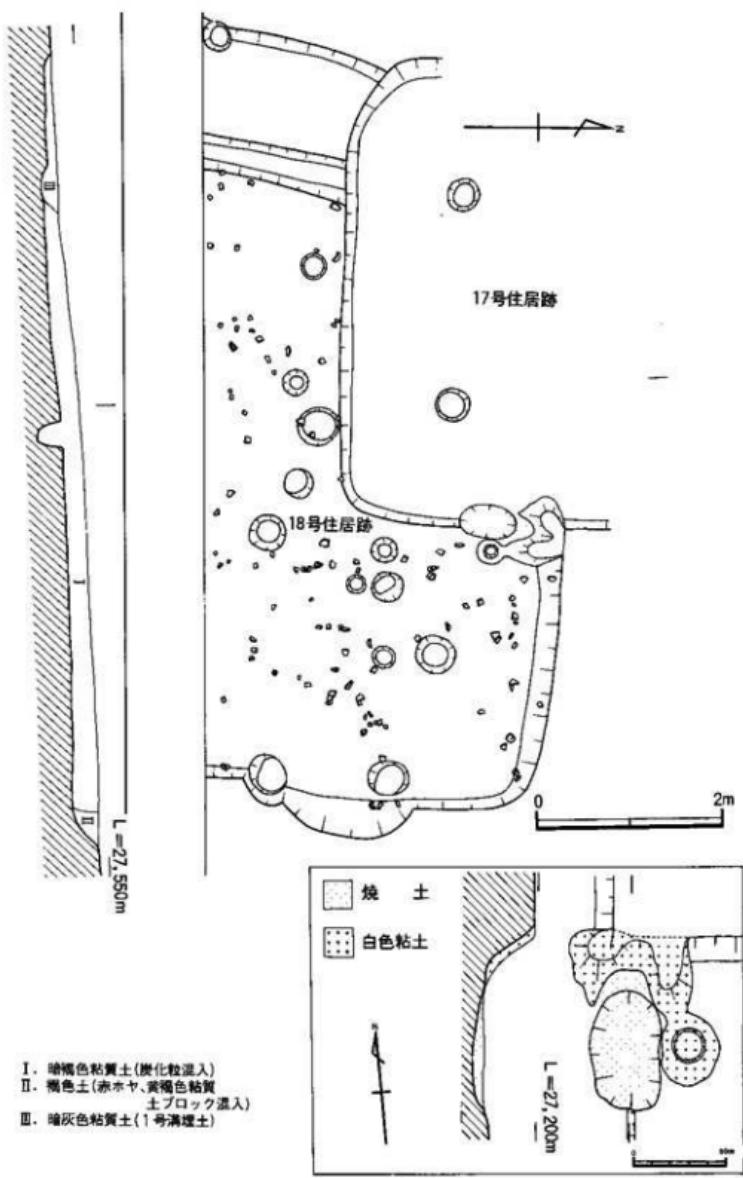
第24図1～3は壺で、1は須恵器、2、3は土師器である。3には線刻がある。5は土製の支脚で円柱形、周囲は面とりされている。4は埋甕である。6～8は壺で、6は須恵器、7、8は土師器であるが、8は流れ込みであろう。9、10は甕である。

第25図1は二重口縁壺の口縁部、2は壺の口縁部、3は高壺の脚部で外面はヘラミガキが施される。4は器台で2列（上5、下3方向）の穿孔が施されている。5は甕の体部、6、7は甕形土器である。

遺物の上から各遺跡の位置は17号住居跡が6世紀代、30号土塙が弥生終末期としてとらえられよう。

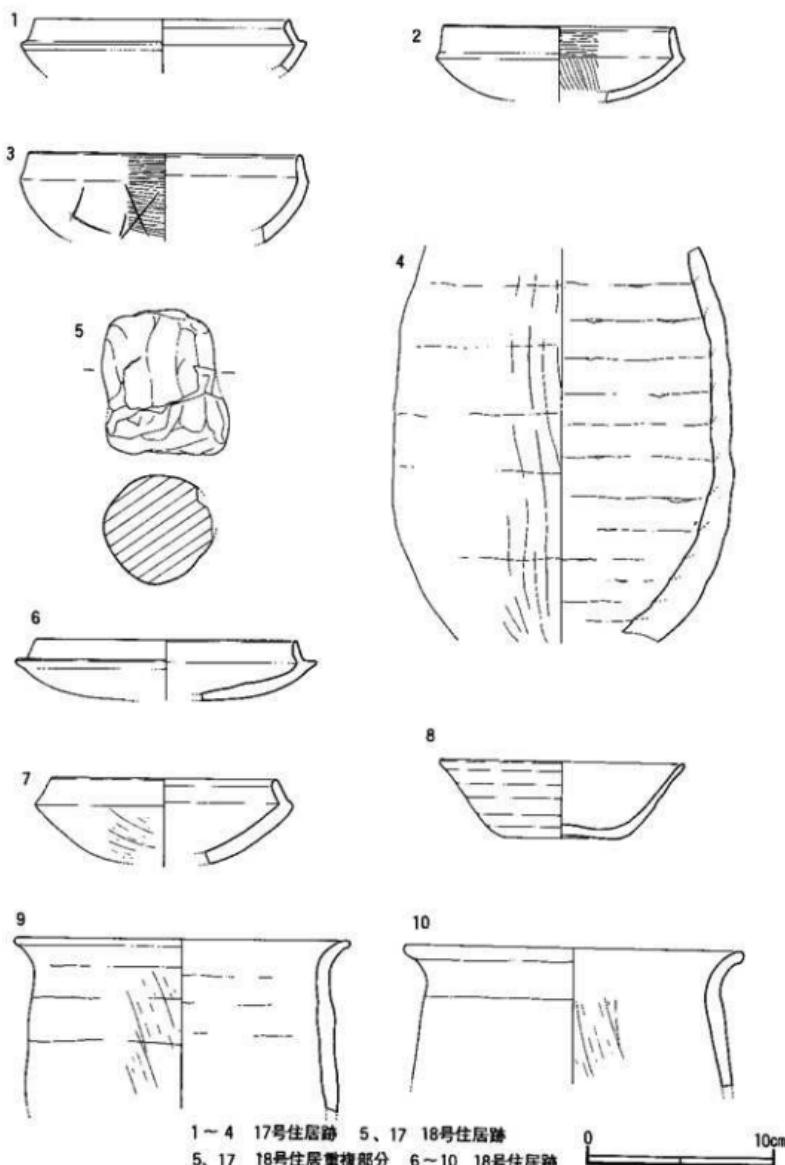


第22図 17号住居跡、30号土塙 実測図

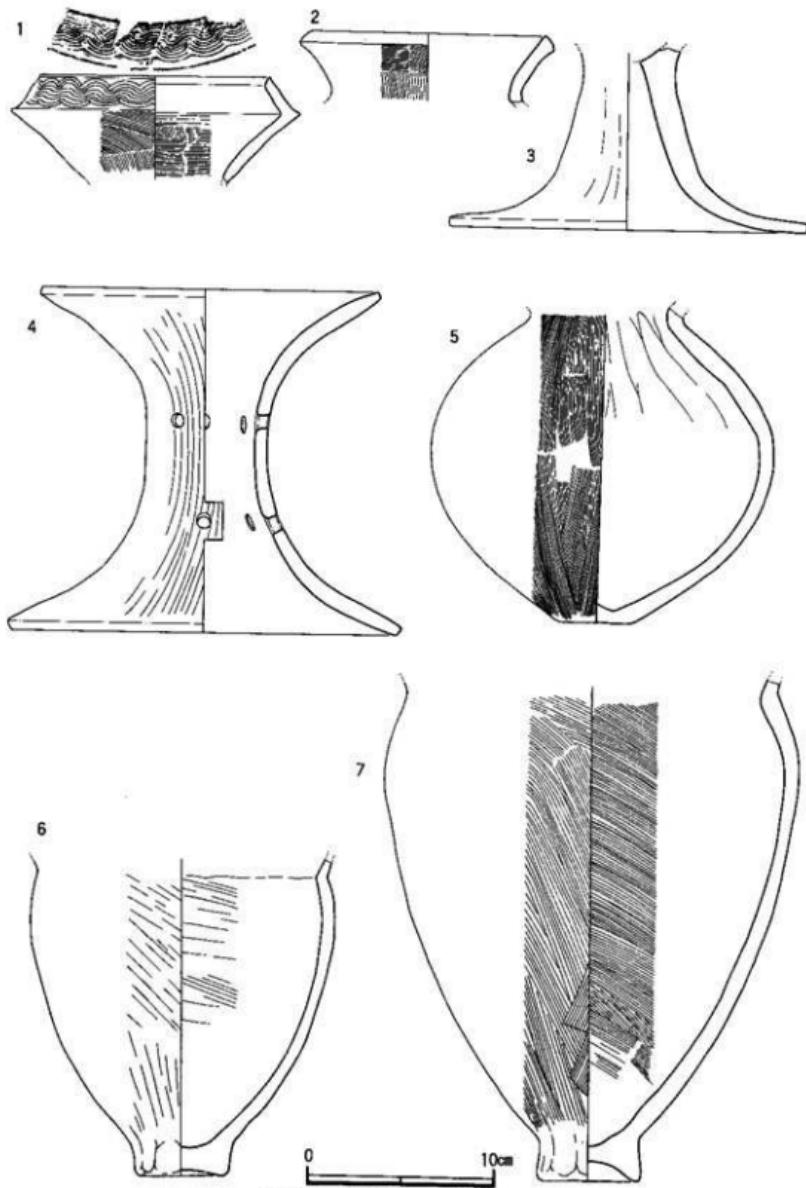


第23図 18号住居跡実測図

18号住居カマド実測図



第24図 17・18号住居跡出土遺物実測図



第25図 30号土坑出土遺物実測図

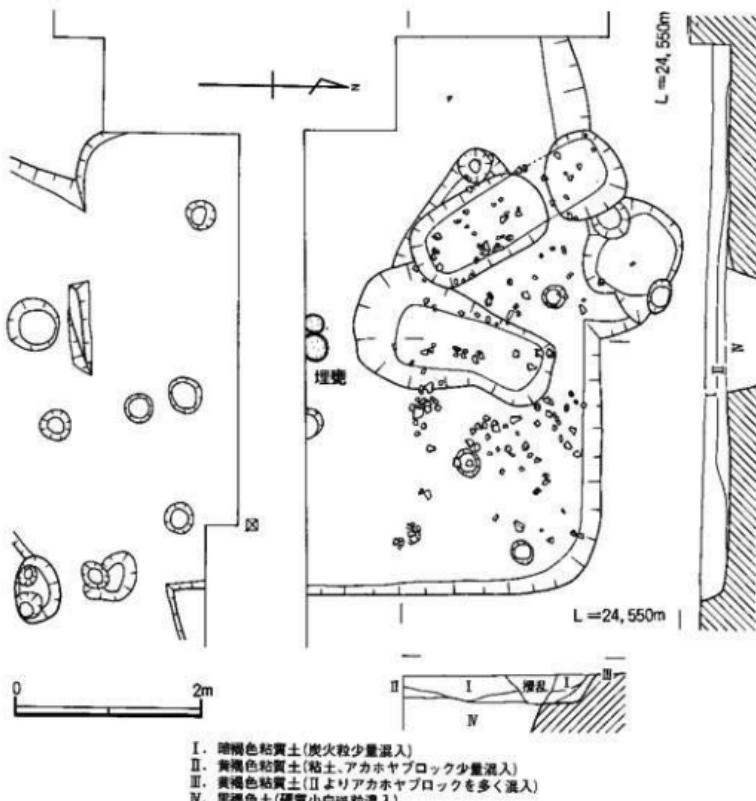
12) 7号住居跡（第26図）（図版13）

B-4区に検出された遺構で、5.5m×5mを測る方形プランの住居跡で、床面中央部に2ヶ並列して埋甕が附設されている。

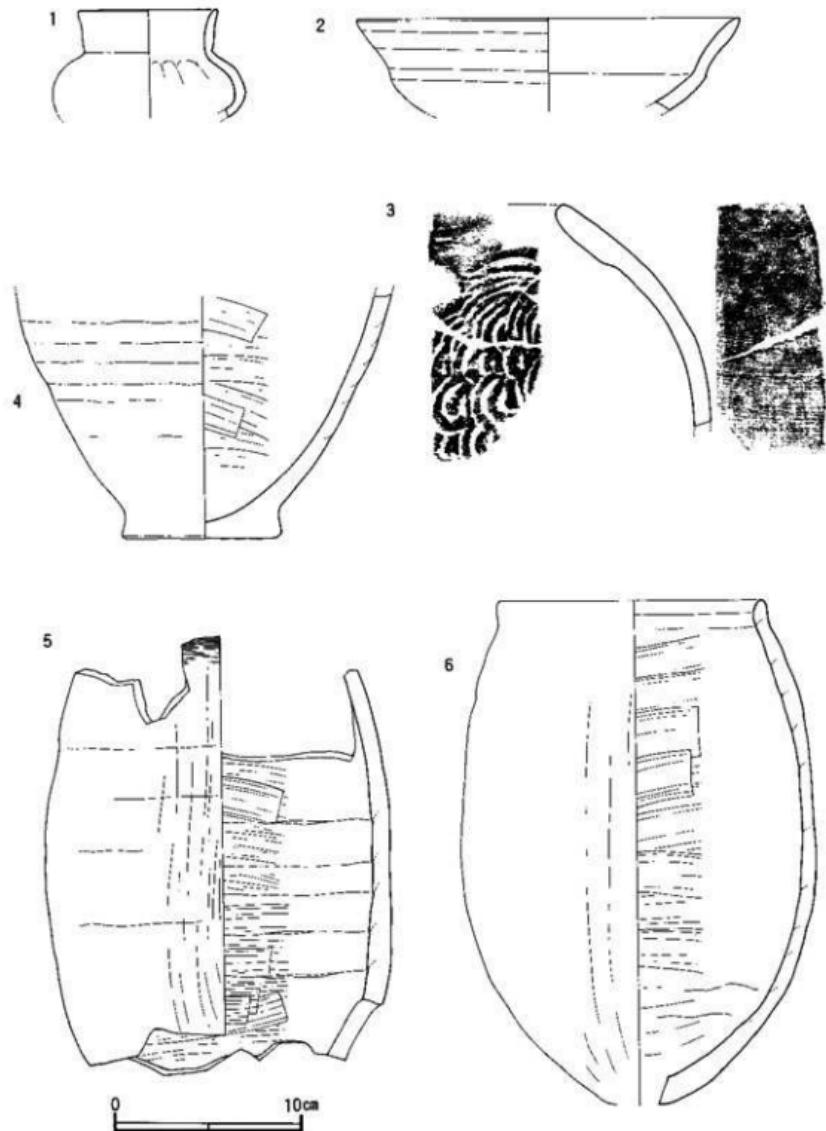
出土遺物（第27図）（図版45）

1は小形の丸底甕、2は鉢形土器で外面にヘラケズリによる縁を持つ。4は変形土器の底部で、粘土縁による成形痕を残し、内面はヘラナデによる調整を受けている。3は無頸甕と思われるが、外面は平行、内面は同心円文のタタキ目を残す須恵質の土師器である。

5、6は埋甕で、5が東側、6が西側の埋甕で、両方共、粘土縁による成形痕を残し、内外面はヘラナデによる調整を受けている。5は口縁及び底部を大きく欠いているが、6はそれほどでもなく、極端に短い口縁を持つ甕である事がうかがわれる。



第26図 7号住居跡実測図



第27图 7号住居跡出土遺物実測図

13) 30号住居跡（第28図）（図版14）

C-4区にて検出された住居跡で、4.6×5mを測る方形プランを呈する。

数ヶ所に後世の擾乱を受けているが、他住居跡等との重複は無い。

出土遺物（第29図、図版46）

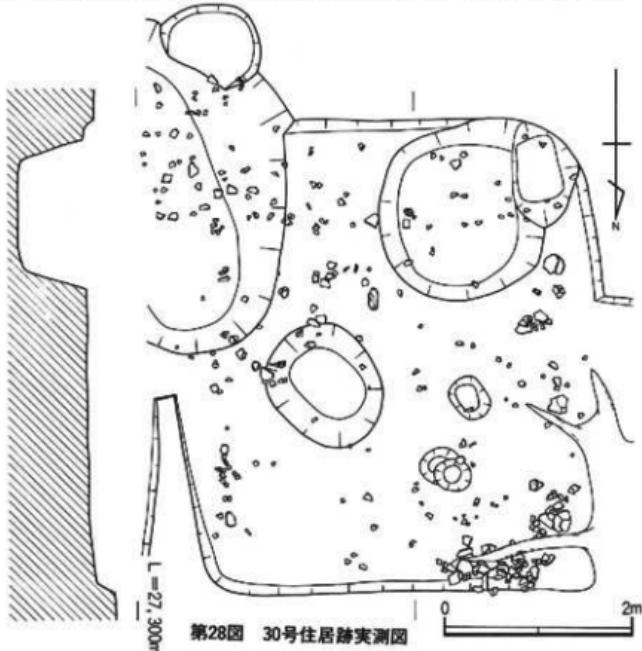
1は石包丁片で、残存する部分において、穿孔を一ヶ所、端部に抉りの入る磨製の方形石包丁である。

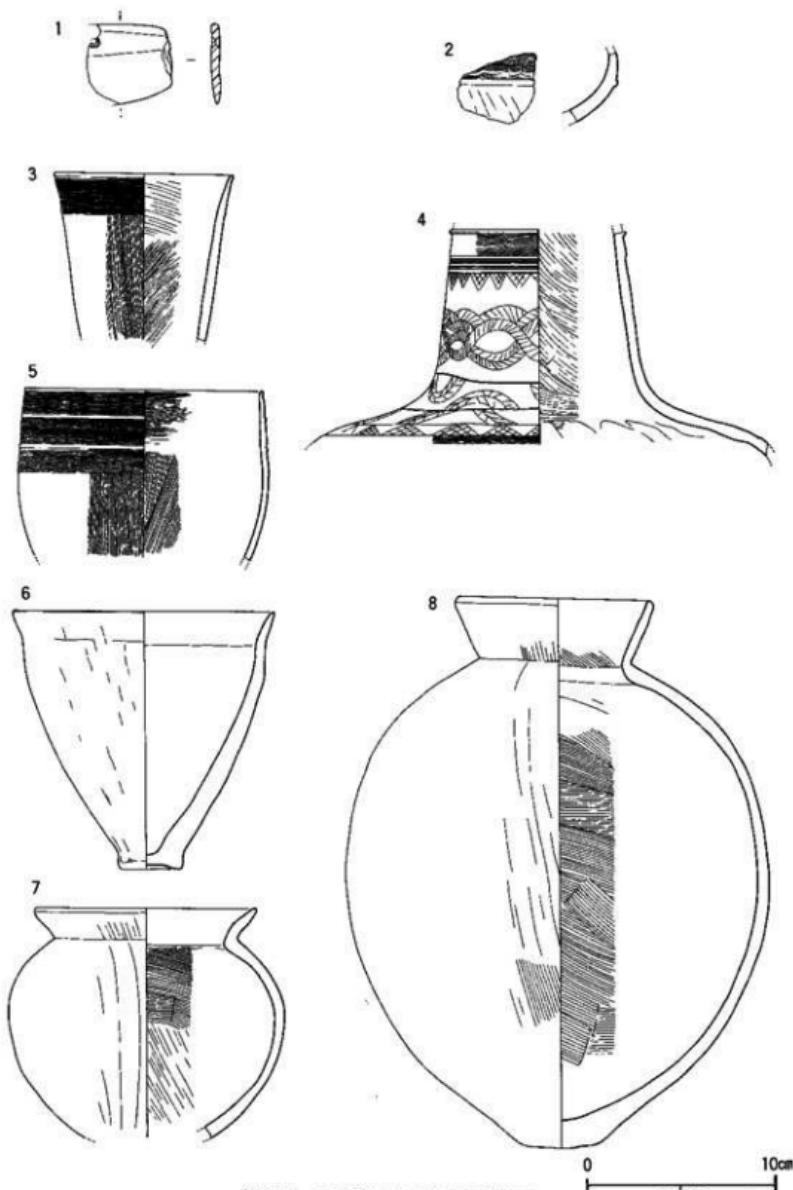
2～5は、本遺跡中の遺物の中でも最も特徴的なタイプの細線文土器である。2は器形は不明で、ヘラ木口による削り出しの細い突帯により区画し、細線のコンパス波文を描くものである。3、5も同じヘラ木口による丁寧な削り出しにより、口唇部の突帯とコンパス波文の文様帯を造り出すもので、5は三段の文様帯を持ち、文様帯間はやはり突帯により区画されている。3の器形は不明であるが、5は、18号土塙等の出土例から、脚台付の鉢形土器と思われる。

いずれも非常に薄手の土器である。

4は復元により復元したもので、壺形土器と思われる。2～5と同様に口辺部と肩部に突帯とコンパス波文帯とを持つが、その間は丁寧に磨かれて、鋭い工具による細線で、鋸歯文や複雑な綾杉文、沈線等が描かれる。以上の土器は、共伴する6～8の壺や壺形土器と比べても胎土、調整等、異質のものである。

共伴する壺型土器等から、本住居跡は、弥生終末期に位置づけられるものであろう。





第29図 30号住居跡出土遺物実測図

14) 25号住居跡（第30図）（図版18）

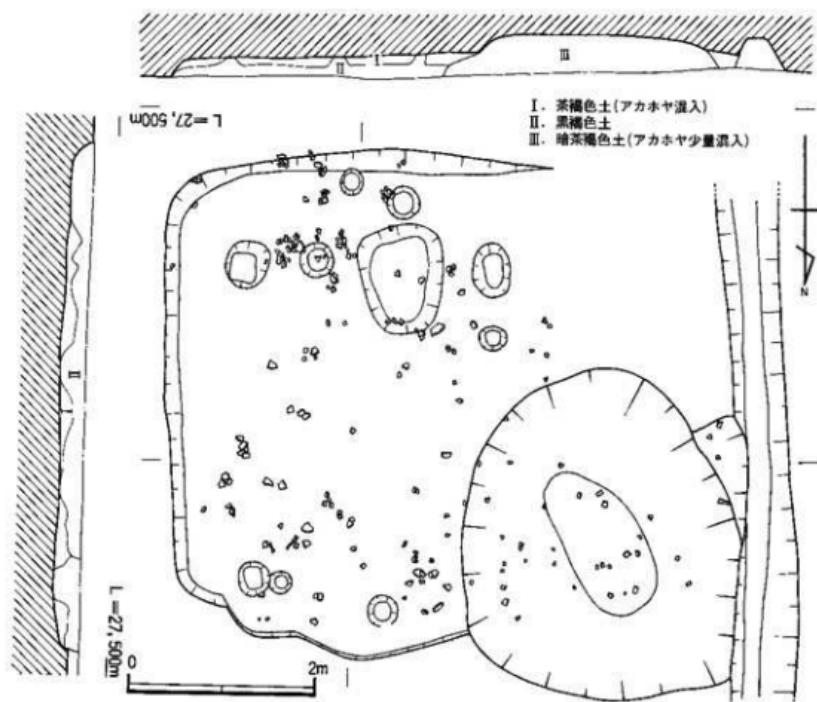
C-5区にて検出されたもので、西壁を検出できなかった。南北約4.7mを測る隅丸方形プランの住居跡である。

出土遺物（第31図）（図版47）

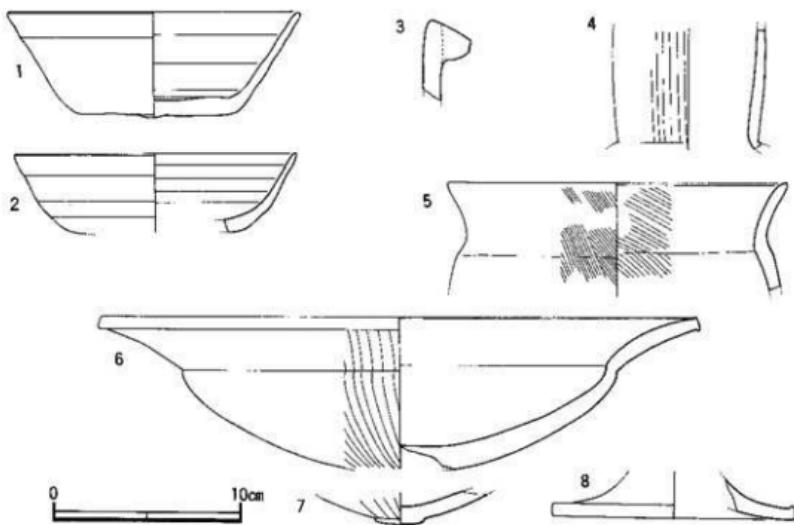
1、2は土器器の坏で、ロクロにより成形されている。1の底部はヘラ切り底である。
3は壺の口縁部でやや垂れ下がる突帯が、口縁部外周に巡るものである。
4は壺の口縁部と思われるが、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整が行なわれている。

5は壺でくの字に外反する口縁を持つ、内外面共に、ハケ目調整が行なわれている。
6、7は鉢と思われる。外面は放射状のヘラミガキが施され、7は台状底部が見られる。
8は脚台付の鉢の底部と思われる。外面はナデ調整となっている。

以上、遺物に、弥生中期末～後期初頭、後期末～終末、古墳時代、平安時代と混在が見られ、どの遺物が住居跡にともなうものか明確に出来ない。



第30図 25号住居跡実測図



第31図 25号住居跡出土遺物実測図

15) 22、31号住居跡（第32図）（図版17）

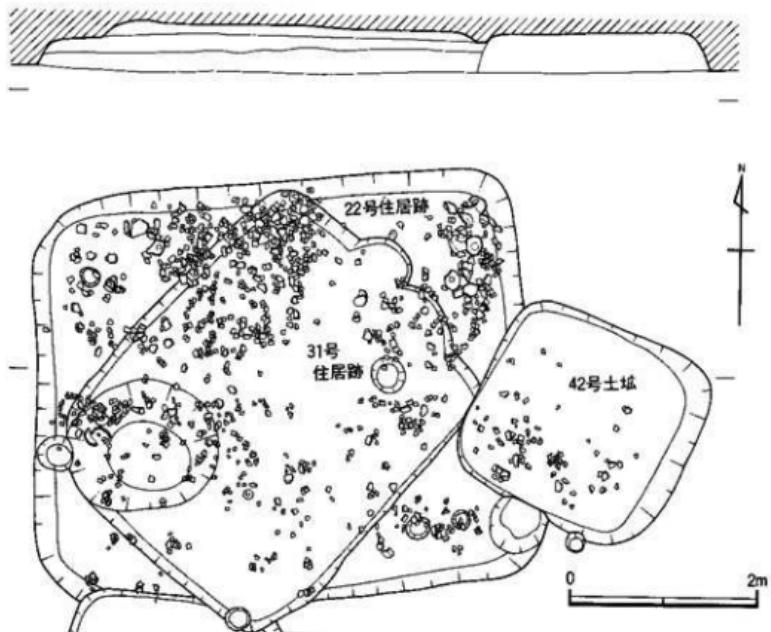
C-5区南端部において重複して検出されたもので、22号住居跡が $5.2\text{m} \times 4.4\text{m}$ の隅丸方向プラン、31号住居跡が $4\text{m} \times 3.3\text{m}$ の隅丸方向プランで、土層及び遺物出土状態からも31号の先行する事がうかがわれる。22号住居跡内には多量の土器片が残存しており投棄されたものと思われる。

出土遺物（第33、34、35図）（図版48、49）

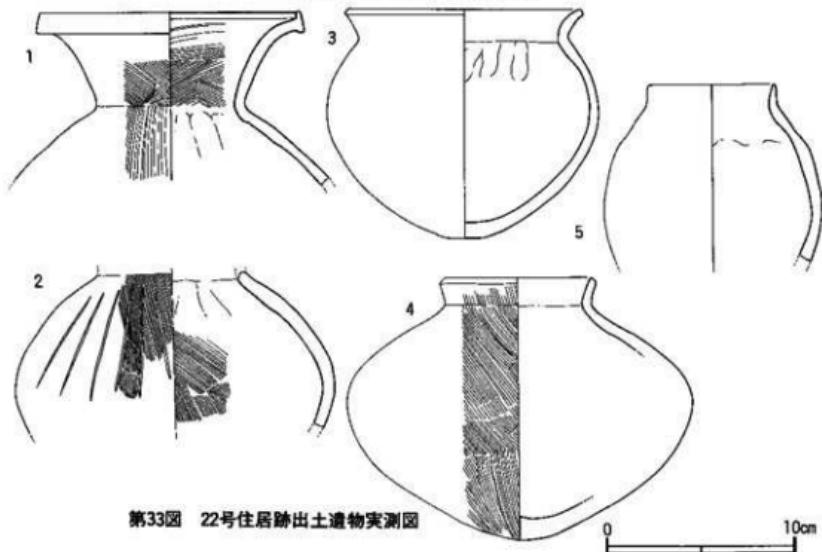
すべて22号住居跡出土のものである。1~6は壺で、1は二重口縁壺であるが、ほとんど複合口縁は残っていない。2は体部にヘラ描が残る。3は短く外反する單口縁で内外面ともナデ調整が行なわれている。4も短い單口縁であるが、口径は3に比べて小さい。調整はハケ日で内面はナデされている。5、6は無頭壺に近いもので、フットボール状の体部に極端に短い口縁を持つもので、ナデ調整が行なわれている。7、8は鉢で、7の底部に台状の平底を持ち内外面共に磨かれている。8はハケ目調整である。9、10は高壺で段を持って広がる脚部に9は3方向、10は4方向の穿孔が施されている。9の口縁部外側に一部ハケ目に残るが、最終調整は、両方共、ヘラミガキである。11は器台で太い脚部下半に4方向の穿孔がある。

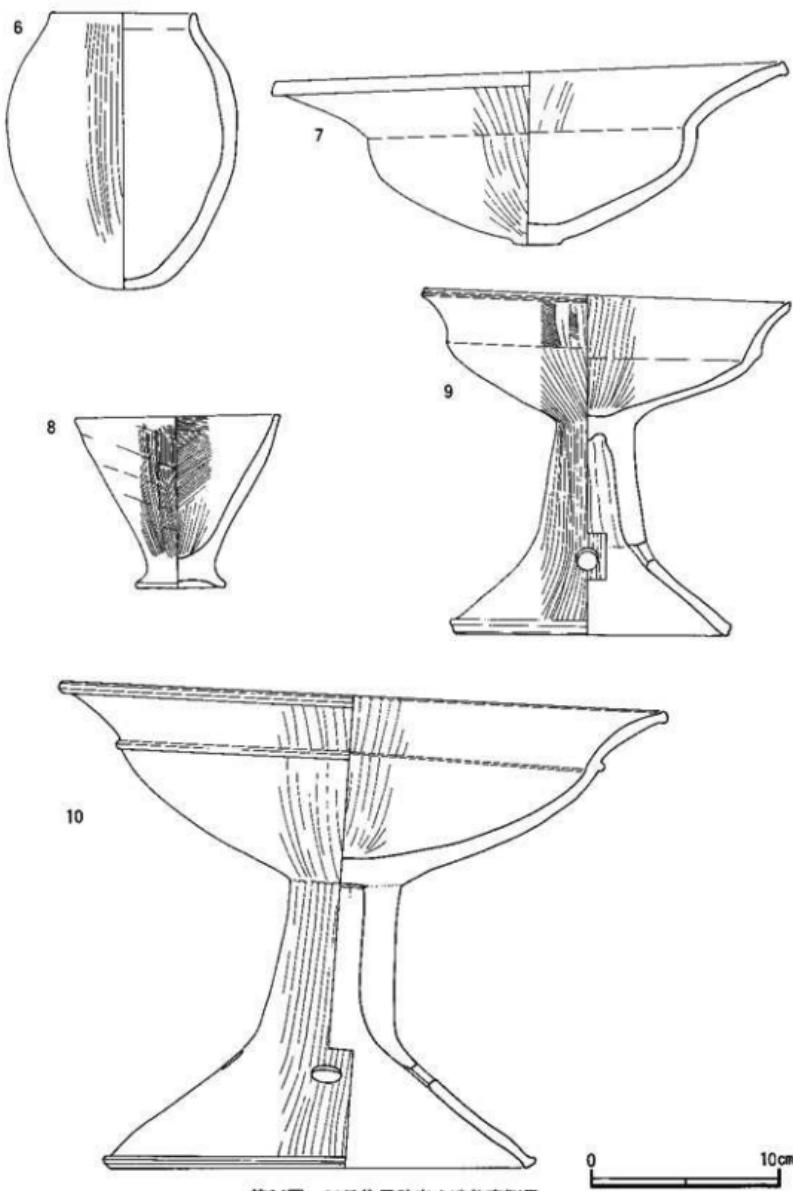
12、14は脚台付の壺で13の体部下半はヘラケズリ調整が行なわれ、他の部分もヘラナデが行なわれている。

時期的には弥生時代終末期を当てておくが、1の口縁、11の脚部、9、10の据部のふくらみや、ヘラケズリ、ナデと言った調整等、本遺跡中のこの時期に比定した遺物の中でも、最も降る位置に置けるものと思われる。

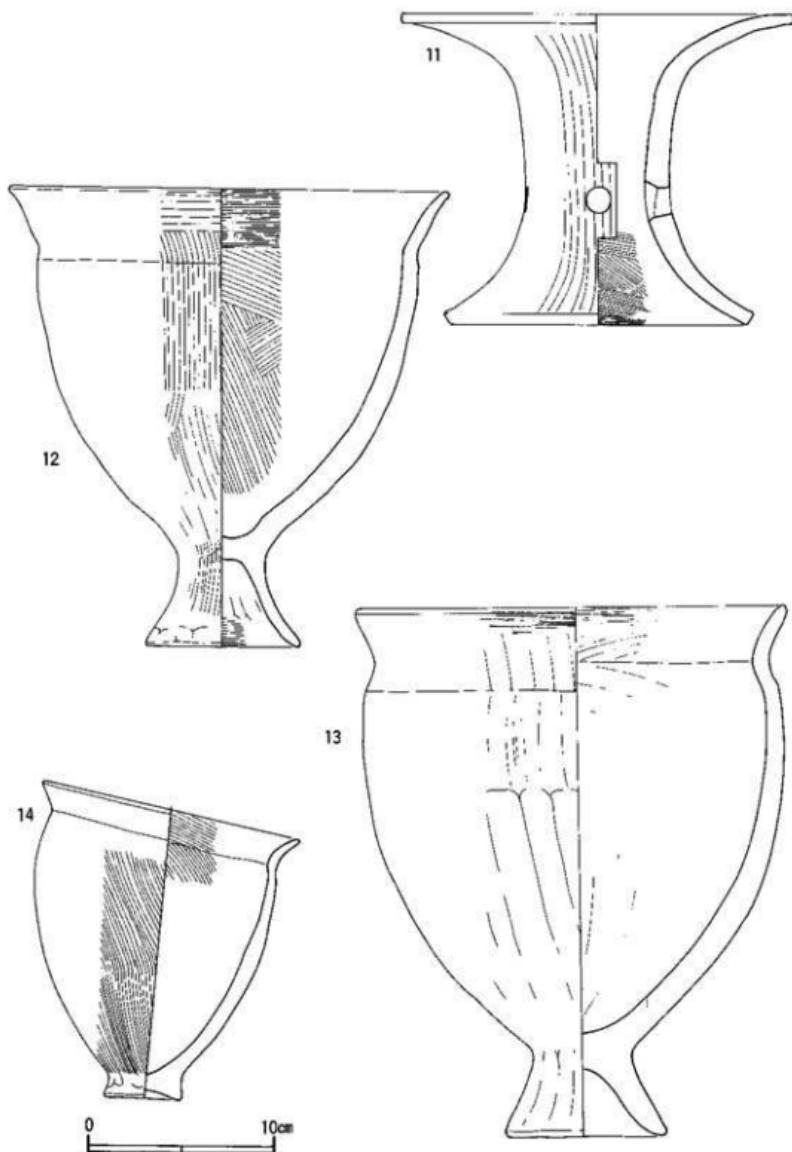


第32図 22・31号住居跡実測図

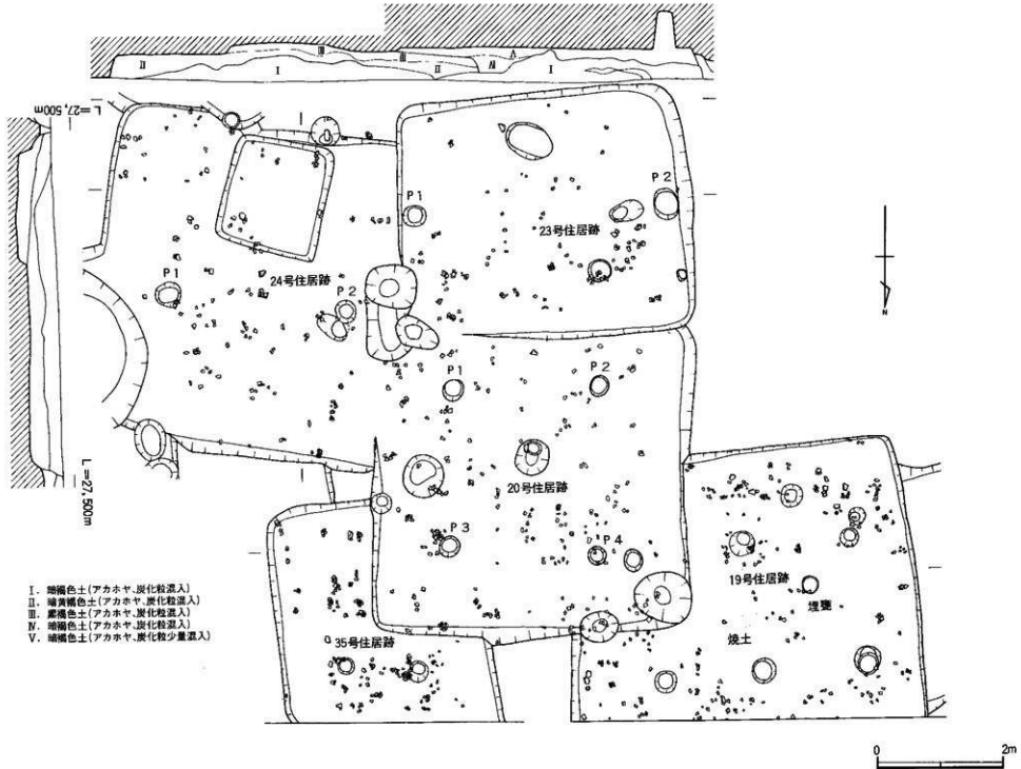




第34図 22号住居跡出土遺物実測図



第35図 22号住居跡出土遺物実測図



第36図 19・20・23・24・35号住居跡実測図

16) 19、20、23、24、35号住居跡（第36図）（図版15～17）

C-6区において、重複して検出されたもので、いずれも方形プランのものである。

19号住居跡は東西約5.5mを測り南東部分を20号住居跡に切られている。床面中央付近に焼土と、やや西に離れて埋甕が検出された。

20号住居跡は、 5×5 mを測り、19、35号住居跡を切って構築されている。柱穴は4本（P1～P4）である。

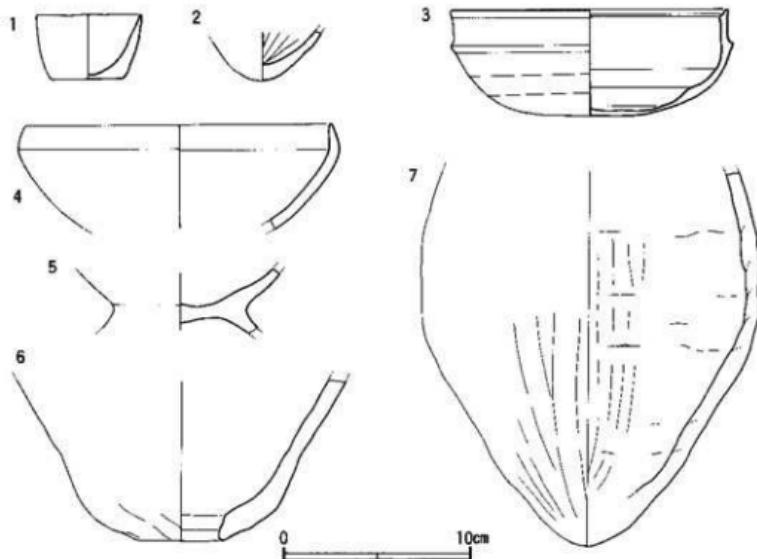
23号住居跡は、 4.6×4 mを測り、24号住居跡に切られている。柱穴は2本（P1、2）。

24号住居跡は南北5.2mを測り、柱穴は2本（P1、2）である。

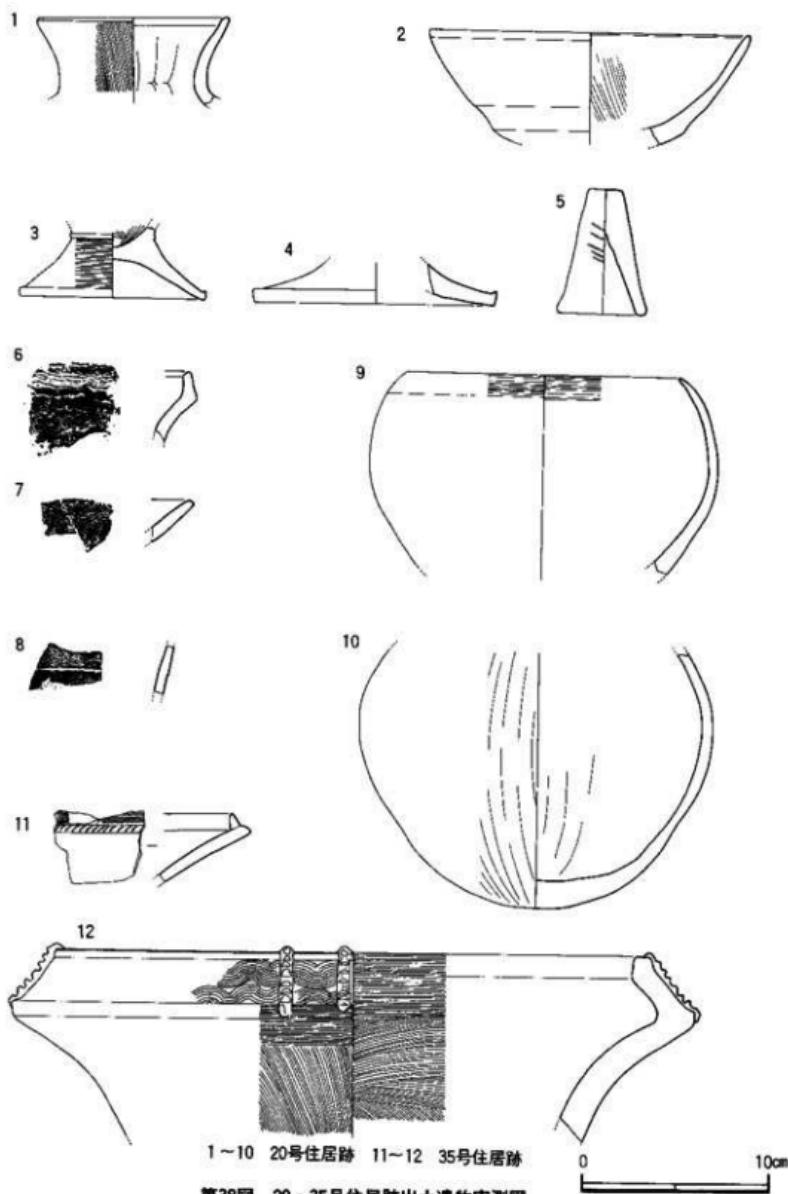
35号住居跡は東西3.4mの小形のもので、20号住居跡に切られているものである。

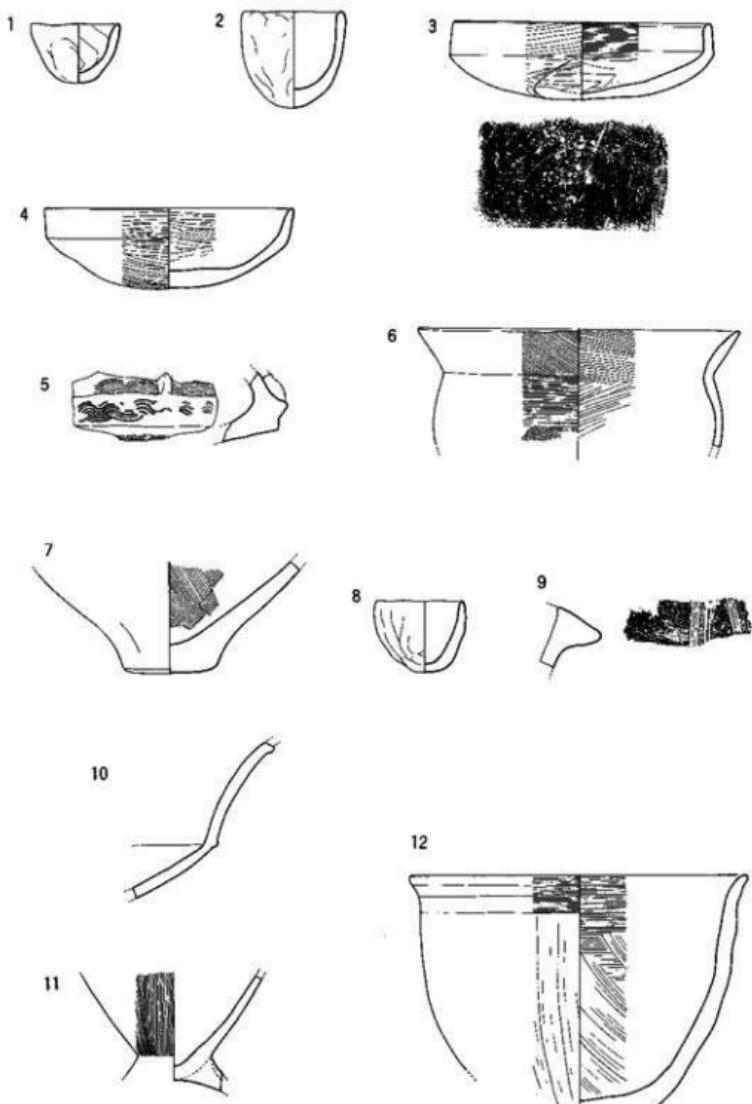
出土遺物（第37～39図）（図版50、51）

第37図1、2はミニチュア土器で、3は須恵器、4は土師器の壺である。6は単口の瓶で、7が埋甕である。第38図1は壺の口縁部で、3は台付鉢の脚部と思われる。5は土製の支脚と思われるが二次焼成の痕跡は見られない。外面に平行タキ痕を残す。8は波文帯を持つ薄手の上器片で、11は波状文と刻目を施された口縁部片である。12は大形のいわゆる安国寺式二重口縁壺の口縁部で、紐状の刻目浮文が強烈付けられている。第39図1、2は手すくねのミニチュア土器で、3、4は土師式の壺、ヘラミガキが施されており、3の底部にはヘラ記号状の線刻が残る。5は二重口縁壺の口縁と思われるが、屈曲部外面にも面を持ち、波状文と浮文を施している。



第37図 19号住居跡出土遺物実測図





第39図 23・24号住居跡出土遺物実測図

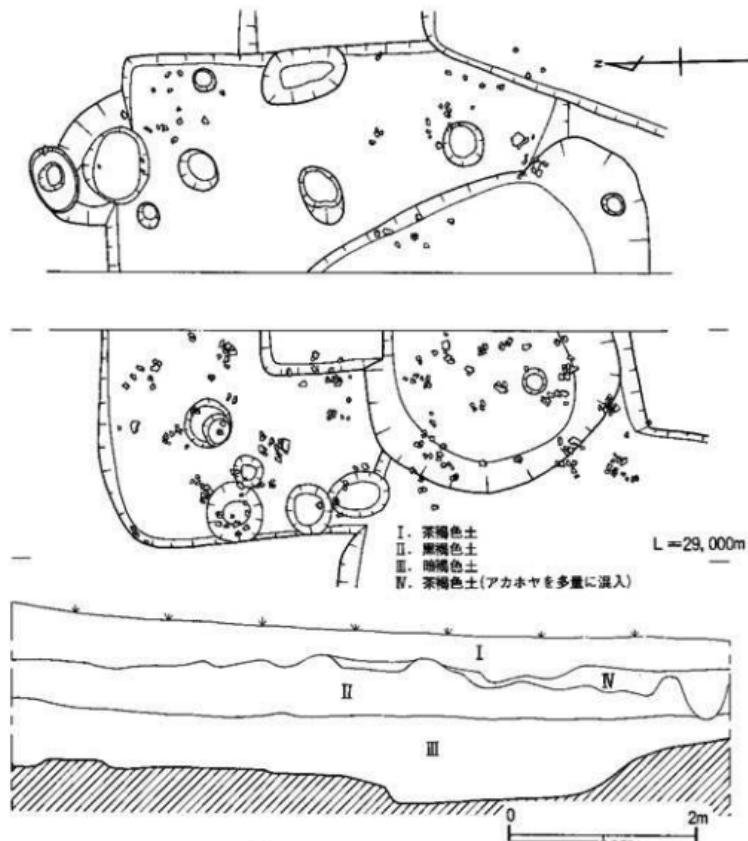
17) 21号住居跡（第40図）（図版19）

C-5区と6区の境に検出された住居跡で、 $5.6 \times 5.5\text{ m}$ の方形プランを呈し、南半分に擾乱を受けている。

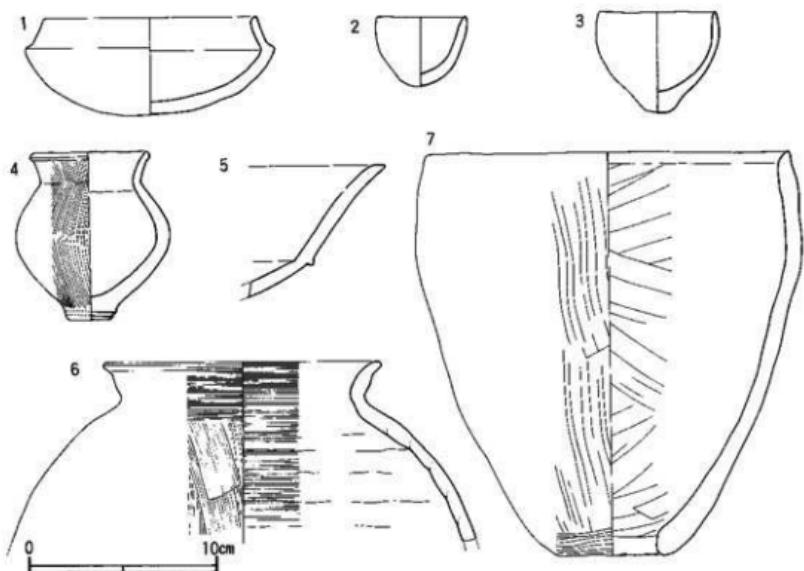
出土遺物（第41図）（第52図）

1は土師器の壺形土器、2~4はミニチュアの土器で、4は壺形土器のものである。底部に横に穿孔がある。5は高Jの壺部片と思われる。6は壺形土器で短く外反する口縁に、球型の肩部を持つものと思われる。体部内面には粘土紐による成形痕を残す。7は瓶で、深鉢型の器形を呈する單口のものである。内外面共にヘラナデにより調整されている。

明確に遺構に伴う遺物の限定は出来ないが、5世紀末~6世紀前半代に位置づけられると思われる。



第40図 21号住居跡実測図



第41図 21号住居跡出土遺物実測図

18) 28号住居跡（第42図）（図版22）

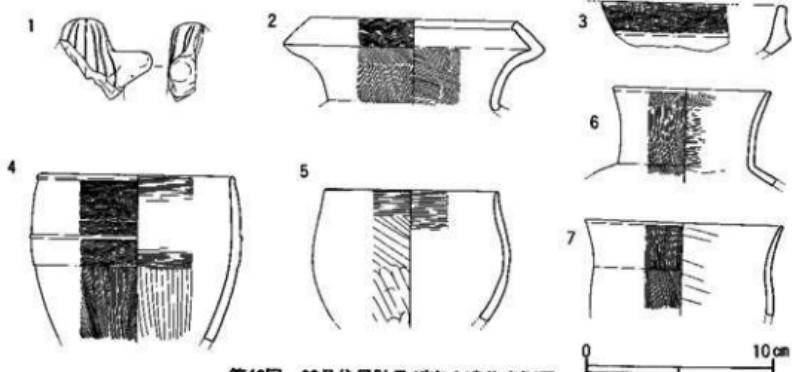
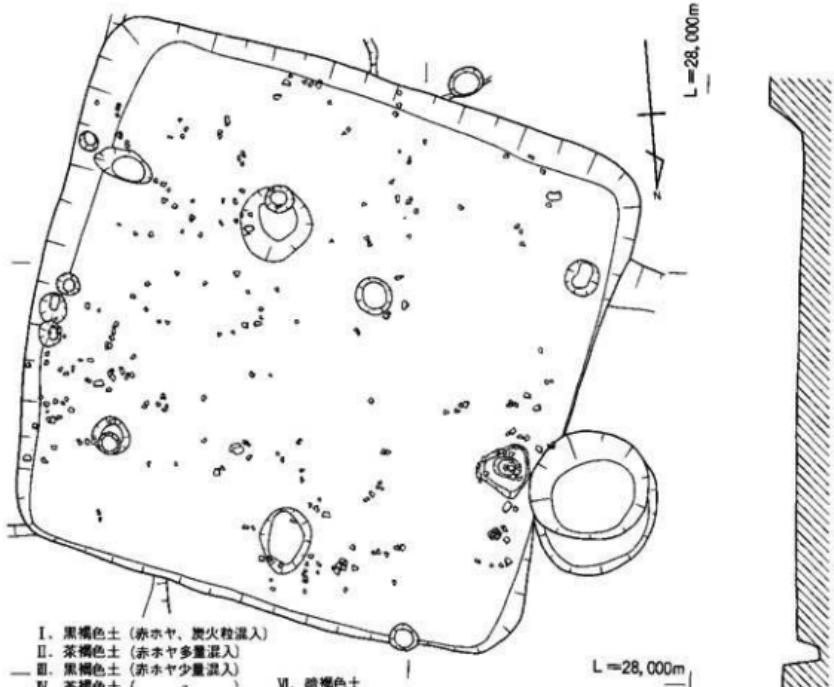
C-6区にて検出された住居跡で、 $6 \times 6\text{ m}$ を測る方形のプランのものである。本遺跡中では大型な規模のものである。

出土遺物（第42、43図）（図版53）

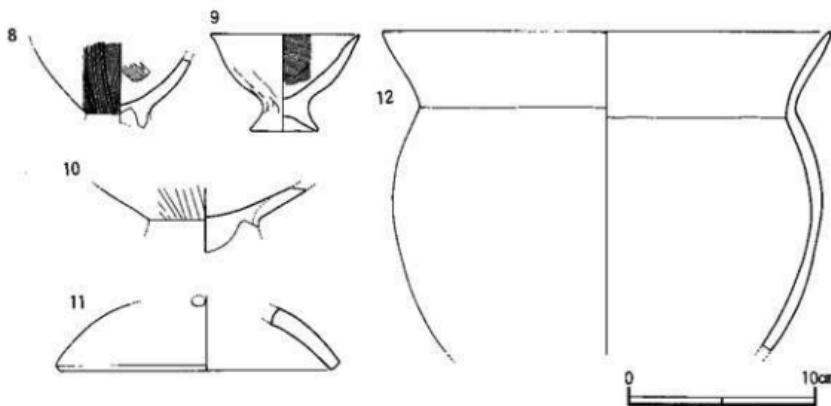
1は土偶片である。後頭部及び右腕が残っており、中心より分けた長い頭髪を沈線で表現している。女性を感じさせる造りで、33号住居跡出土の土偶と大きさ、胎土等も似たものとなっている。2は、所謂、安国寺式の二重口縁壺口辺部で、コンパス波状文を二重に巡らせている。3は器形不明、口縁部片であるが、外面に波状文が施されている。4～7は、非常に薄手の土器で、繊密な造りなど、他の共伴土器とは一線を画すものである。6は壺の口縁部、4～7は鉢の破片で、4はその典型である。ハケ目調整時に一段高い波状文帯を造り出すもので、削り出しの突帯により区画され、文様帯は二段になっている。8は脚付きの鉢片と思われるが、4のタイプの底部の可能性が高いものである。9～11は高环で、9はミニチュアである。

10は环部と脚部の接合部片で、内部充填式の高环である事がうかがえる。11は脚部片で、円形の窓が施されている。12は臺で、広く口辺の開くものである。

本住居跡の出土遺物も埋土中からの出土遺物であり、他と同じく、擾乱等も受けて11、12の遺物等、時期の降る様相のものも含まれるが、一応、本住居跡は、弥生時代後期末～終末期に位置づけられるものと思われる。



第42図 28号住居跡及び出土遺物実測図



第43図 28号住居跡出土遺物実測図

19) 10、11、12、13、14、15号土壙（第44図）（図版21）

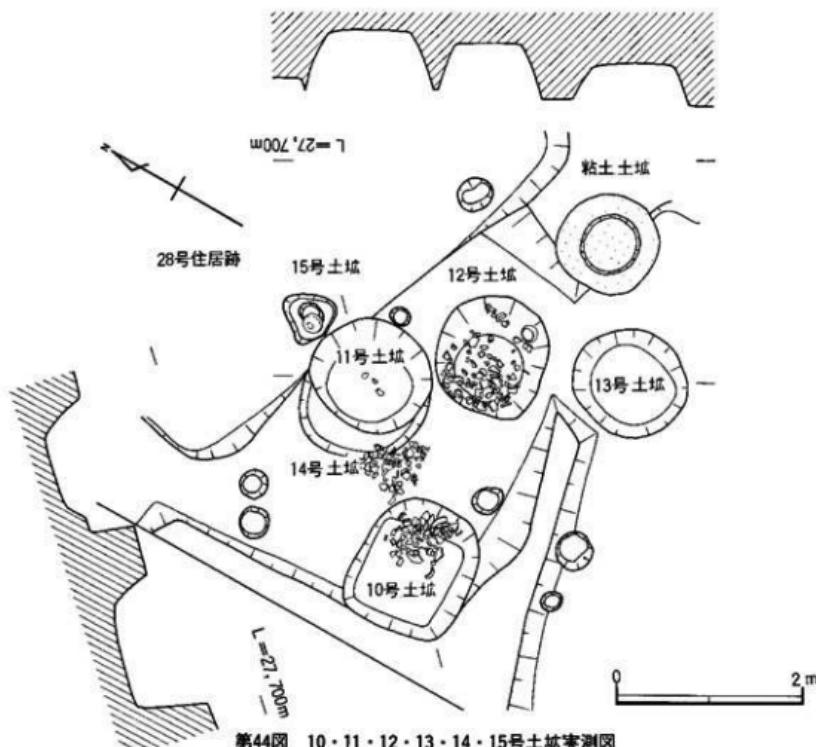
C-6区に集中して検出された土壙で、いずれも直径約1.2m、深さ約60cm程のものである。遺物は、10、12、14号を中心に出土し、これらが互いに接合された事から、同時期のものである事がうかがわれる。

出土遺物（第45、46、47、48図）（図版55）

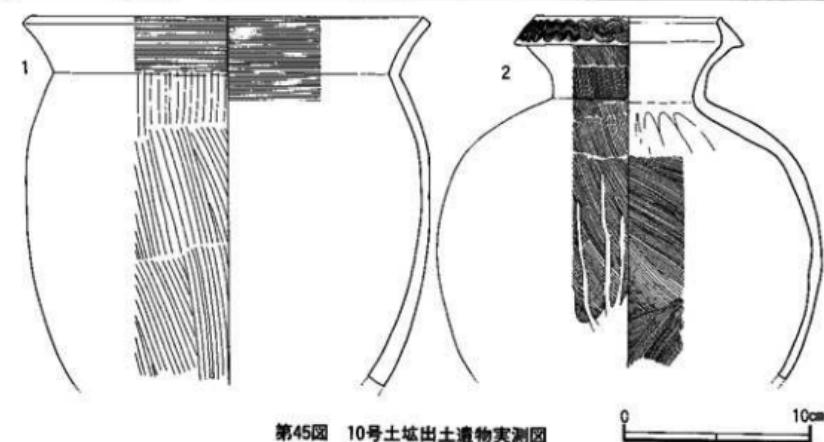
第45図1は壺でくの字に開く口縁で横ナデにより調整され、体部はハケ目、2及び46図1～3は壺で、46図2が單口縁壺、他は安国寺式の二重口縁壺である。4～7は鉢で、4、5はヘラ磨き、6、7はハケ目調整が施される。8は壺か壺片である。口縁と体部境に、刻目突帯をもつものである。9は壺のミニチュアで、10は鉢、11、12は壺の底部であるが、外面は平行タタキが施されている。第47図1～6は壺で、1、2は安国寺式の二重口縁壺、他は單口縁壺であるが、3は小口のもので、6はラッパ状に大きく外反する口縁を持つものである。7は壺で、くの字に開く口縁から体部まで、ハケ目による調整を受けている。

第48図は、すべて壺である。2は單口縁壺、3は体部のみで、上方にヘラ記号状の線刻がある。他はすべて二重口縁壺であるが、1及び6には、口縁部の所謂櫛描波文状は施文されていない。

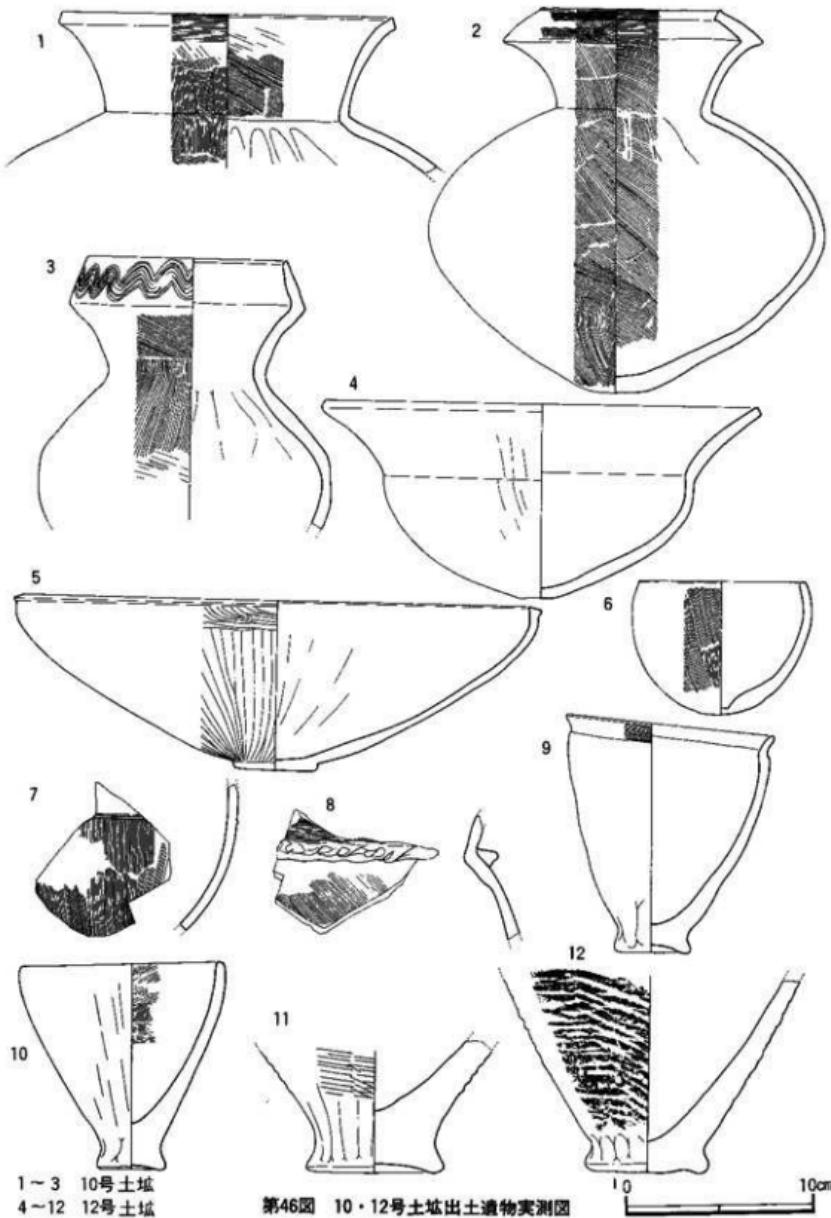
前記の様に、各土壙間に接合関係が見られる事から、これらの上壙はすべて同時期の所産であり、擾乱等もほとんど見られなかった所から、セットをしてとらえるもので、その時期は弥生時代終末期に位置づけられるものであろう。



第44図 10・11・12・13・14・15号土塚実測図

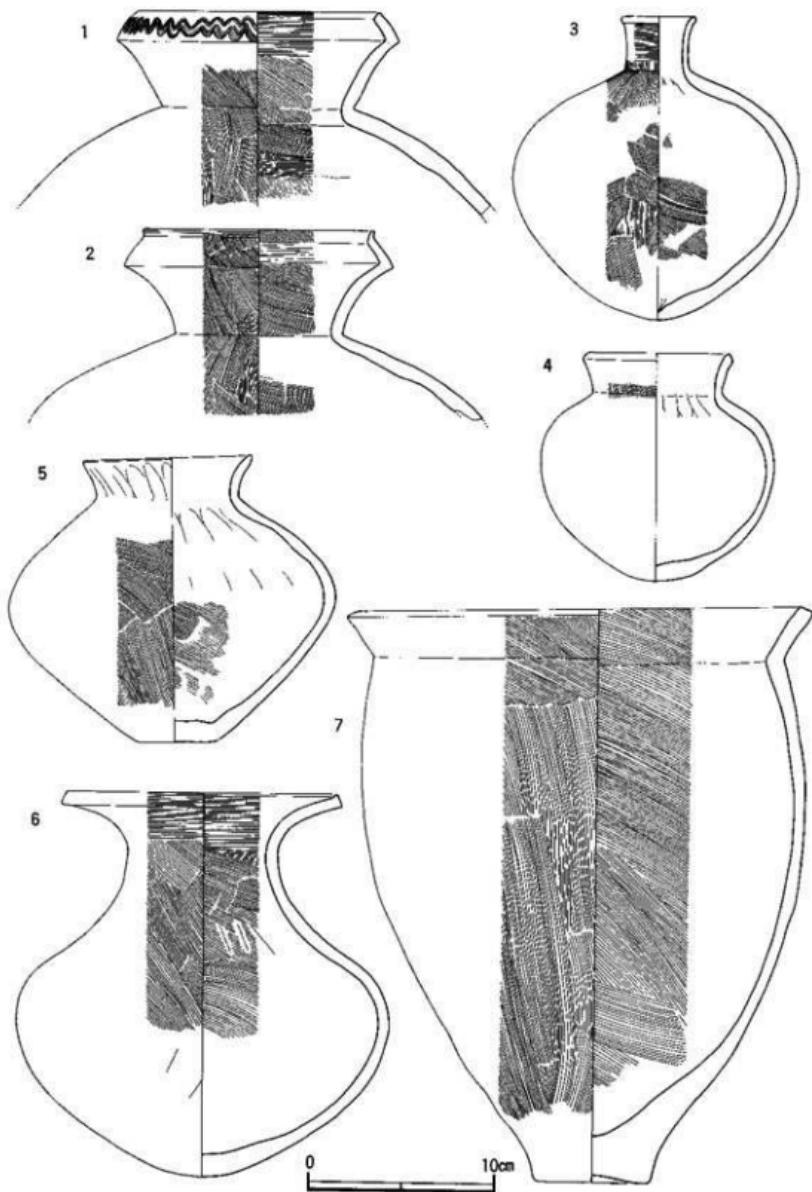


第45図 10号土塚出土遺物実測図

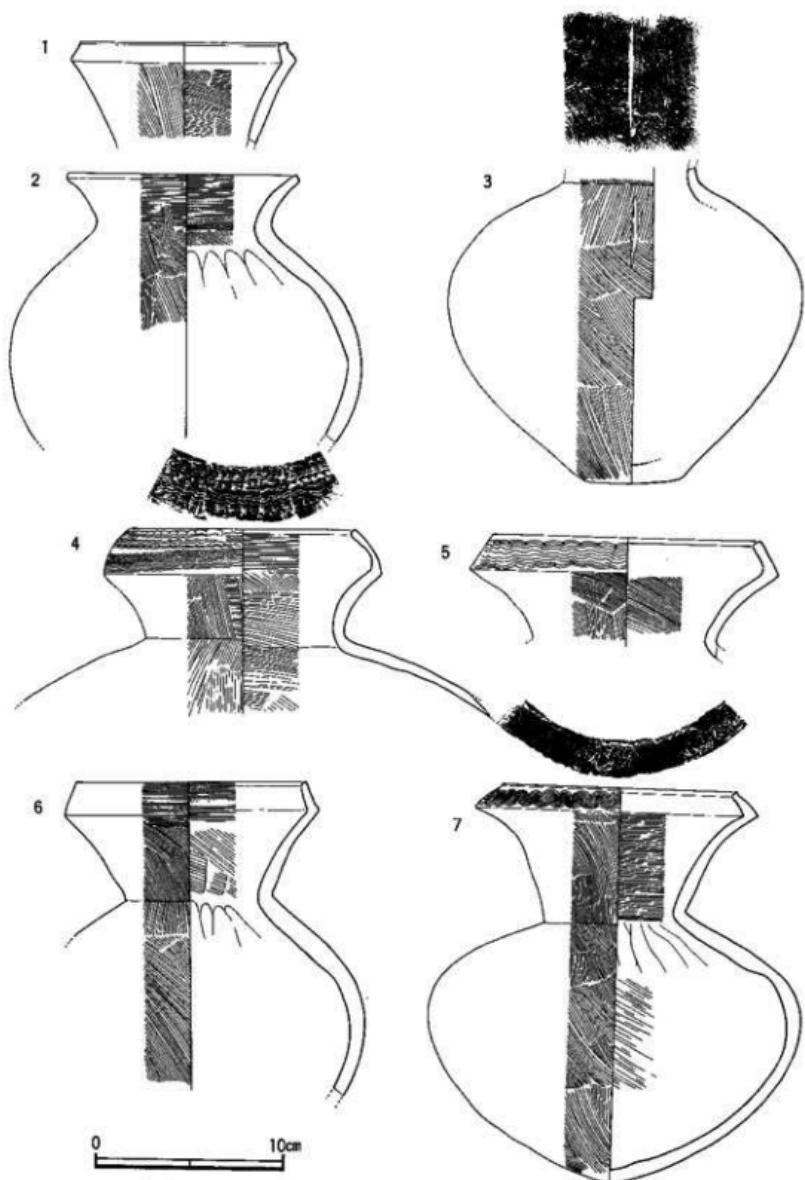


第46図 10・12号土塙出土遺物実測図

1~3 10号土塙
4~12 12号土塙



第47圖 12號土塚出土遺物實測圖



1 11号土塚 2 14号土塚 3 15号土塚 4~7 10・12・14号土塚接合遺物
第48図 11・14・15及び10・12・14号土塚出土遺物実測図

20) 37号住居跡、18号土塙(第49図)(図版20)

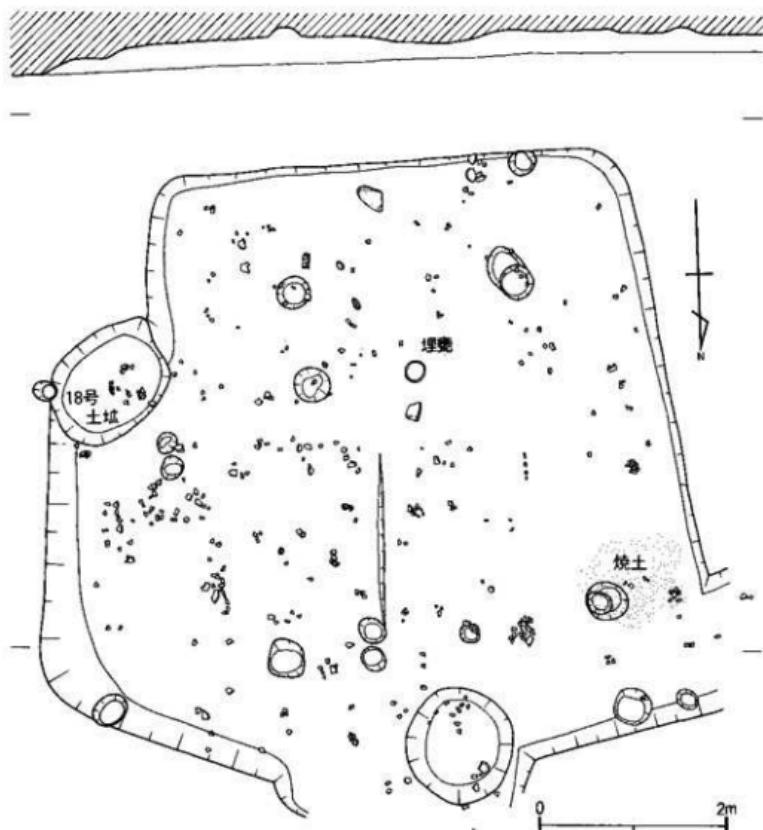
C-6区南端において検出されたもので、37号住居跡は不整形プランで、他の住居跡等の重複も考えられる。18号土塙はその東壁に重複している。

出土遺物 37号住居跡(第50図)(図版56) 18号土塙(第51図)(図版57)

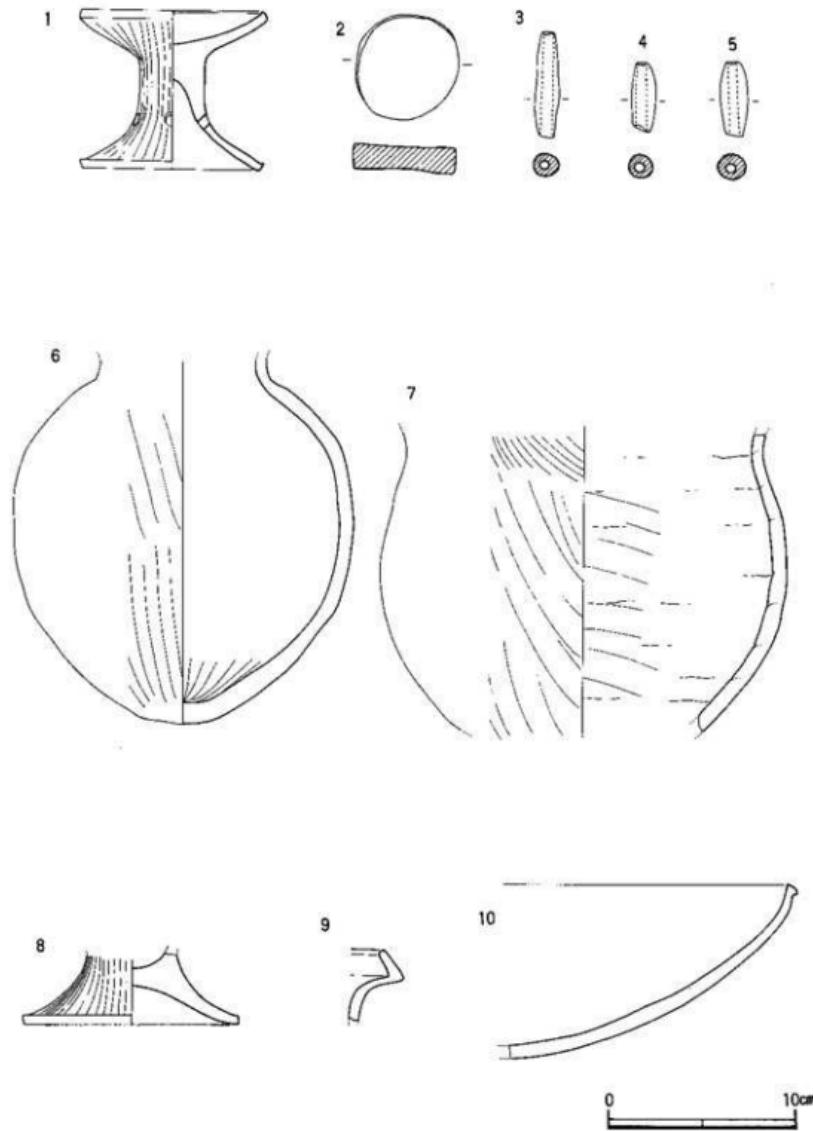
第50図1は、ミニチュアの高环、2は円盤形土製品、3~5は土鍤で、6は壺、7は埋甕である。8は台付鉢の脚部片、9は二重口縁壺片、10は鉢片である。

第51図1~2は台付鉢で、波状文帯を持つ薄手の土器である。3は高付片、4は安国寺式の二重口縁壺の口縁片、5~7は壺でハケ口調整のくの字口縁のものである。

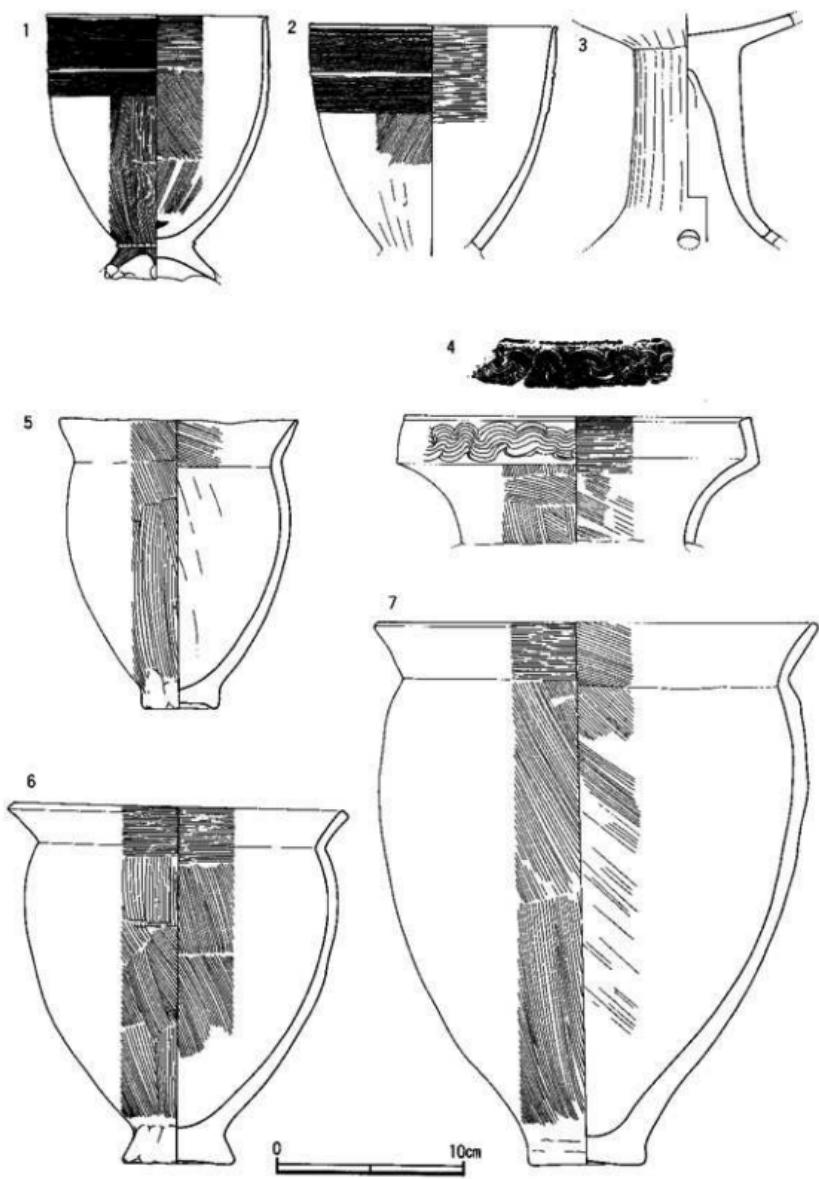
37号住居跡は出土遺物から、古墳時代のものと思われ、弥生時代終末期の造構との切り合いが考えられる。なお、18号土塙も弥生時代終末期に位置づけられるものである。



第49図 37号住居跡18号土塙実測図



第50図 37・38号住居跡出土遺物実測図



第51図 18号土塚出土遺物実測図

21) 26号住居跡 (第52図) (図版22)

C-6区にて検出されたもので、 $3 \times 2.6\text{ m}$ の比較的規模の小さなものである。

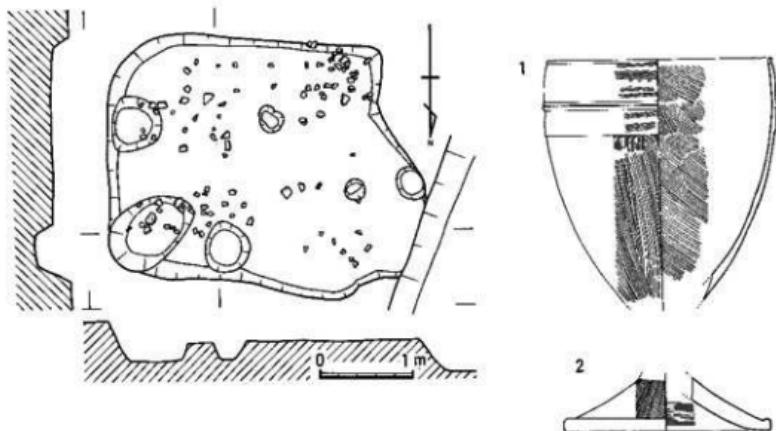
出土遺物 (第53図) (図版58)

1は台付鉢で脚部を欠いている。ヘラの木口により一段高く波状文帯を削り出す薄手の土器で、本住居跡のものは、二段の文様帯を持ち、その間に二本の削り出しによる細い突帯を持つものである。

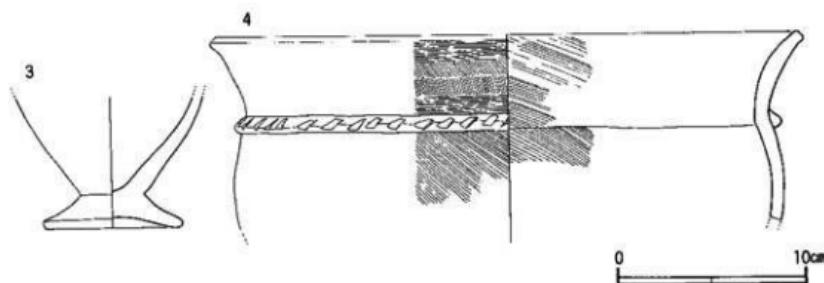
2、3は台付鉢の脚部と思われるが、1の脚部かどうかは不明である。

4は甕の口縁部から胴部片で、口縁部と胴部の境に刻目突帯をめぐらせている。内外面はハケ目による調整を行なっている。

26号住居跡及び19号土塙共にその位置づけは、弥生時代終末期に比定されよう。



第52図 26号住居跡実測図



第53図 26号住居跡出土遺物実測図

22) 27号住居跡、19号土塁 (第54図) (国版23)

C-6区において検出されたもので、27号住居跡は、29、36号住居跡に切られており、19号土塁は27号住居跡東壁に接して検出された。

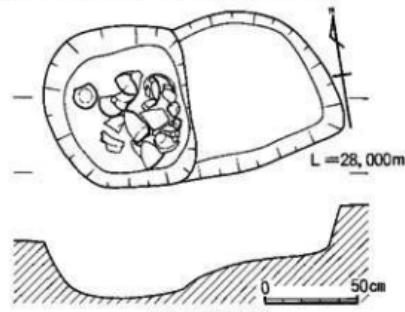
27号住居跡は 5×3.6 mを測る長方形プラン、19号土塁は 0.86×1.6 mの楕円形で二段掘りとなっており、深い部分に土器が集中して出土した。

出土遺物 (第55、56、57図) (国版59、60)

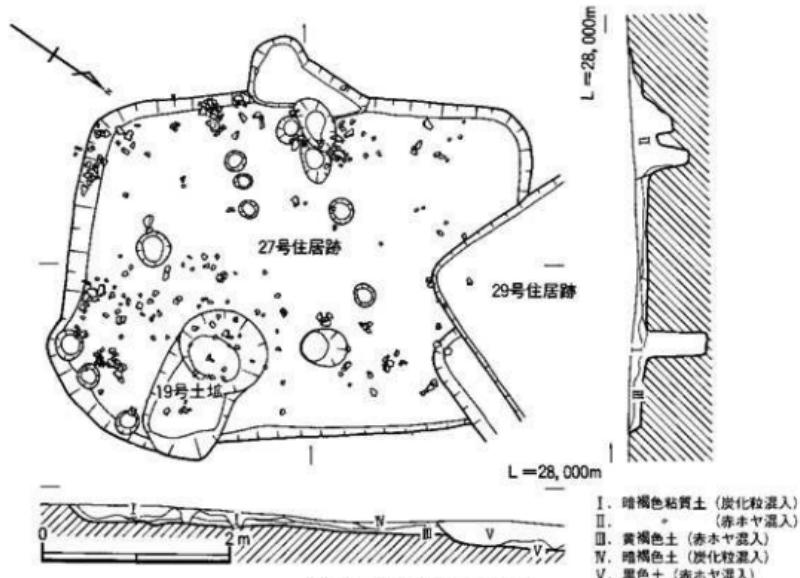
第55図1、2は壺片で、1は安国寺式の二重口縁、2は頭部に刻目突帯をめぐらすものである。3~5は壺で、4はミニチュア、5は2の様に刻目突帯を頭部にめぐらすものである。

第56、57図1、2は壺、3、4は鉢、5、6は壺で、3は外縁の一部に平行のタタキ目が残り、4は脚台が付くものと思われる。6は口縁部を張り付けた跡が指頭痕と共に残り、胴部上方には平行のタタキ目が残るものである。

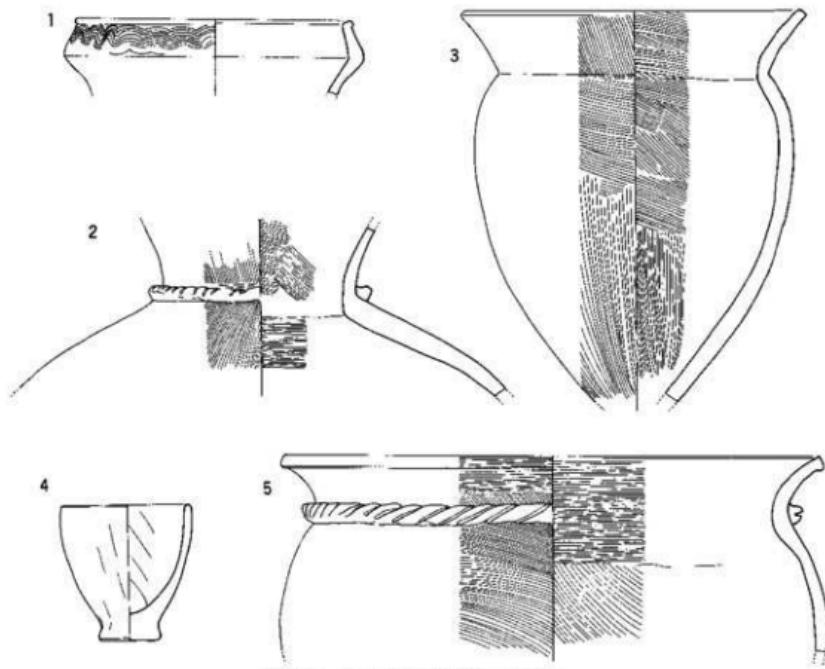
27号住居跡及び19号土塁共に弥生時代終末期に位置づけられるもので、19号土塁が、27号住居跡に付随する可能性を感じるものである。



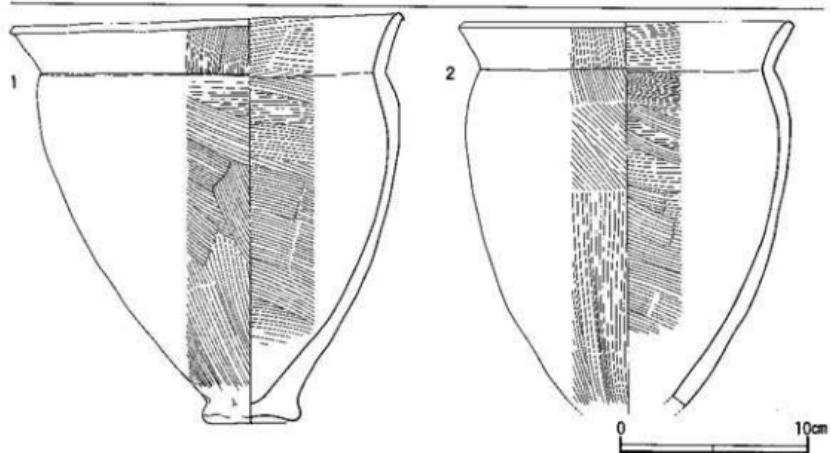
19号土塁実測図



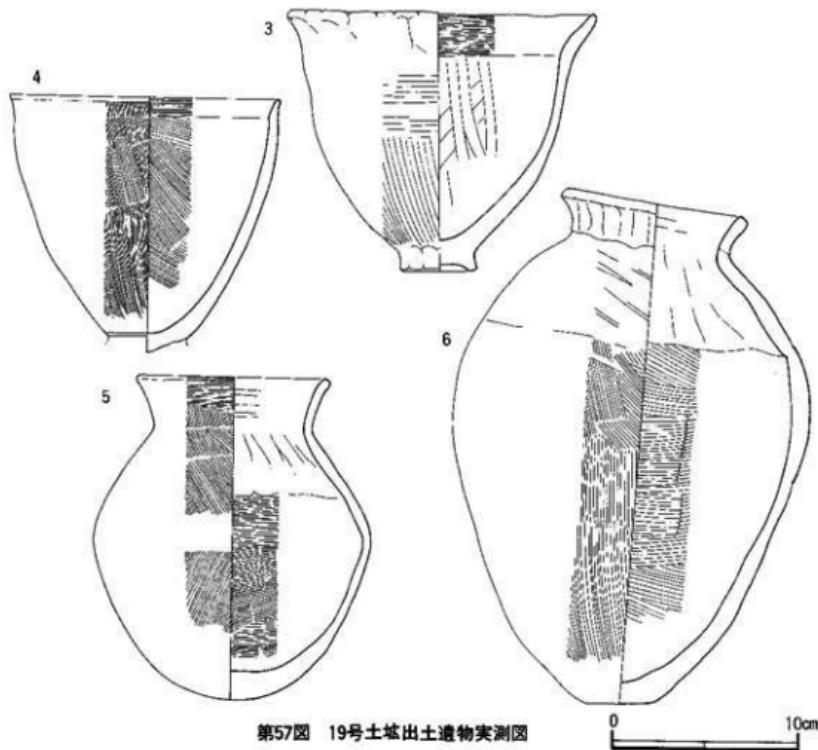
第54図 27号住居跡実測図



第55図 27号住居跡出土遺物実測図



第56図 19号土塚出土遺物実測図



第57図 19号土塚出土遺物実測図

23) 29、36号住居跡（第58図）（図版24）

調査区の東端、C-6区東部にて重複して検出されたもので、上層による新旧関係は明確に出来なかった。本遺跡中唯一の歴史時代の住居跡である。

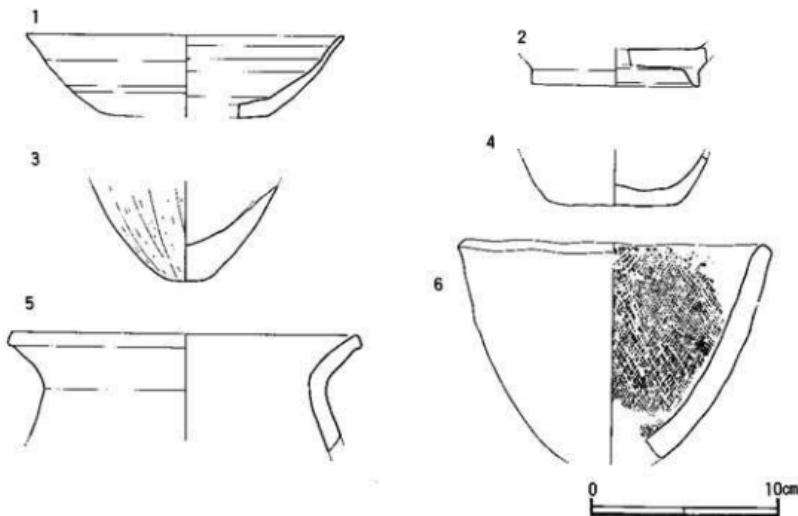
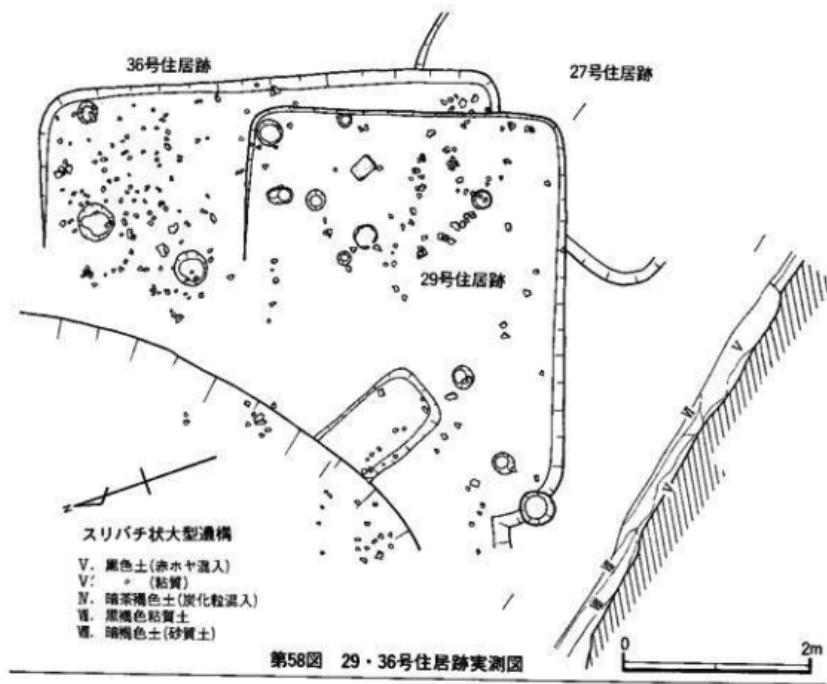
出土遺物 29号住居跡（第59図）（図版61）、36号住居跡（第60図）（図版61）

第59図 1は土師器の环である。直線的に大きく開いて立ち上るもので、ロクロにより成形されたものである。2は高台付环片で付高台となっている。4は壇の底部片と思われるがロクロにより成形されている。3は壇の底部片で外面はヘラケズリ、5は壇の口縁、6は布痕土器である。

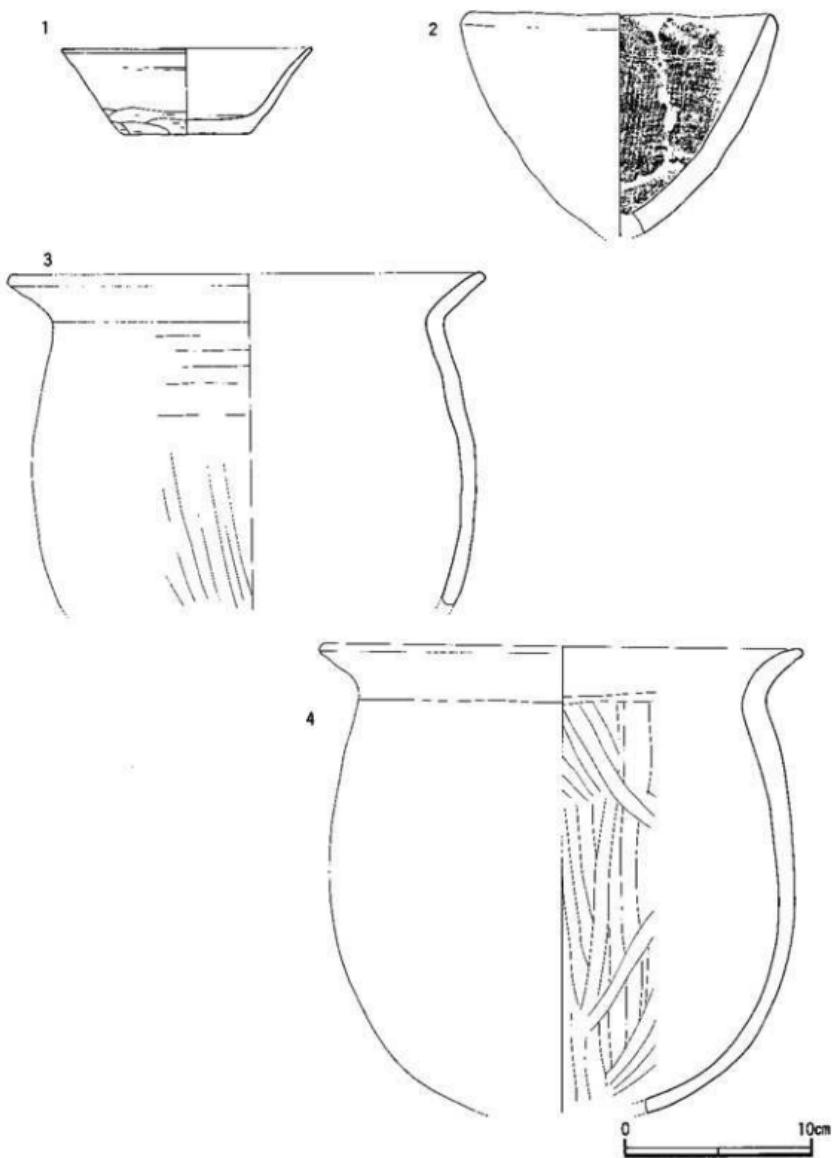
第60図 1は环で、ロクロ成形の土師器、底部及び体部下はヘラケズリにより調整されている。2は布痕土器、3、4は壇で4の内面はヘラケズリによる調整が施されている。

歴史時代の遺物自体は、調査区内より、他の遺構遺物と混在して確認しているが、住居跡は明確にしえない18号住居跡を除けばこの2軒のみである。

時期的には、2軒共ほぼ近い時期のものと思われ、8～9世紀時代の範囲でとらえておきたい。



第59図 29号住居跡出土遺物実測図



第60図 36号住居跡出土遺物実測図

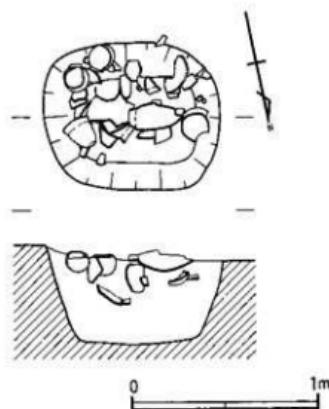
24) 5号土塙(第61図)(図版30)

C-3区にて検出された土塙で、95×80cm、深さ約50cmを測る隅丸長方形プランのものである。

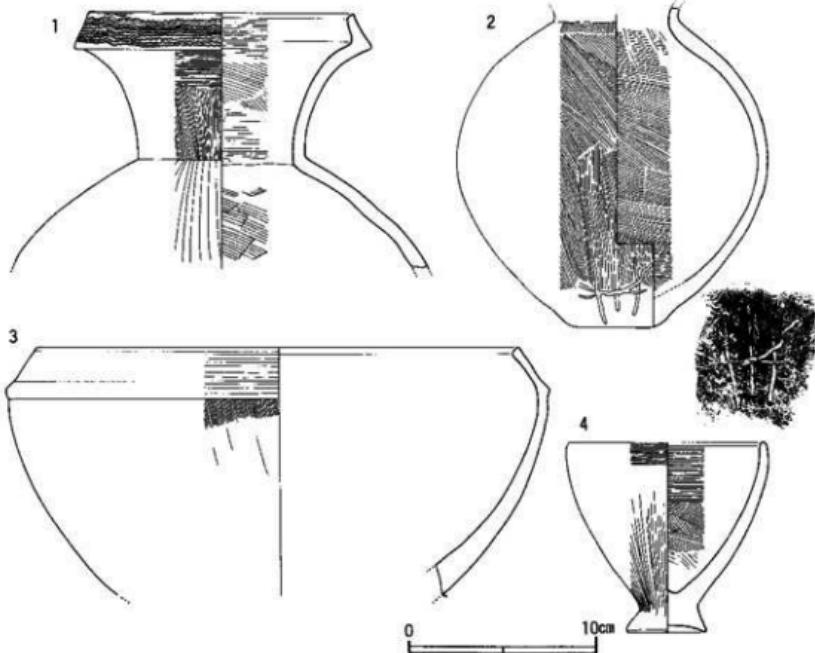
出土遺物(第62、63図)(図版62)

1、2は壺で、1は安国寺式の二重口縁壺、2は底部付近にヘラ描の施文を残す。3-5は鉢で、3は口縁が内傾し、4は台付で外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整が施されている。6-11は甕で、6、7の内面調整は横方向のハケ目の後、縱方向のヘラナデ調整が行われている。

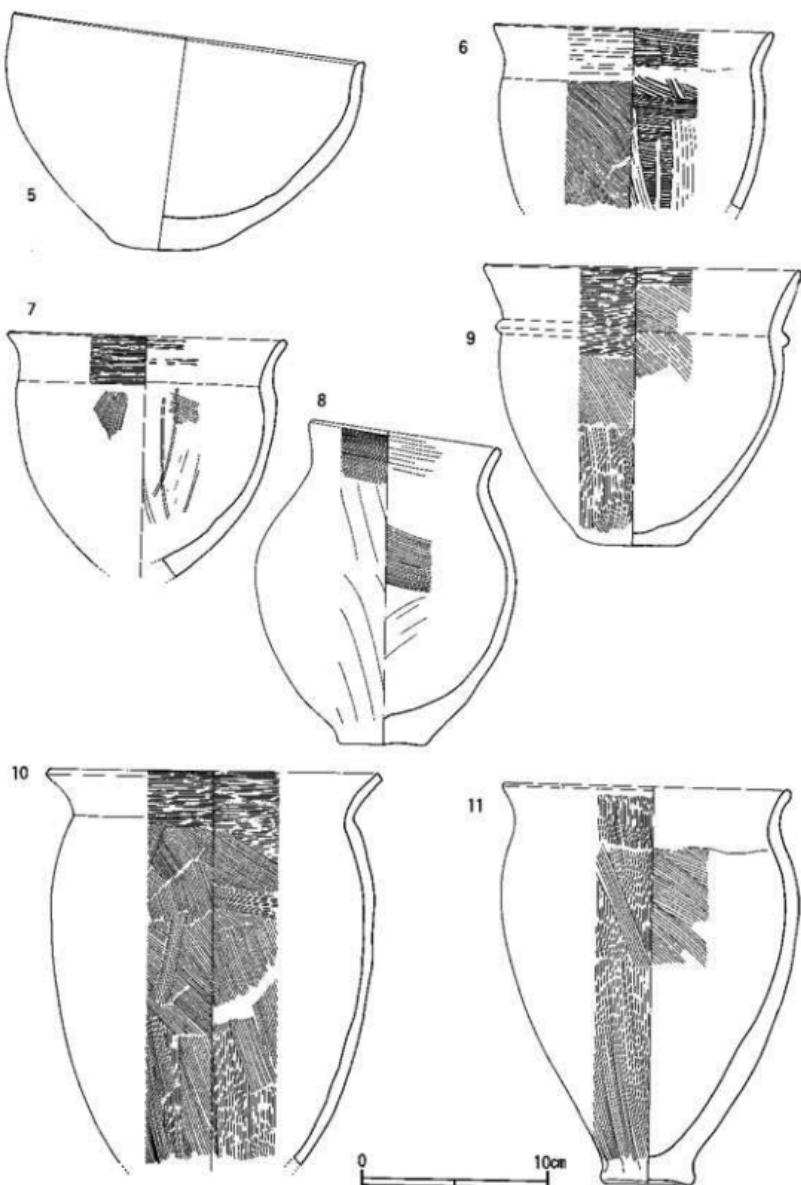
すべて一括資料として取り扱えられる出土状態のもので、弥生時代終末期に位置づけられると思われる。



第61図 5号土塙実測図



第62図 5号土塙出土遺物実測図



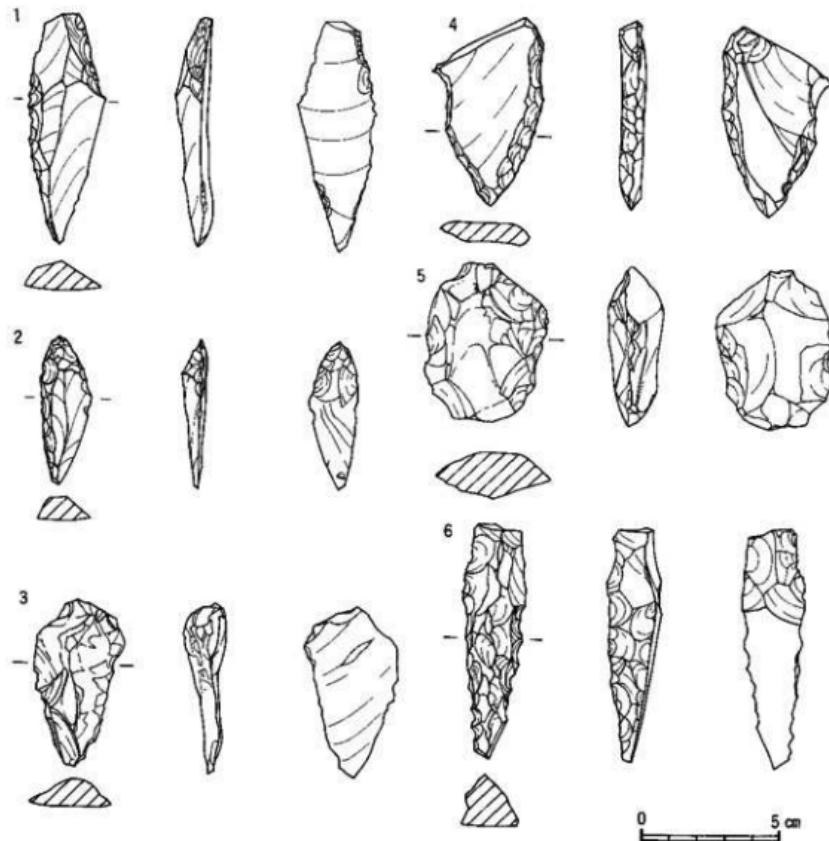
第63図 5号土塙出土遺物実測図

第2節 その他の遺構と遺物

1) 先土器時代の遺物 (図版63) (図版63)

調査区内は丘陵上と言う理由であろうが、南九州に広く分布するアカホヤ層は、南端部付近しか残存しておらず、B-5、6区においてはアカホヤ層下に位置する粘質の暗褐色土が表土直下に位置していた。この為遺構のプラン確認は、この暗褐色土上面にて行なった訳であるが、この暗褐色土の上面及び掘り込んだ遺構の埋土中に混在して、旧石器時代の石器が検出されたので紹介する。

1、2は頁岩製のナイフ形石器で縦長剝片を素材とする。1は基部に打面を残す面縁調整の



第64図 石器実測図

もので、全長8.2cm、2は小型で全長5.3cmの両縁調整ナイフである。

3はチャート製と思われる両縁調整ナイフ型石器で全長5.8cmを測る。

4は尖頭器で頁岩製の薄い剝片の両縁を調整している。風化が著しく黄白色を呈する。

現全長6.2cmを測る。

5は円形搔器で頁岩製、両面調整が施されている。中央部分の稜は磨耗しており、一部に自然面を残す。

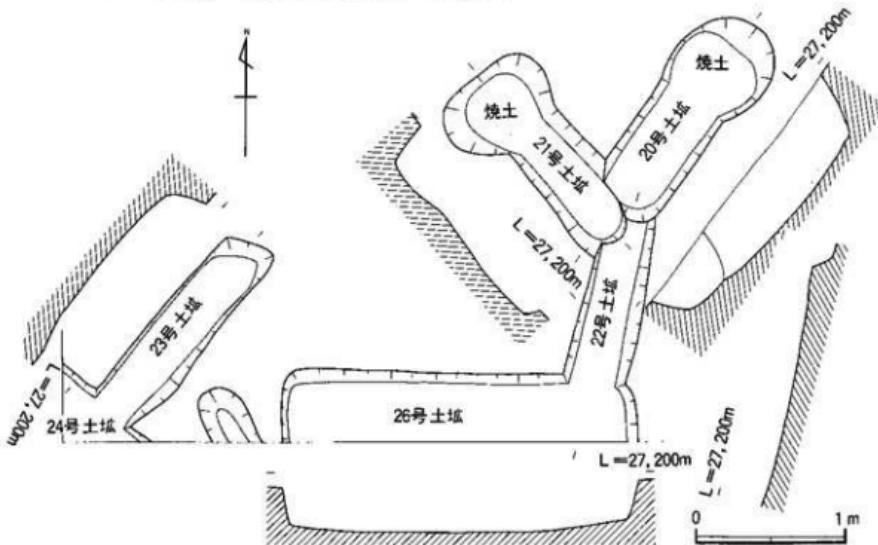
6は三稜尖頭器で流紋岩製と思われる。一面に自然面を残すが基部は調整されている。全長は、8.4cmを測る。

2) 繩文時代の遺構と遺物(第65、66図)(図版27、64)

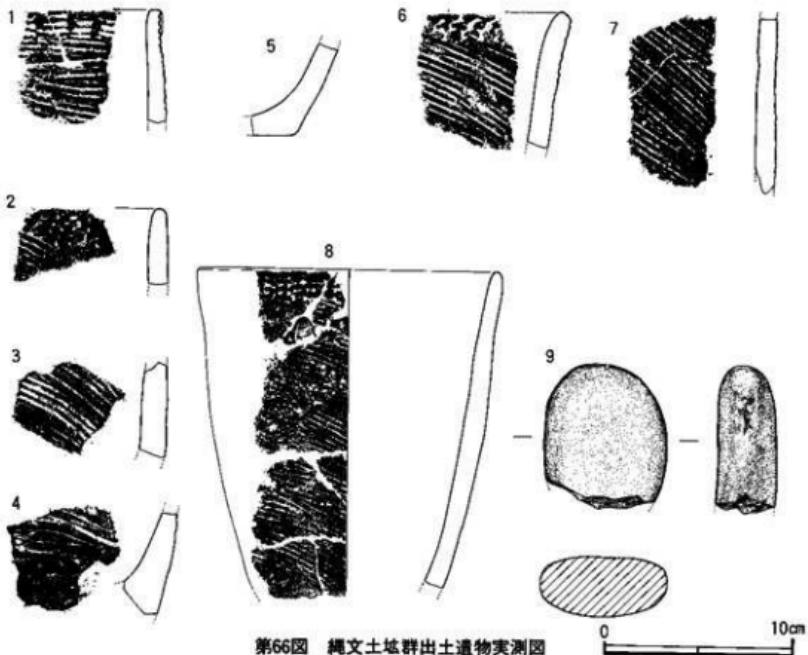
調整区内の遺構埋土中の遺物には混在が見られる事は記して来たが、これらの中に押彫文、貝殻文、撲糸文土器と言った繩文時代早期を中心とした遺物も含まれており、この為C-6区南側の搅乱を受けていない地区において、アカホヤ層を除去し、6基の土壙を検出した。

これらの土壙はカギ穴状のプランを持ち、肥大する方の底部付近に焼土を持つもので、連続して検出された。この特徴や傾向は、田野町前平遺跡群においても見られるもので、単なる貯蔵や落し穴では無く、何らかを焼成する施設の可能性を示唆するものであろう。

この土壙群からの出土土器はすべて貝殻腹縁文の深鉢形土器で、前平式の範疇に含まれるものである。また土壙群の内、26号土壙については、一部分のみの検出であり、土壙として掲げてあるが、住居跡の可能性もある事を記しておきたい。



第65図 繩文時代土壙群実測図



第66図 繩文土器群出土遺物実測図

3) スリバチ状大型遺構 (第3図) (図版25)

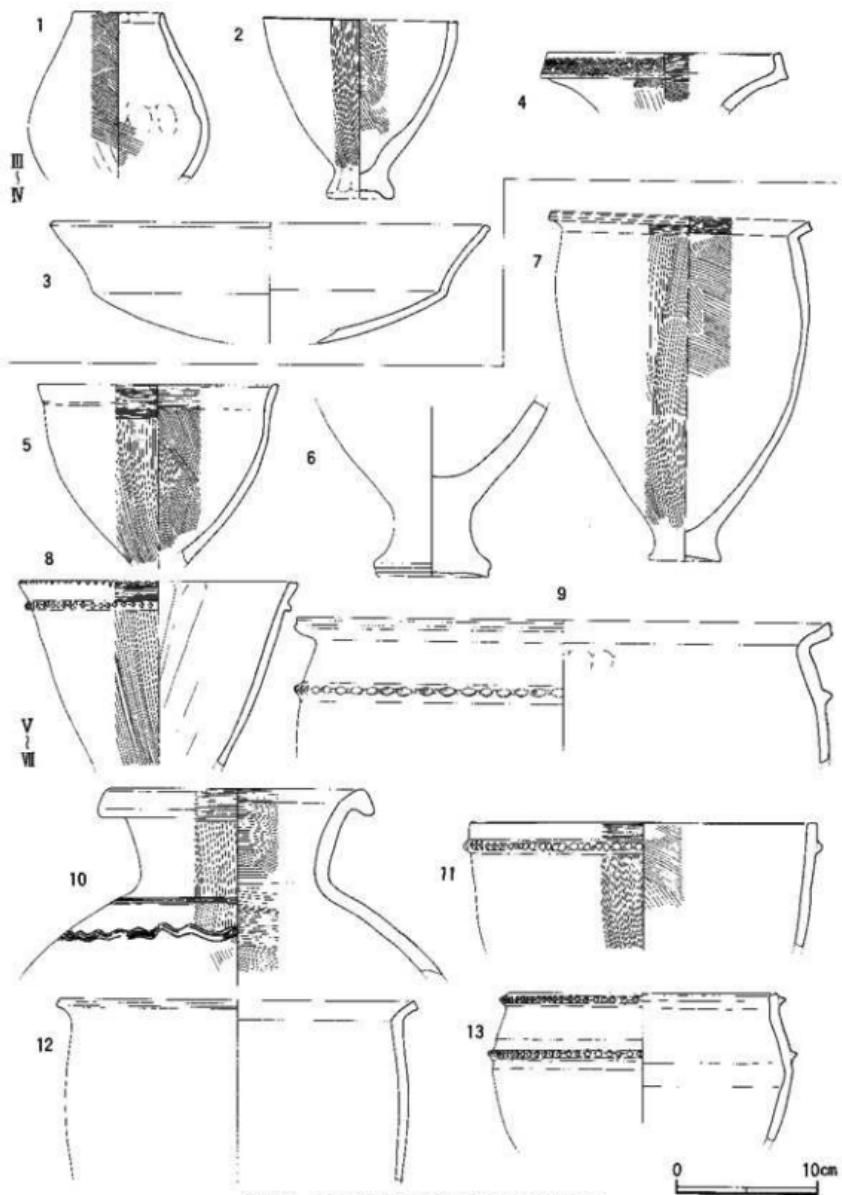
B-5区からB-6区にかけて検出されたもので、直径約10m、深さ7m以上のスリバチ状の形態のもので、性格は不明である。確認面からⅢ層目は土器片を多量に含む層となっており、以下Ⅳ層まで土器片を含むが、V-VI層間の上器片には接合が見られる。

出土遺物 (第67、68図) (図版65)

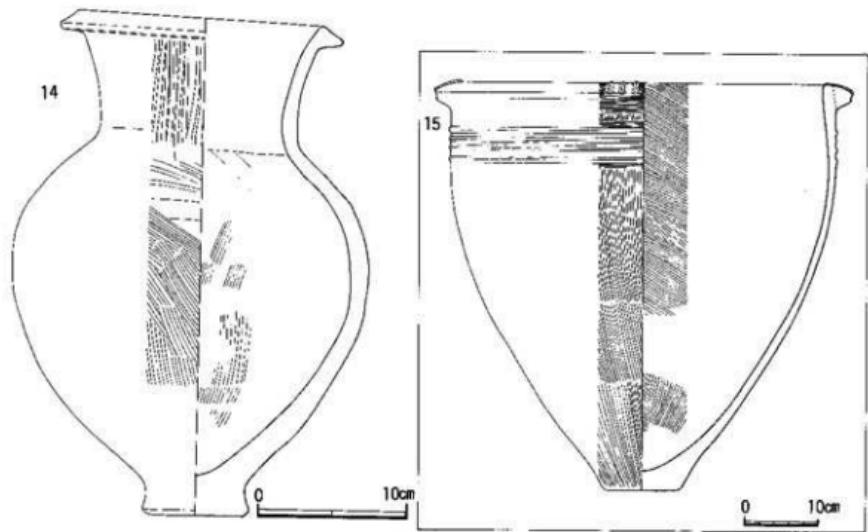
1~4は、Ⅲ、Ⅳ層中の土器で、1は無頸壺、2、3が鉢で、4は安國寺式の複合口縁壺である。5以下はV~VI層中の出土遺物で、5は鉢、10と14が壺で他はすべて壺である。

10、14の壺は、口縁部がへの字に垂れ下るもので、10はハケ目調整を受け、体部に線刻文様が施される。11の頸部外面はヘラミガキが施されている。7、9、12の壺は、短い口縁がくの字に外反するもので、9の体部には刻目突帯が見られる。8、11は、胴部から直線的に立ち上がる口縁直下に刻目突帯を巡らす壺で、8は口唇部にも刻目が見られる。13は夜白式から、板付1式の範疇でとらえられるもので、他に類例が見られないことから、流れ込みと思われる。15は大型の壺で、口縁部に台形の突帯を持ち、体部上方に四条の低い突帯を巡らす。また口縁部上面にも5方向に三条の低い突帯が付けられている。

若干の混在が見られるが、遺物の上からはⅢ、Ⅳ層が弥生時代終末期、V~VI層が弥生時代中期末から後期初頭に位置づけられ、遺構自体の時期は中期末頭に比定されよう。



第67図 スリバチ状大型造構出土遺物実測図



第68図 スリバチ状大型造構出土遺物実測図

4) 1号土器溜り (第69図)

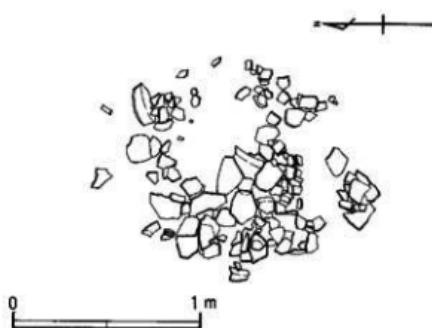
C-5区23号住居跡西に接して、土器片を多量に包含する浅い掘り込みが検出された。
プランは明確にとらえ得なかったが

23号住居跡に切られている。

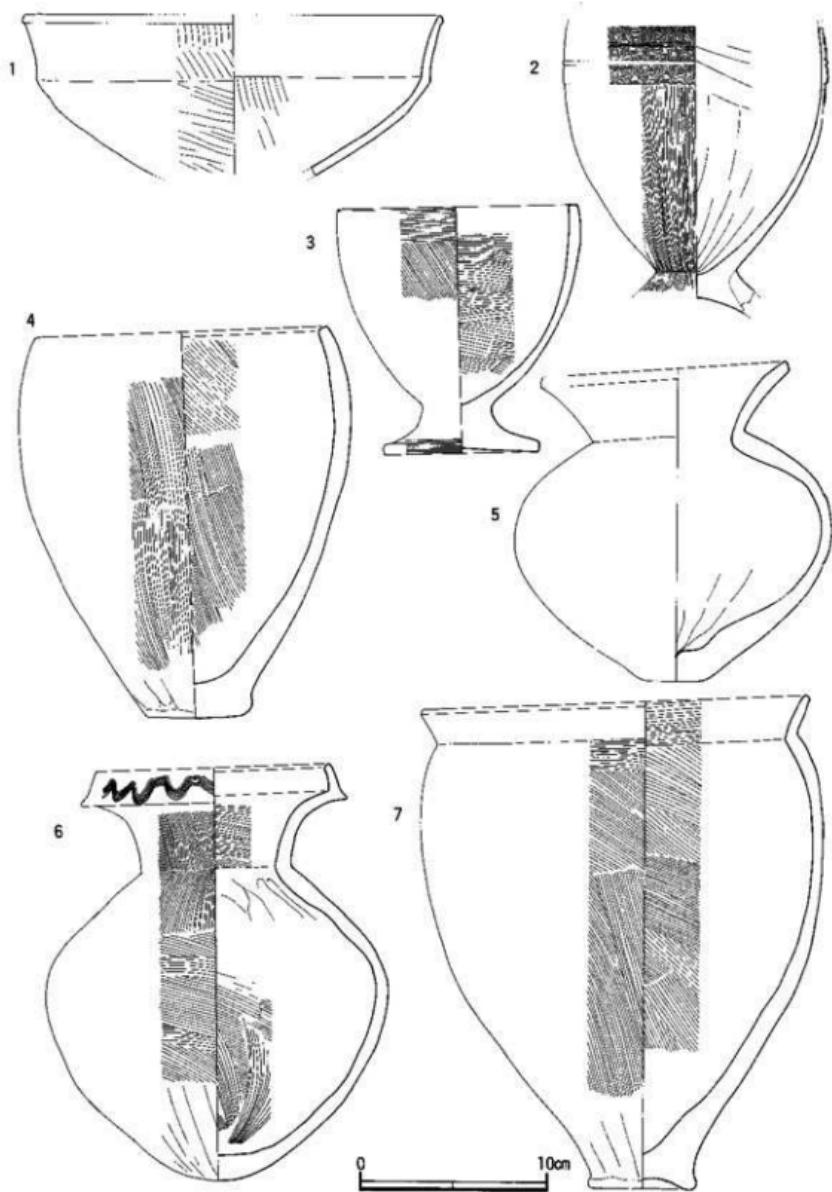
出土遺物 (第70図) (図版66)

1は高环の环部と思われるが、内外面ともにヘラミガキによる調整が行なわれている。2~4は鉢で、2、3は脚を持ち、2は削り出しの波状文帯を持つものである。5、6は壺で、5は單口縁、6は安国寺式の二重口縁壺である。7は甕で、内外面ともハケ目調整の、底部の比較的小型のものである。

時期的には、弥生時代後期末葉～終末期に比定される。



第69図 1号土器溜り実測図



第70図 1号土器溝り出土遺物実測図

5) 1号土塙墓 (第71図) (図版31)

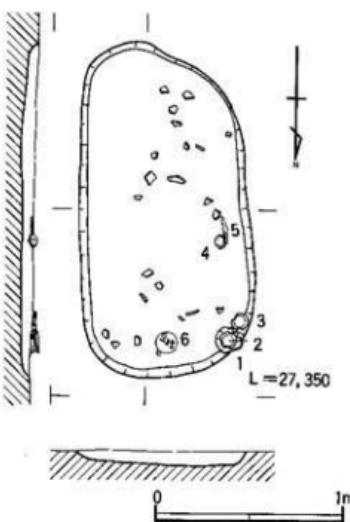
B-5区において検出されたもので全長1.8m、最大幅0.9m、深さは検出状態で約10cmを測る隅丸方形プランのものである。

北端中央部に銅鏡、西端に土師器の壺を1点、重ねて小皿を1点、脇に小皿を1点、中央部西脇に刀子を1点、刀部を南にして供獻されている。

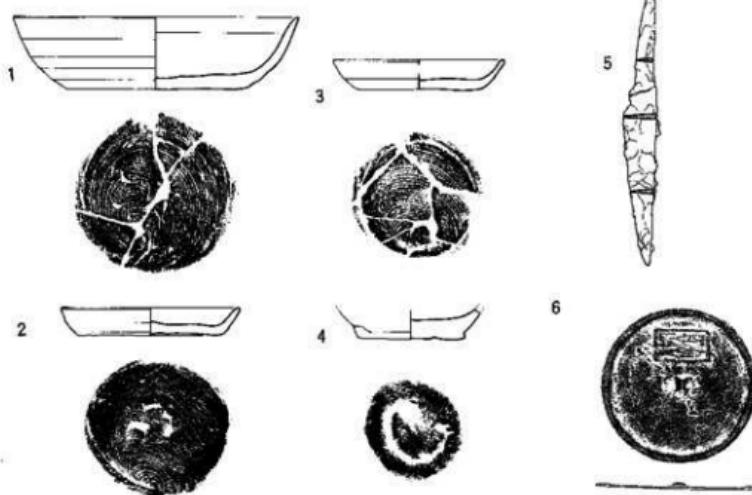
出土遺物 (第72図) (図版67)

1は土師器の壺で糸切り技法による底部切離し、2、3は小皿で、いずれも糸切り底、2は1に重ねられていたものである。4は壺の底部でヘラ切りのものであるが、流れ込みと思われる。5は刀子で全長14.5cmを測る。6は銅鏡で、直径9.6cm、厚さ1mmを測る。裏面に鋲を持ち、文様は陰線の長方形部のみで、それ自体も判然としない。表面には布状の繊維の付着も見られる。

また出土時は表面を上にして置かれており、さらにその上に櫛の様な木質の小片が置かれていた。



第71図 1号土塙墓実測図



第72図 1号土塙墓出土遺物実測図

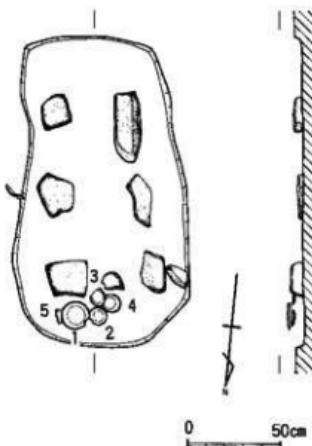
6) 2号土塙墓 (第73図) (図版32)

B-5区にて検出されたもので、1.65m×0.9mの不整形な長方形プランで、長軸をほぼ南北に取る。床面を大型の平坦な砾を6個整然と配し、北端中央付近に、环1点、小皿4点が供献されている。

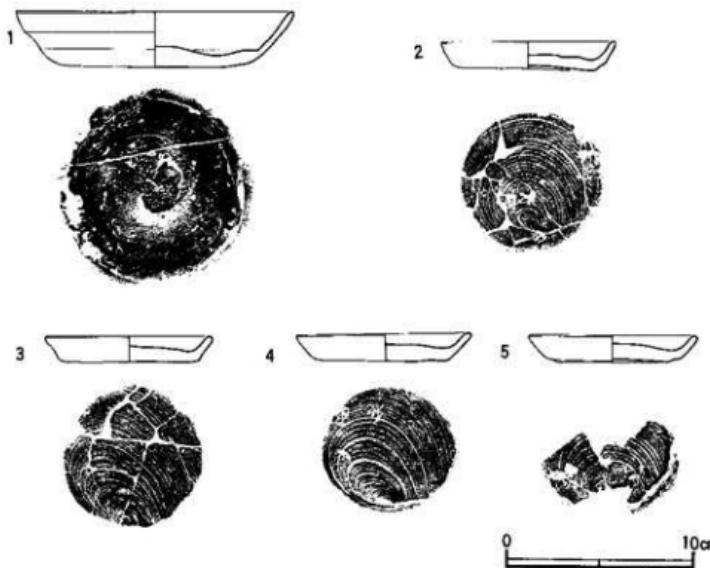
砾は木棺台として使用されたと思われる。

出土遺物 (第74図) (図版68)

1は土師器の环で、口径15cm、底径10cm、器高3cmを測るヘラ切り底のものである。2-5は小皿で、口径は9~9.5cm、底径は6~7.5cm器高1.4cmを測る。小皿はすべて糸切り底で、ヘラ切り底との共存が見られる。



第73図 2号土塙墓実測図



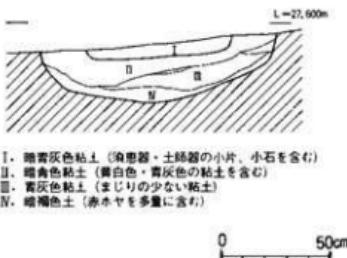
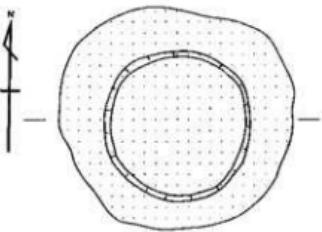
第74図 2号土塙墓出土遺物実測図

7) 粘土土塙 (第75図) (図版26)

C-6区において検出されたもので、直径約1m、深さ約30cm程の掘方の内面に青灰色の粘土を20cm程の厚さではりつけたものである。性格は不明であるが、この粘土内の掘り込み(直径約65cm)中には、粘土と共に極小片の土器器や須恵器が混入しており、古墳時代の所産と思われる。

8) 一字一石経 (図版69)

遺跡内残る御堂(最勝寺跡)周辺の上塙等の遺物に混在して6個の一字一石経が確認されたので紹介する。一字一石経は、経文(現、深、吹、但)4字と梵字(ミオン、モボク)の2字で、梵字は比較的大型の河原石に、経文は小形の河原石に、書かれている。



第75図 粘土土塙実測図

第三章 結語

今回の調査においては、遺構の重複がはげしく、切り合い関係や、その性格等、明確にとらえにくかった部分も多かったが、土塙を中心にセットでとらえられた出土遺物も多数あり、今後の調査における資料や問題点もとられる事が出来たと思われる。

以下各時代ごとにまとめてみると

先土器時代

ナイフ形石器、搔器、尖頭器等、整った形態の良好な資料が出土したが、すべて後世の遺構の埋土中等の出土であり、層的、面的にとらえられた遺物では無かった。出土地点はB-6区を中心とするものであるが、地形的な要因も十分に考えられるものである。

縄文時代

早期を中心とした土器の出土が見られたが、先土器の遺物同様、後世の遺構埋土中よりの出土がほとんどであった。C-6区におけるアカホヤ層下の土塙群が唯一の検出遺構であり、出土遺物により、前平式に比定されるものである。これまで集石に関する考察が中心であった早期遺構の1つに加えられるべき資料であろう。

弥生時代

本遺跡の中心にした土器となる時代で、大きく2時期に分けられる。

1つはスリバチ状大型遺構で、中期後半から後期初頭に比定されるものである。遺構自体の性格は不明であるが、本遺構の他は調査区内に同時期の遺物は見られない。

下城式壺や、口縁突帯～くの字口縁壺等の変化も認められる遺構である。

もう1つは弥生式土器から土師式土器への移行によってゆれ動く問題の時期で、本稿では、弥生時代後期末から終末期としてとらえた時期である。本遺跡中では最も出土遺物の多い時期で、22、26、27、28、30号住居跡、9～19、30号土塙、1号土器溜り、スリバチ状大型遺構第Ⅲ層等が掲げられる。

この時期の遺物中、特異な土器が認められたので若干ふれておく、30号住居跡（第29図2、3、4、5）、18号土塙（第51図1、2）等の脚台付鉢を中心とする土器群で、ハケ目原体のヘラ木口により、波状文（コンバス波文）帯を削り出す非常に薄手の精巧な作りの土器である。波状文帯は細い削り出しの突帯により2重、3重のものもある。他遺跡では、宮崎学園都市遺跡群の浦田遺跡（S A 4、S A 7）に出土例が認められるが、今の所、県外における類例は認められていない。極めて限定された時期の使用が感じられる。

古墳時代

検出された住居跡の内半数以上がこの時代に含まれる。時期的には6世紀代に比定されるもので、2、3、9～14、17、19、20、21、32、37号住居跡等が含まれる。特徴的には、住居跡中央床面に埋甕炉を持つものが大半で、浄土江遺跡第Ⅰ期に含まれるものである。最も近接する古墳は、北に対面する丘陵上に大正年間まで存在していたとされる曾井古墳で詳細は不明であるが、貨泉及び方格規矩四神鏡片が出土したとされる。また赤江古墳も近辺の古墳群として掲げられる。

奈良、平安時代

とらえられた遺構は29、36号住居跡で、奈良末から平安時代前半に位置づけられるものと思われる。

この時代の遺物は、他の遺構埋土中からも出土しているが、C-6区を中心に分布する。

中世

中世にかかる遺構、遺物の内、明確にとらえ得たのは、1、2号土塙墓のみである。他は遺跡内に残る最勝寺跡周辺及びその西区に散在し、一字一石経等の出土を見る西区において、掘立柱式建物の柱穴も検出されたが明確にとらえられなかった。

当初予想された中世城郭等の遺構では無く、文献に登場する「長命寺」跡の可能性が高い。

1、2号土塙墓に近い時期の所産と思われるが、2号土塙墓の供獻土器にはヘラ切りと糸切りの共存が見られる。現在、山内石搭群の調査によって求められているヘラ切りから糸切りへの変換時期が13世紀～14世紀前半とされており、また糸切り底が大半を占めるのが15世紀代と考えられる様である。本土塙墓における鏡、刀子、木棺使用の可能性も加味し、長命寺に関わる人物埋葬を想定した上で、本土塙の時期は15世紀～16世紀前半代に位置づけておきたい。

図 版



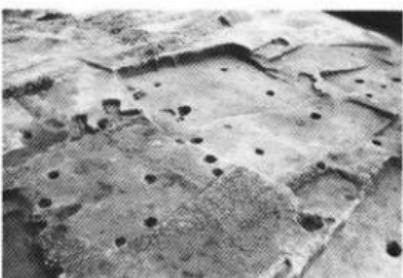
図版1 遺跡遠景



図版2 調査風景



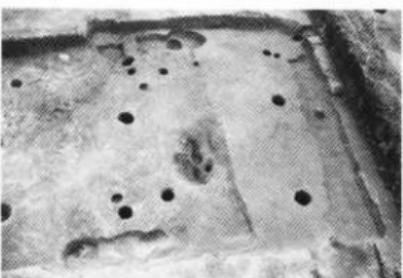
図版3 2・3号住居跡



図版4 8・9・10・11・32号住居跡



図版5 6号住居跡



図版6 12号住居跡



図版7 5号住居跡



図版8 4·13·14·15·16·33·34号住居跡



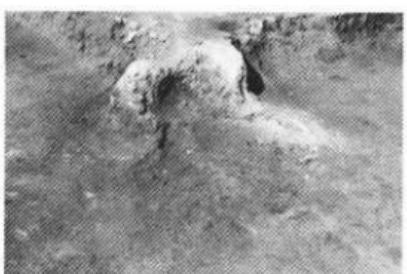
図版9 17号土堆



図版10 16号土堆



図版11 17·18号住居跡



図版12 18号住居跡



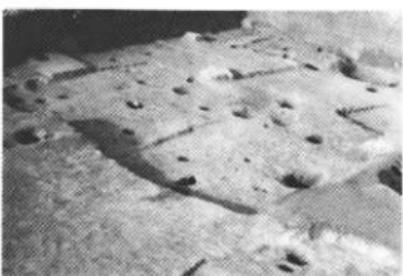
図版13 7号住居跡



図版14 30号住居跡



図版15 19号住居跡



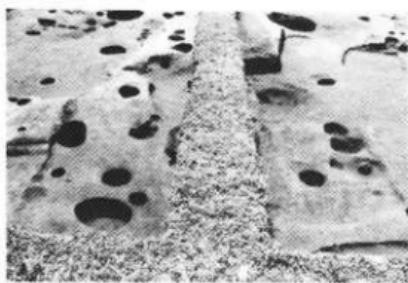
図版16 20・23号住居跡



図版17 24・22・31号住居跡



図版18 25号住居跡



図版19 21号住居跡



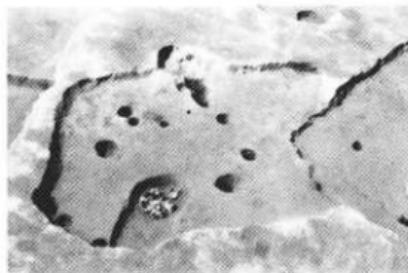
図版20 37・38号住居跡 18号土塙



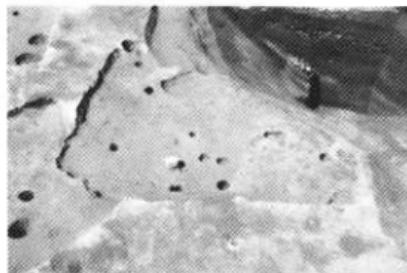
図版21 10・11・12・13・14号土塙



図版22 26号住居跡



図版23 27号住居跡 19号土塙



図版24 29・36号住居跡



図版25 スリバチ状大型遺構



図版26 粘土土塚



図版27 繩文早期土塚群



図版28 C-4区重複遺構群



図版29 C-3区遺構群



図版30 5号土塚



图版31 1号土坑墓



图版32 2号土坑墓



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5



5-6



5-7



5-8



5-9



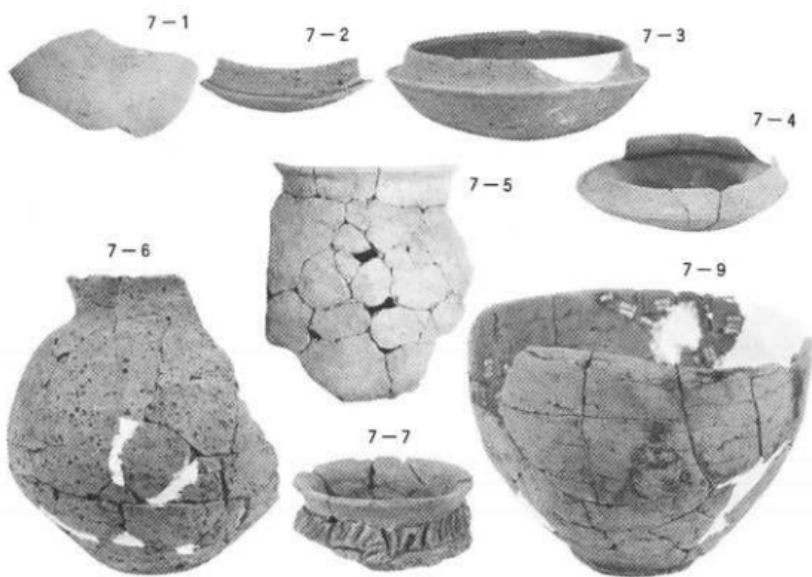
5-10

5-11

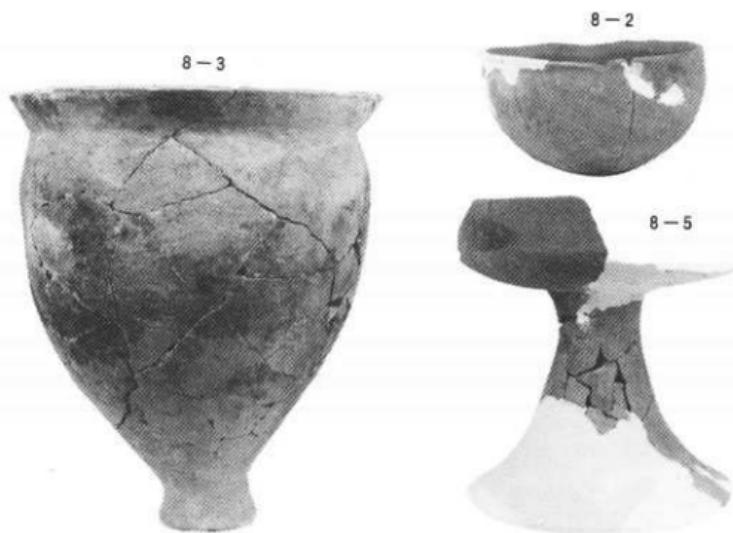


5-12

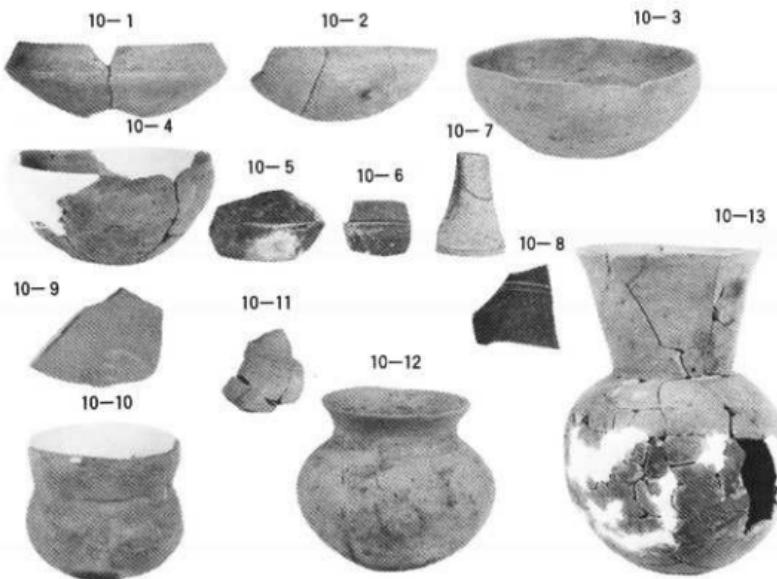
图版33 2号住居跡出土遺物



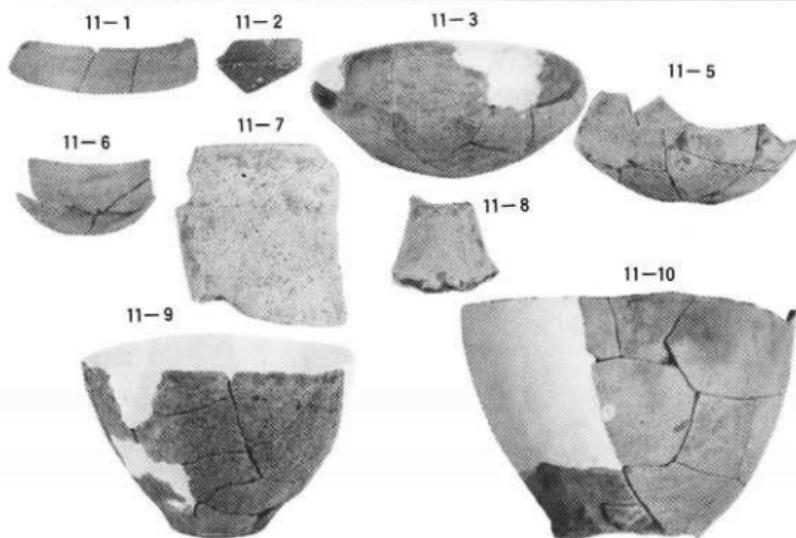
图版34 3号住居跡出土遺物



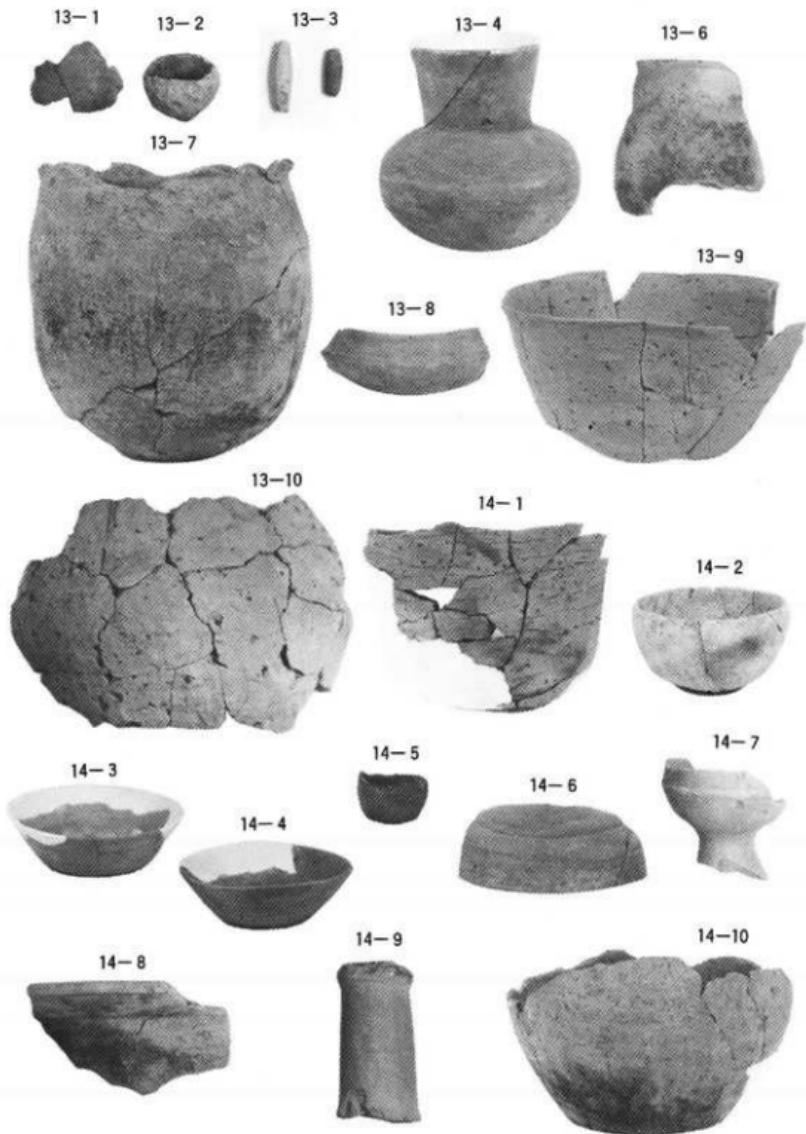
图版35 9号土塙出土遺物



图版36 6号住居跡出土遺物



图版37 12号住居跡出土遺物



图版38 8·9·10·11号住居跡出土遺物

16-1

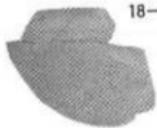


16-2



图版39 32号住居跡出土遗物

18-1



18-2



18-3



18-4



图版40 5号住居跡出土遗物

21-2



21-3



21-4



21-5



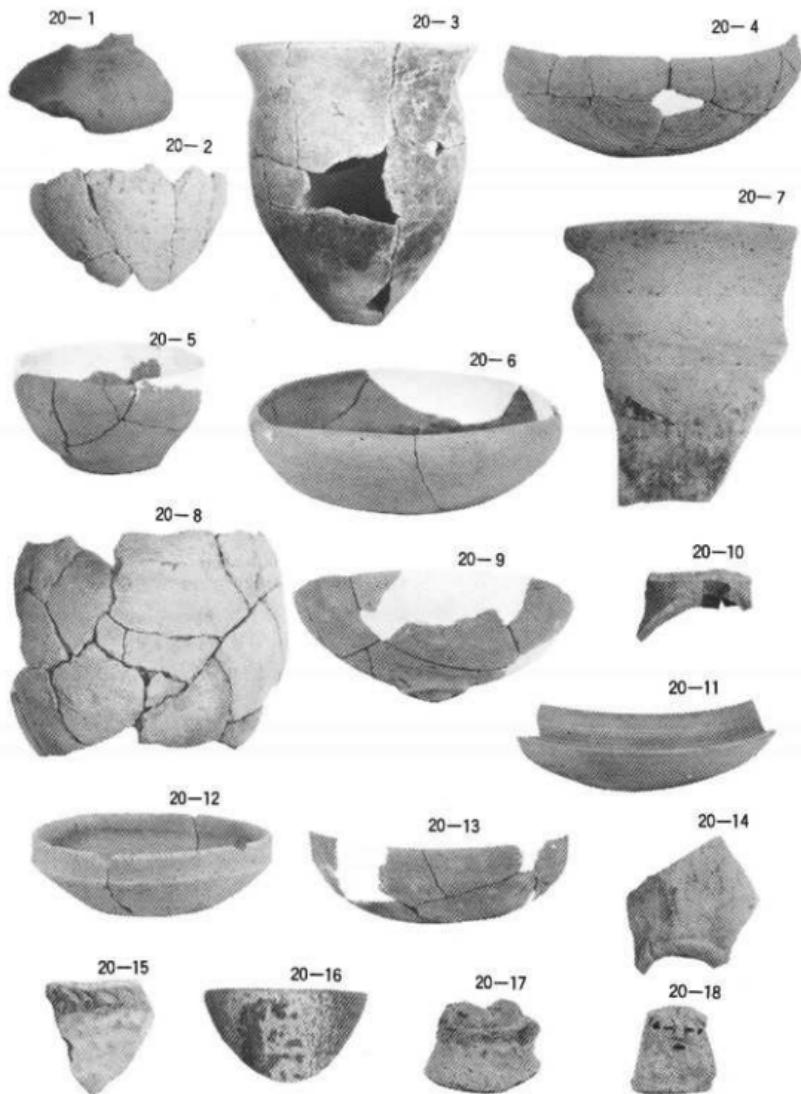
21-7



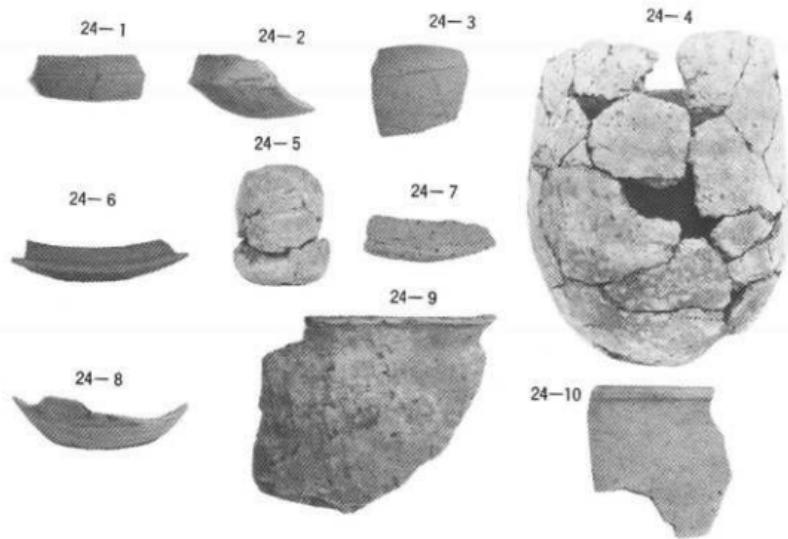
21-6



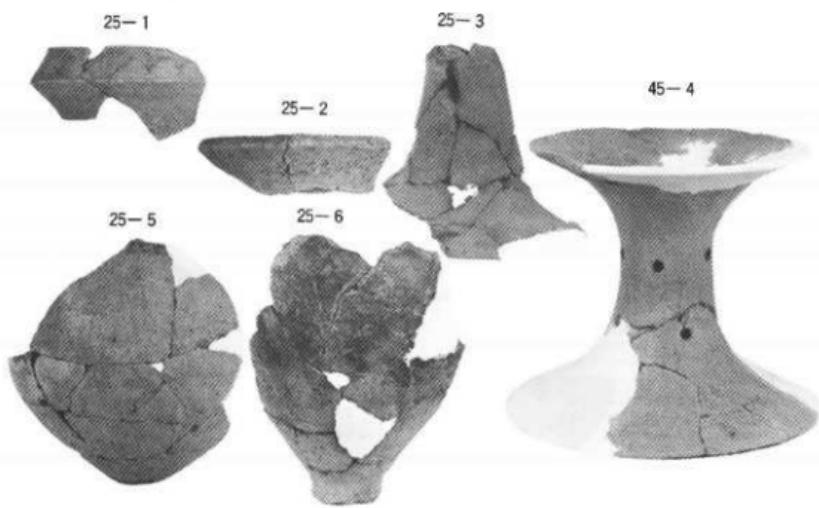
图版41 16·17号土坑出土遗物



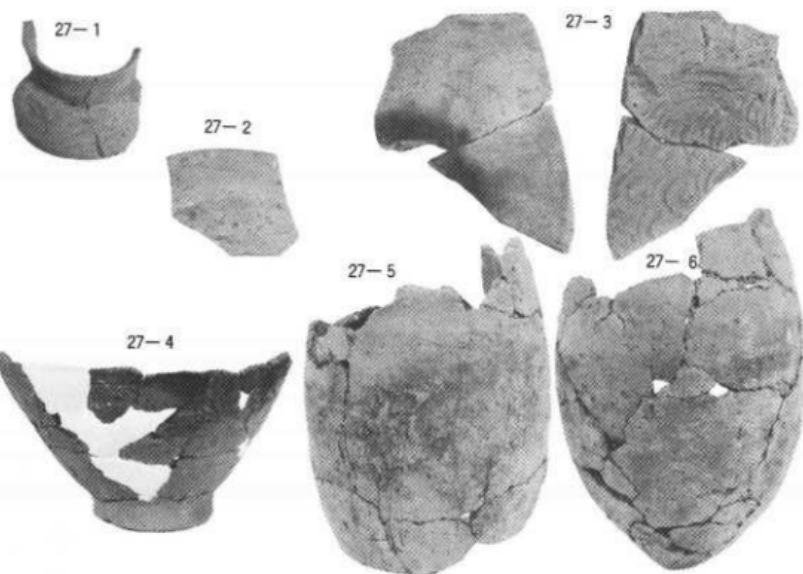
图版42 4·13·14·15·33·34号住居跡遺物



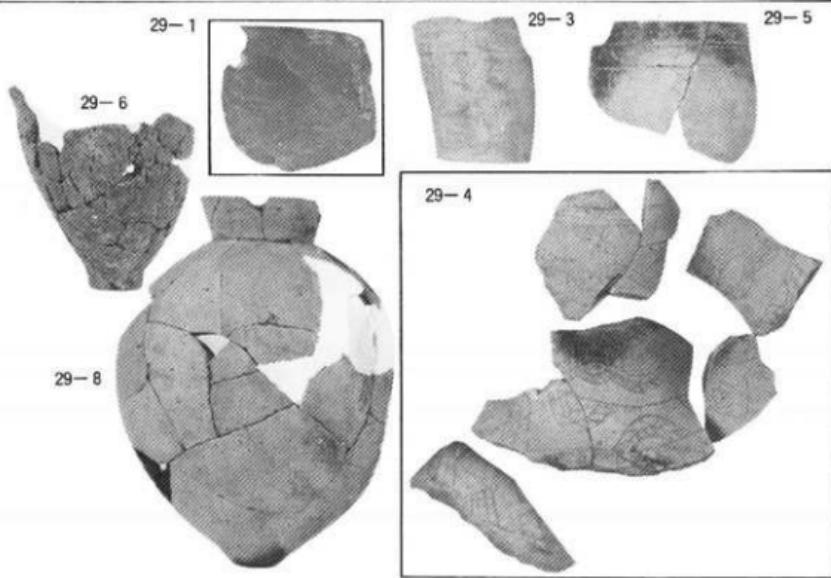
图版43 17·18号住居跡出土遺物



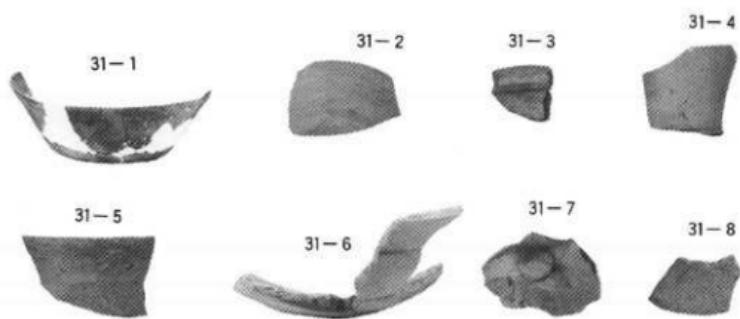
图版44 30号土坑出土遺物



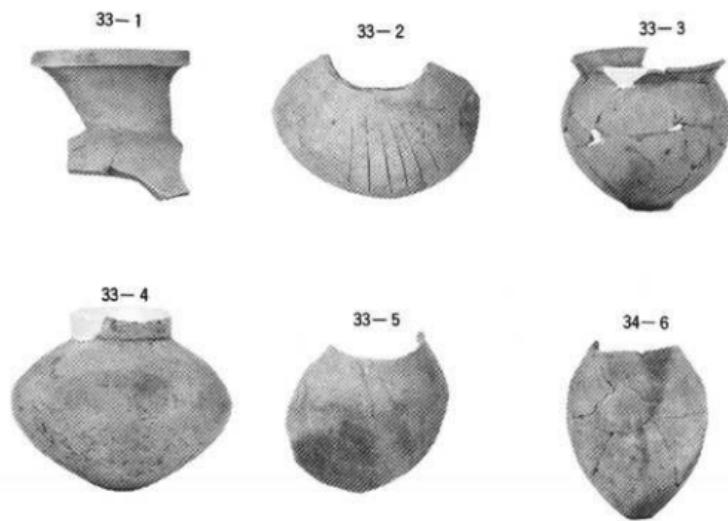
图版45 7号住居跡出土遺物



图版46 30号住居跡出土遺物



图版47 25号住居跡出土遺物



图版48 22号住居跡出土遺物

34-7



34-8



34-9



34-10



35-11



35-12



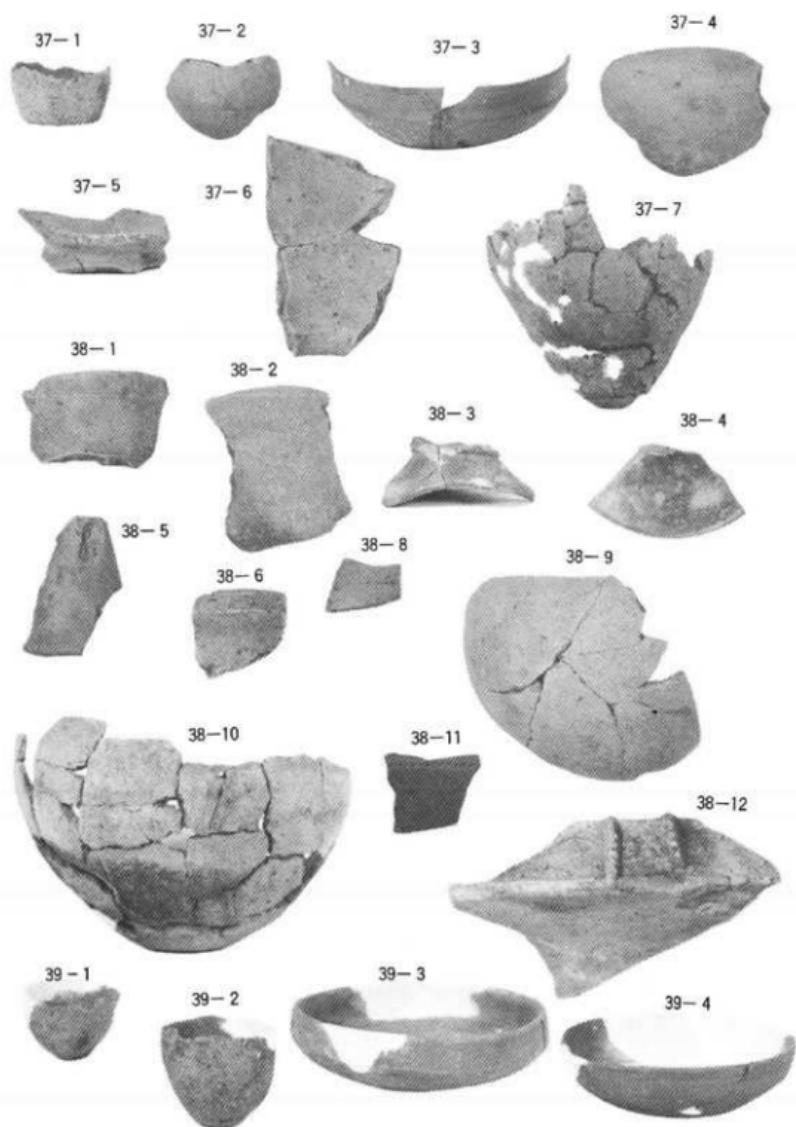
35-13



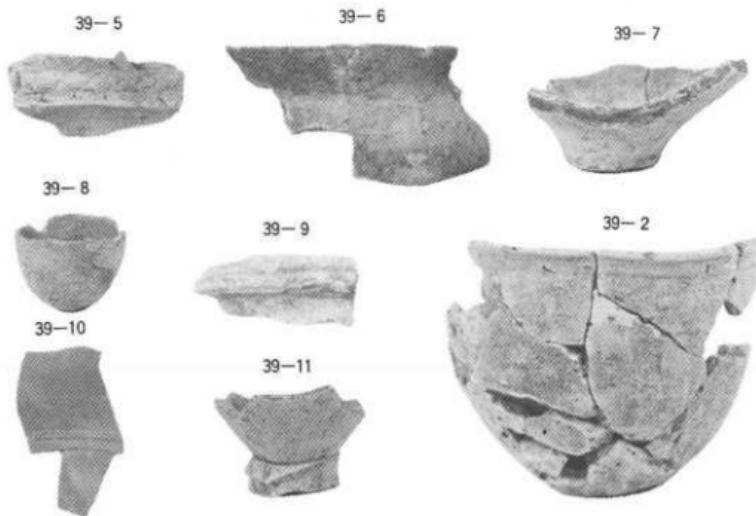
35-14



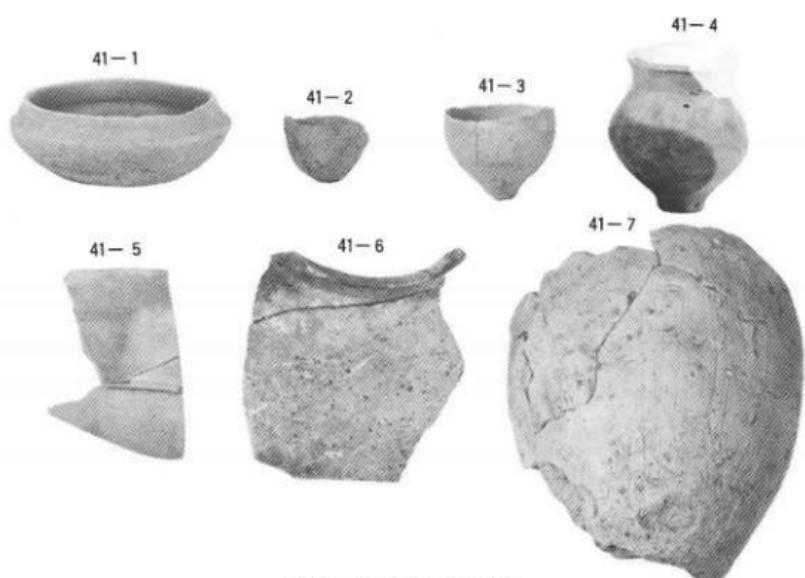
图版49 22号住居跡出土遺物



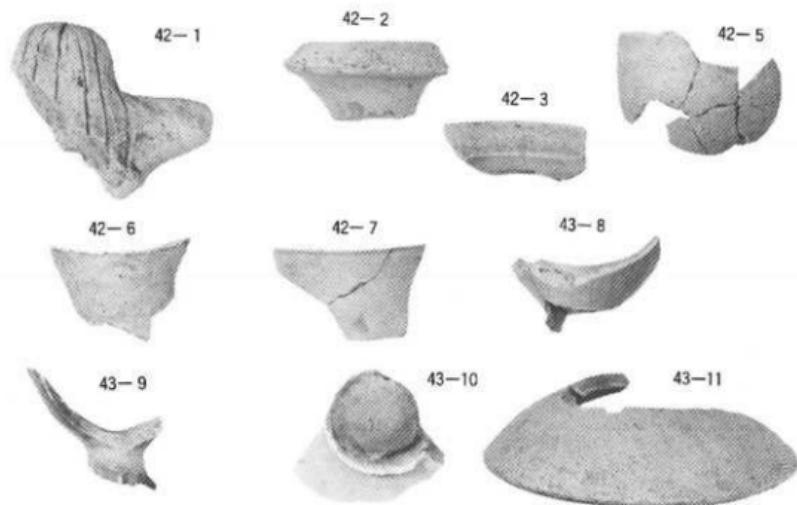
図版50 19・20・23・24・35号住居跡出土遺物



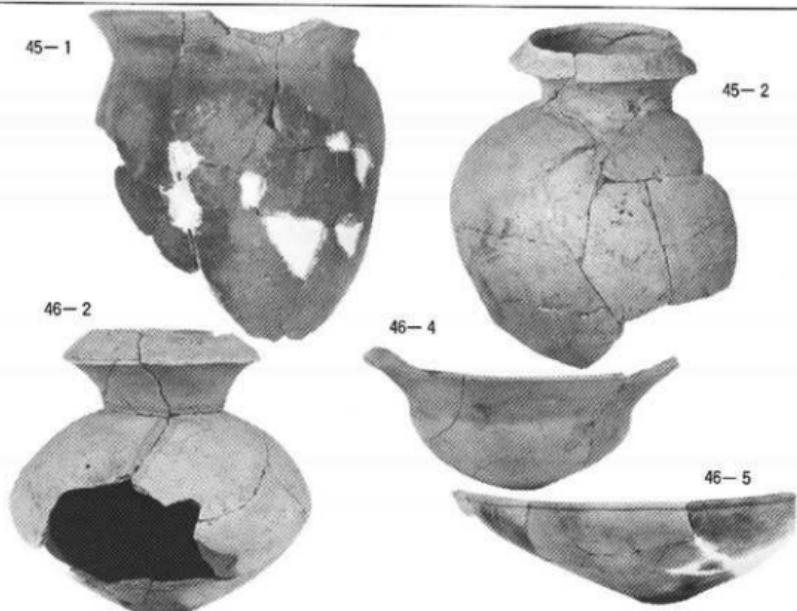
図版51 23・24号住居跡出土遺物



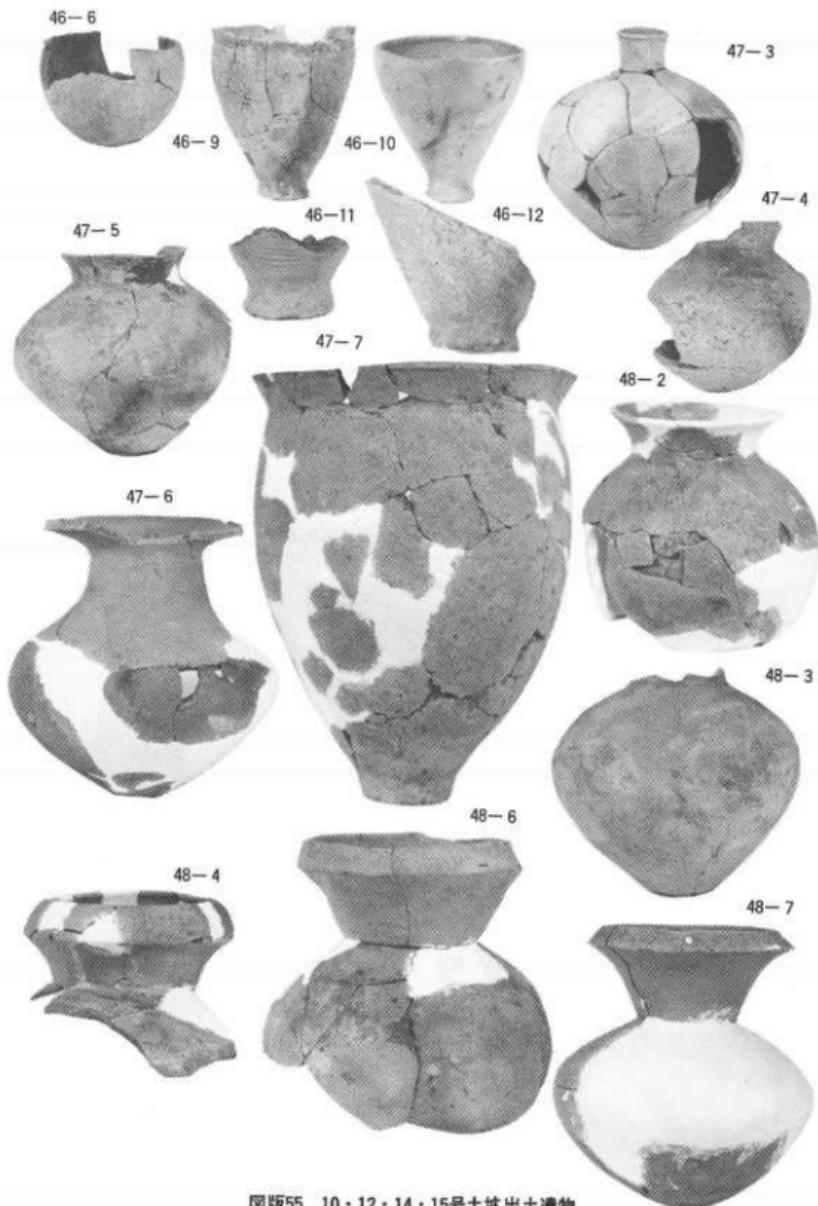
図版52 21号住居跡出土遺物



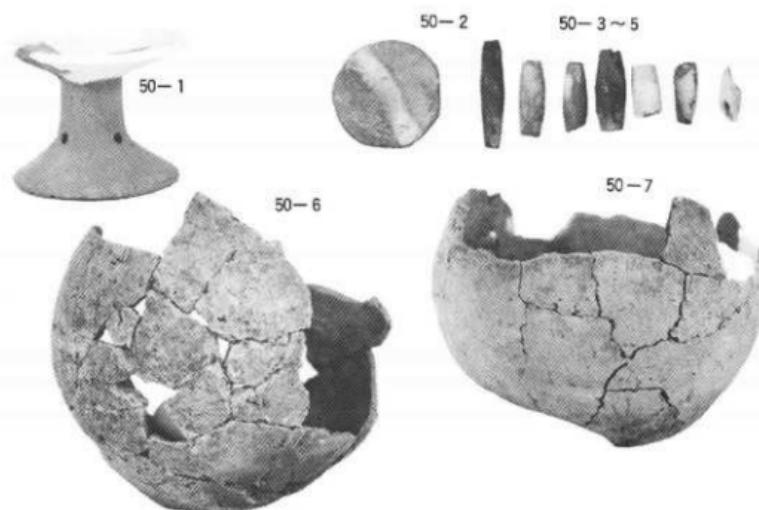
図版53 28号住居跡出土遺物



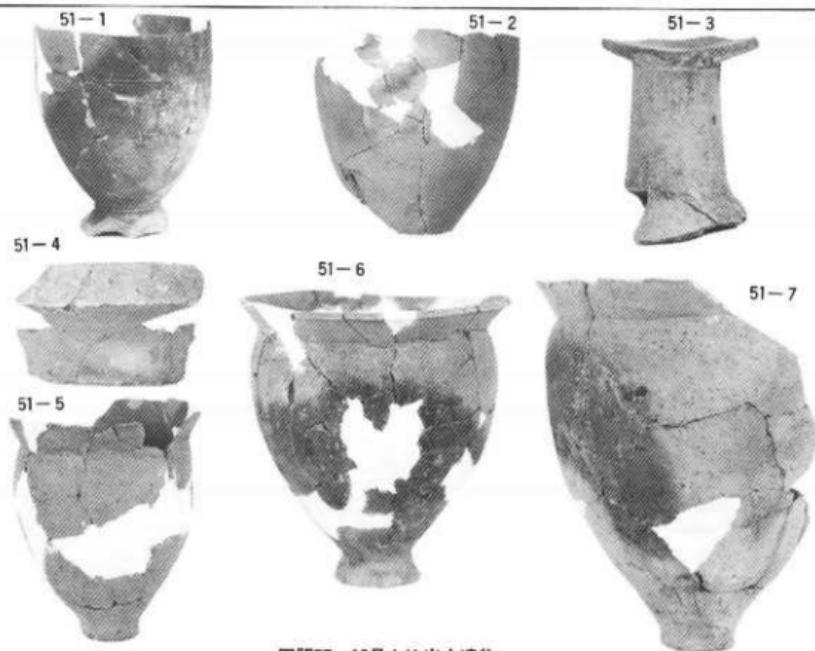
図版54 10・12号土坑出土遺物



图版55 10·12·14·15号土坑出土遗物



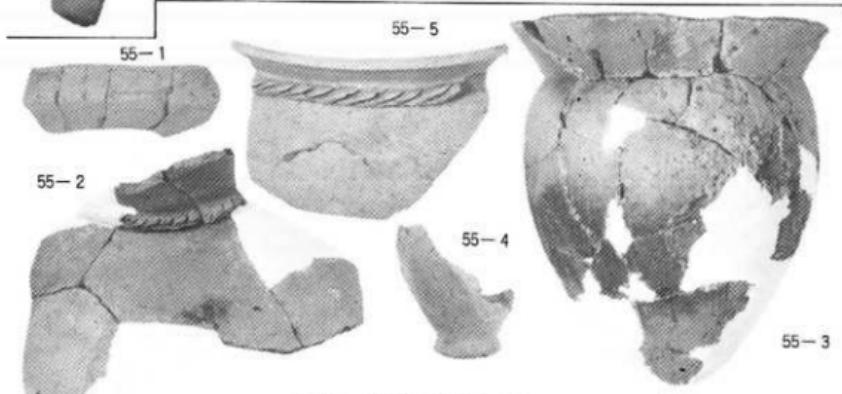
図版56 37号住居跡出土遺物



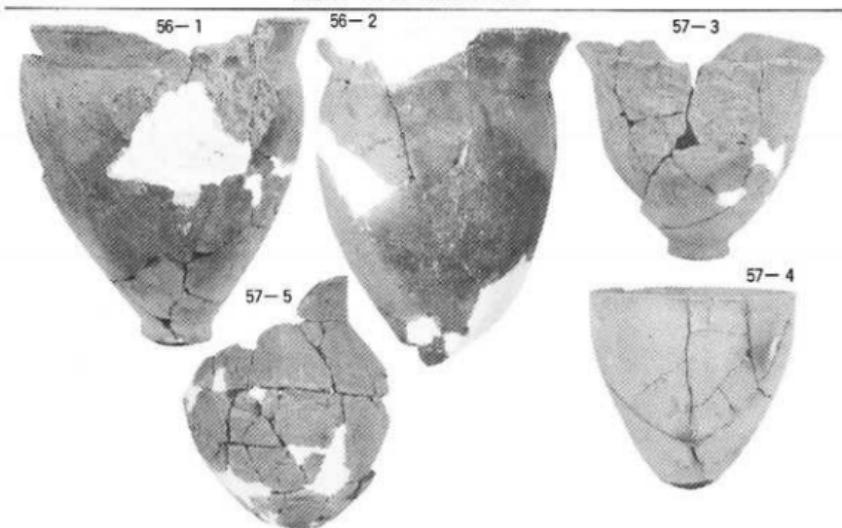
図版57 18号土塙出土遺物



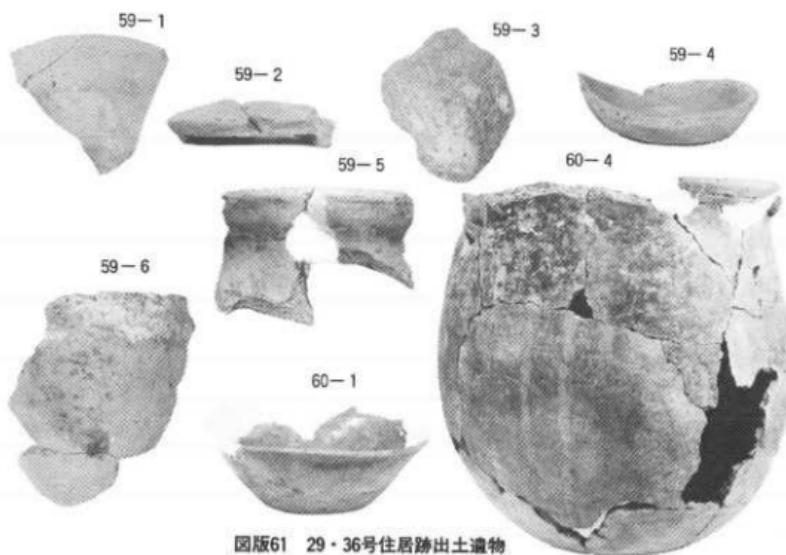
圖版58 26號住居跡出土遺物



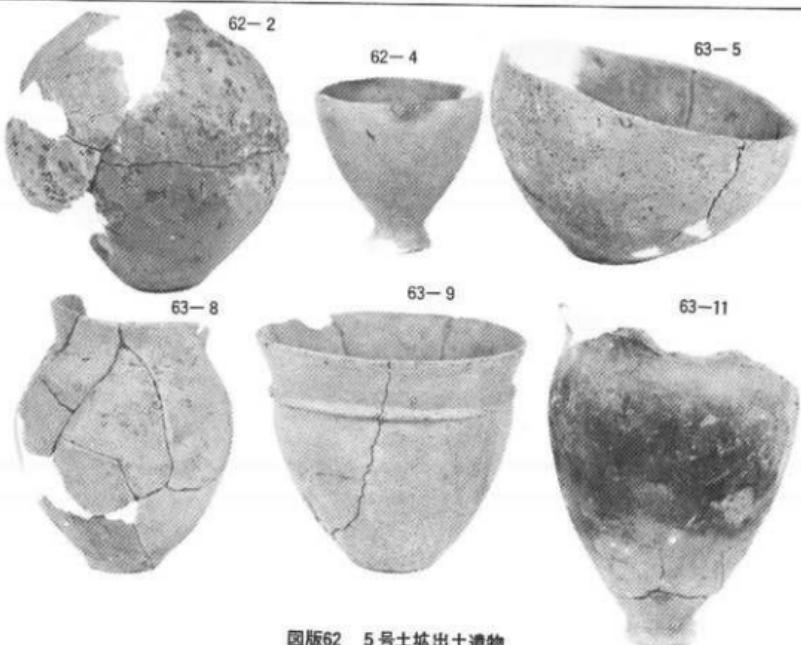
圖版59 27號住居跡出土遺物



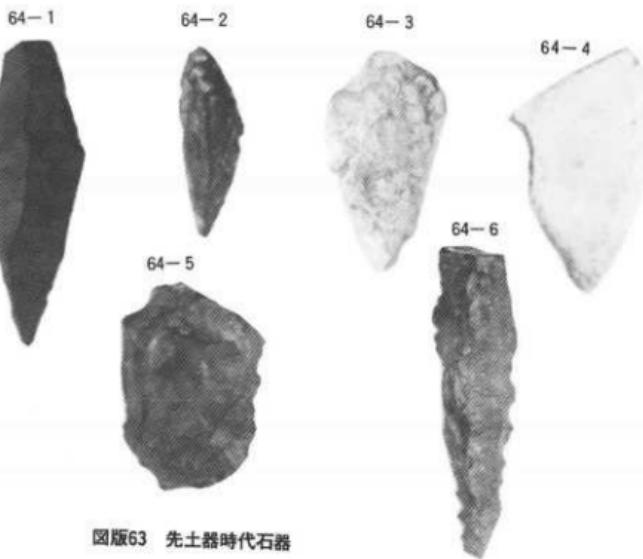
圖版60 19號土坑出土遺物



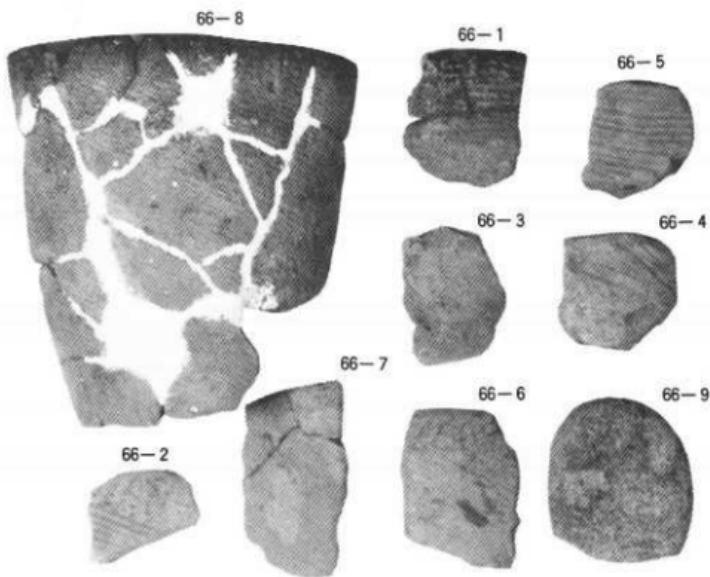
图版61 29·36号住居跡出土遺物



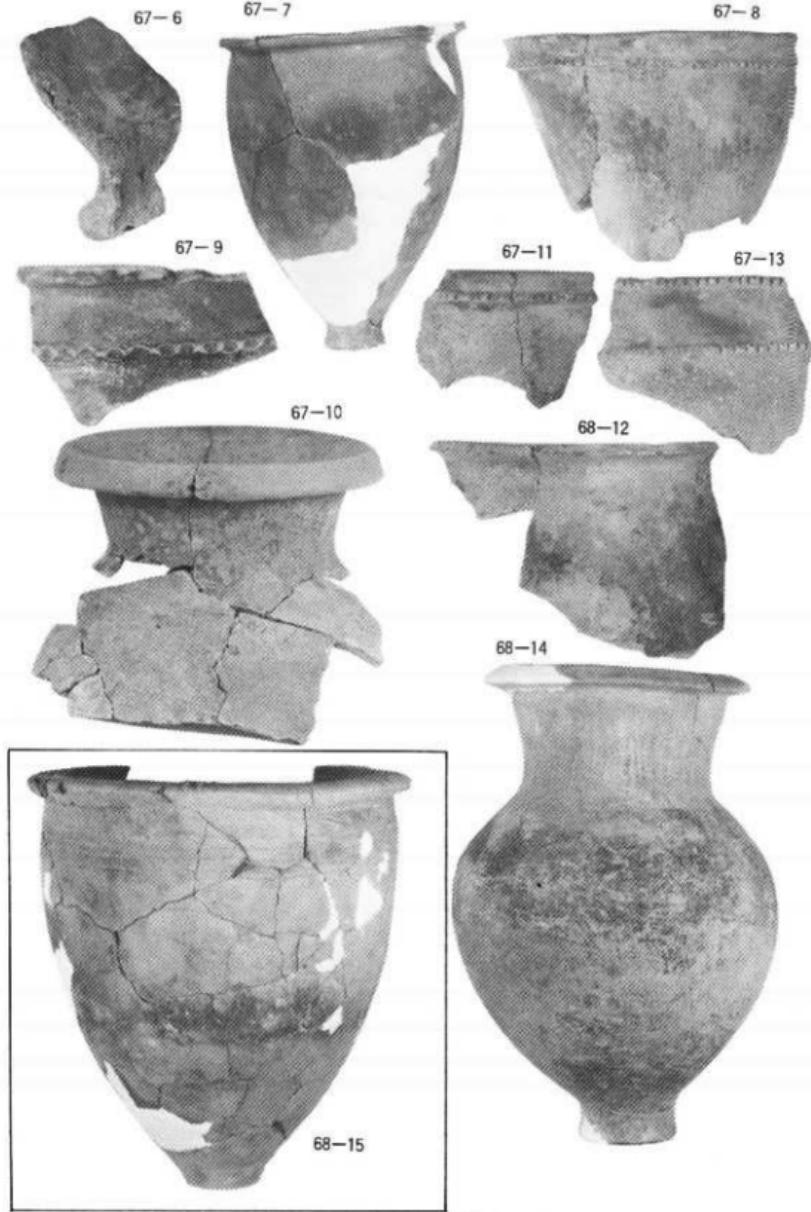
图版62 5号土塙出土遺物



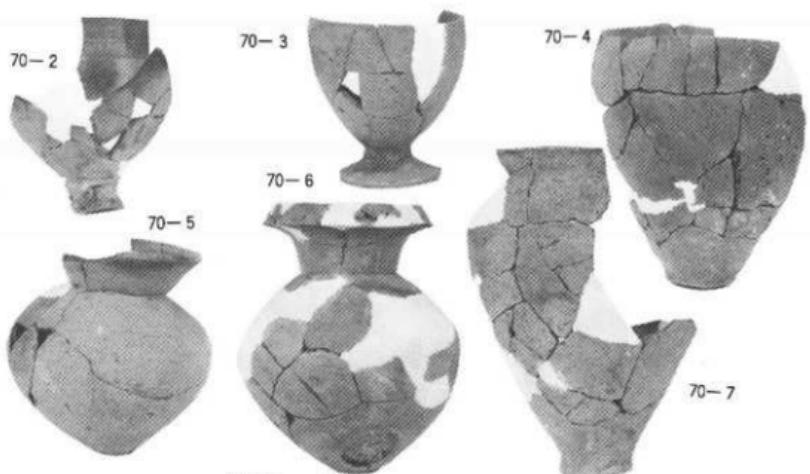
図版63 先土器時代石器



図版64 縄文早期遺物



図版65 スリバチ状大型構出土遺物



図版66 一号土器窯出土遺物



図版67 一号土塚墓出土遺物



図版68 二号土塚墓出土遺物



図版69 2号土塚墓出土遺物



調査に際し、地権者及びその御家族、[REDACTED]の方々には、炎天下、労働力まで提供していただきなど、御理解、御協力をいただいた。記して感謝したい。



源藤遺跡

宮崎市文化財調査報告書

発行年月日 昭和62年3月

発 行 宮崎市教育委員会

印 刷 (株)愛文社印刷所